

平成 28 年度

博士論文（指導教授 高橋弥守彦）

現代中国語における内外への変件事象に見られる

非対称性の認知言語学的研究

— 「移動」・「存在」事象を併せて—

大東文化大学大学院 外国語学研究科
中国言語文化学専攻 博士課程後期課程
(学籍番号 14231101)

神 野 智 久

目 次

目 次	i
凡例・用語説明	v
第 I 部 序論	1
第 1 章 序章	1
1. はじめに	1
1.1 研究目標	1
1.2 研究意義	1
1.2.1 非対称性の定義	1
1.2.2 移動表現の対称的側面と非対称的側面	3
1.3 研究方法	12
1.3.1 認知言語学における言語観	13
1.3.2 認知言語学における「文法」	16
1.3.3 認知言語学を用いる妥当性	17
1.4 研究対象	19
1.5 本研究の構成	22
1.6 おわりに	24
第 2 章 理論的背景	25
2. はじめに	25
2.1 解釈	25
2.1.1 ベース・プロファイル	26
2.1.2 心的走査	32
2.1.3 パースペクティブ	34
2.2 抽象化	37
2.2.1 スキーマについて	37
2.2.2 図表について	38
2.2.3 スキーマと意味拡張について	39
2.3 おわりに	42
第 II 部：分析①	43
第 3 章 移動事象について	43
3. はじめに	43
3.1 中国語における移動表現	43

3.1.1 移動事象の構成要素.....	43
3.1.2 地の類型.....	49
3.2 移動事象の認知的側面—ベース・プロファイルから—.....	52
3.2.1 ベース・プロファイル.....	52
3.2.2 プロファイルによる概念獲得.....	52
3.2.3 田中・松本（1997）における付随要素の分類.....	54
3.2.4 付随要素の多様性.....	56
第4章 存在事象について.....	69
4. はじめに.....	69
4.1 存現文の基本事項—先行研究から—.....	69
4.1.1 存現文の定義.....	69
4.1.2 存現文の体系.....	70
4.1.3 本研究の着眼点.....	71
4.2 存現文の定義①—参照点構造から—.....	72
4.2.1 存現文の語順.....	72
4.2.2 存現文の文法的制約.....	73
4.3 存現文の定義②と体系付け—ベース・プロファイルから—.....	75
4.3.1 上位カテゴリー.....	75
4.3.2 下位カテゴリー.....	79
4.4 おわりに.....	81
第Ⅲ部：分析②.....	83
第5章 “進” フレーズ再考.....	83
5. はじめに.....	83
5.1 “進” の統語的特徴について.....	84
5.1.1 “進” と組み合わせる目的語について.....	84
5.1.2 “進” の無標性について.....	84
5.1.3 パラフレーズ.....	85
5.2 刘月华主编（1998）検討.....	86
5.2.1 刘月华主编（1998）における分析.....	86
5.2.2 刘月华主编（1998）検討.....	88
5.3 動詞分類再検討—包入から—.....	92
5.3.1 自主移動.....	92
5.3.2 使役移動.....	95
5.4 “進” の拡張義再検討—身体性と容器から—.....	98

5.4.1 “進”の拡張義	98
5.5 おわりに.....	102
第6章 “出”フレーズ再考	103
6. はじめに	103
6.1 “出”の統語的特徴について	104
6.1.1 “出”と組み合わせる目的語について	104
6.1.2 “出”の有標性について	104
6.1.3 パラフレーズ	105
6.2 刘月华主编(1998)における分析と問題点	107
6.2.1 刘月华主编(1998)における分析	107
6.2.2 刘月华主编(1998)検討	110
6.3 動詞分類再検討—包入から—	112
6.3.1 自主移動	112
6.3.2 使役移動	114
6.4 “出”の拡張義再検討—身体性と容器から—	117
6.4.1 “出”の拡張義	117
6.4.2 意味上の相性について	121
6.5 おわりに.....	122
第7章 “進”と“出”の非対称性について.....	124
7. はじめに	124
7.1 言語事実—“進”と“出”の非対称性—	124
7.1.1 非対称①：“進”は起点と共起不可である	124
7.1.2 非対称②：“出”は“里”と共起不可である	125
7.1.3 非対称③：“出”は“進”と比して有標である	125
7.1.4 非対称④：“出”はパラフレーズに豊富である	127
7.1.5 非対称⑤：“出”は派生義に豊富である	127
7.2 分析—連続性—	128
7.2.1 連続性とは—肯定・否定を例に—	128
7.2.2 内外への位置変化の連続性に	130
7.2.3 外から内への位置変化は内から外への位置変化に先行する	131
7.2.4 内から外への位置変化は起点を喚起する	133
7.3 おわりに.....	134
第IV部：終論	135
終章：全体のまとめと今後の展望.....	135

8.1 第I部のまとめ	135
8.1.1 第1章のまとめ	135
8.1.2 第2章のまとめ	136
8.2 第II部のまとめ	137
8.2.1 第3章のまとめ	137
8.2.2 第4章のまとめ	137
8.3 第III部のまとめ	137
8.3.1 第5章のまとめ	138
8.3.2 第6章のまとめ	138
8.3.2 第7章のまとめ	138
8.4 全体のまとめと今後の展望	139
8.4.1 全体のまとめ	139
8.4.2 今後の課題と展望	139
参考文献（アルファベット順）	141
日本語	141
中国語	144
英語	145
用例出典	148
索引	149
謝辞	エラー! ブックマークが定義されていません。

凡例・用語説明

○本文中に用いられる記号について○

cf. : 参照せよ

* : 非文

? : 容認度が低い

《》: 言語資料（言語資料の中には、書物ではないニュース、コラムなども含まれるが、筆者自身の作例ではない言語資料は、全て《》で表す。用例出典は、p.150を参照のこと。）

○参考文献について○

参考文献に「～～訳（監訳）」と表記されている文献は、原典の後ろに出典が明記してある。なお、著者（訳者含む）が2名以上いる場合は両者の姓のみを、3名以上いる場合は最初に表記されている訳者の姓のみを本文中に表記する。

例 1)

【本文中】岩男ほか訳（2003）

↓

【参考文献】

Goswami, U. 1998 *Cognition in children*, Psychology Press. (岩男卓実・上淵寿・小池若葉・富山尚子・中島伸子 (2003) 『子どもの認知発達』新曜社)

例 2)

【本文中】堀江・パルデシ（2009）

↓

【参考文献】

堀江薫・プラシャント・パルデシ（2009）『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』研究社

○用例・引用について○

出典が表記されていない用例は、全て作例である。また、用例や引用の訳の横に出典が表記されていないものは、全て拙訳である。拙訳か出典元の訳か表示しづらいものにはその都度注釈で明記する。また、第3章において挙げられている動詞の訳は、主に『白水社 中国語辞典』（白水社）を参考にしている。

○図表について○

参考文献における図表は、該当する図表を参考に描き直している。そのため、直接引用ではない図表には全て「改変」と記してある。

第 I 部 序論

全 2 章で構成される第 I 部では、分析（第 II 部、第 III 部）の土台となる前提的知識を概観する。第 1 章では、研究目標、研究意義、研究方法、研究対象を中心に述べ、本研究の大枠を示す。第 2 章では、本研究の研究方法である認知言語学の理論的背景を詳述する。

第 1 章 序章

1. はじめに

上記のように、本章は、研究目標、研究意義、研究方法、研究対象の順に述べ、本研究の概要を明確に提示することを目的とするものである¹。また、本研究の構成と各章の論点についても述べる。

1.1 研究目標

本研究の最終的な目標は、現代中国語における内外への変件事象に見られる非対称性 (asymmetry) を記述し、これら非対称性を、認知言語学 (cognitive linguistic) の観点から説明することにある。変件事象は、物理的な移動を表す「位置の変化」と、物理的な移動を表さない「状態の変化」にわけられる。また、「最終的な目標」としたのは、本研究は、非対称性について分析する上で、移動事象 (motion events) と存在事象 (existence events) にも、原理的な説明を与えることを目標としているためである。具体的な研究対象については、1.4 節で述べる。

1.2 研究意義

本節では、非対称性の定義と移動表現の対称的側面と非対称的側面について述べることにより、本研究の研究意義を提示する。

1.2.1 非対称性の定義

まず、「非対称性」という用語の定義づけから始める。本研究は、非対称性を次のように定義づける。

¹ チョムスキー (Noam Chomsky) は、「ある分野がこれからどのように発展していくかを判断するのに良い方法というのは、『博士論文が書けるような研究テーマにはどのようなものがあるか』という問いを立ててみることです」と述べている (福井・辻子訳 (2011 : 376))。

(1) 非対称性とは、論理的に対称的な基盤を持ちながら、対称的にならない一連の事例の総称である。

非対称性の例として、肯定と否定を挙げる。肯定と否定の対称的基盤は、概略的に次のように図示可能である。次例(2)(3)と併せて参照されたい。

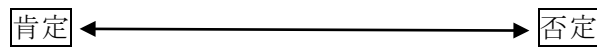


図.1 肯定と否定

- (2) a.彼は日本人 (だ/∅)。
b.他 (是/∅) 日本人。
- (3) a.彼は日本人 (では/*∅) ない。
b.他不 (是/*∅) 日本人。

図.1のように、肯定と否定は相反する関係にあり、論理的には対称をなすといえる。しかし、上例(2)(3)からもわかるように、言語事実から見て両者は対称的とはならない。日本語、中国語は、共に肯定文では、コピュラマーカ (日本語:「だ(です)」; 中国語“是”) は省略可能であるが、否定文ではコピュラマーカ の省略は不可能である。よって、肯定と否定には非対称性が観察されるといえる。

以上のような考えに基づき、次に、外から内への位置変化を表す“進”²、内から外への位置変化を表す“出”(cf.刘月华主编(1998:5))の対称的基盤を、次の図.2のように概略的に図示する。

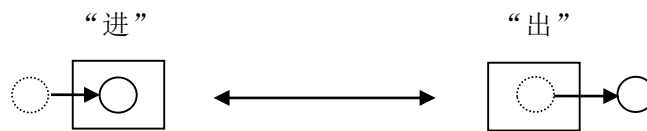


図.2 “进”と“出”

図.2のように、内外への位置変化もまた、肯定・否定と同じように相反することから、対称的基盤を持ち合わせているといえる。そして、両者にもやはり、非対称性が見られる。事例として、両者のイディオムを取り上げる。次例を参照されたい。

² 類義表現として“入”があるが、本研究では考察対象外とする。

ら移動表現は非対称的に観察されるといえる。次の 1.2.2.1 節では移動表現における対称的側面について、1.2.2.2 節では、先行研究の紹介と併せて移動表現における非対称的側面について述べる。

1.2.2.1 移動表現の対称的側面

1.3.1 節で詳述するが、チョムスキーが統語の自律性 (autonomus) を主張したように、意味にもまた、生得的なモジュール (module) が存在すると仮定したのが語彙意味論である (cf. 米山・加賀 (2001 : 8))。語彙意味論では、次の (7) にみられるような概念形成規則は、生得的なものと考えられている (cf. 米山・加賀 (2001 : 21))。

(7) John came into / out the office.

(ジョンはオフィス (に入った/から出てきた))

[Event GO [Thing JOHN] [Path INTO / OUT([Place OFFICE])]]]

(Namn (2004 : 2) を改変⁵)

(7) は、移動 (GO) という事象 (Event) は、John という事物 (Thing) が、INTO、乃至は OUT という経路 (Path) を経て、オフィスという場所 (Place) に入る、或いは出ることが公式化されている。次に、語彙意味論における意味表示の 1 つである語彙概念構造 (lexical conceptual structure : LCS) から、使役移動 (caused-motion) のパターンを見てみる。次例を参照されたい。

(8) a. 社長は金庫を自分の部屋に置いた。

[[] x ACT ON- [] y] CAUSE [BECOME [[] y BE AT- [] z]]

x=社長 y=金庫 z=自分の部屋 (影山太郎 (2008 : 250))

b. 社長は金庫を自分の部屋から出した。

[[] x ACT ON- [] y] CAUSE [BECOME [[] y BE FROM- [] z]]

(8) で挙げた使役移動構文は、達成の LCS (cf. 影山太郎 (2008 : 249)) として、原因事象と結果事象の 2 つの事象によって成立している。まず、原因事象は次のように公式化される。

[[] x ACT ON- [] y]

(x が y に対して、ある行為や活動、働きかけをする。)

⁵ 括弧内の日本語訳は拙訳。

(8) を例にとっていうと、原因事象は、社長が金庫に働きかけることを表している。次に結果事象は次のように公式化される。

BECOME [[] y BE AT- [] z]] BECOME [[] y BE FROM- [] z]]
 (y が z に位置するようになる) (y が z から離れるようにする)

結果事象では、(社長が金庫に働きかけることにより) 結果的に金庫は自分の部屋へと移動、或いは自分の部屋から移動することを表している。(7) (8) からわかるように、語彙概念構造では、相対するペア (ここでは広く「着点への移動」と「起点からの移動」) が、対称的に記述されている。

このような傾向は、記述言語学にも見られる。例えば、刘月华主编 (1998) では、“进”と“出”のペアを次のように記述している。次例 (9) を図.3 と共に参照されたい。

- (9) a. “进”: 由某处所的外面移到里面 (如: 走进屋) (歩いて部屋に入る)
 (ある場所の外から中に入る)
 b. “出”: 由某处所的里面移到外面 (如: 走出屋) (歩いて部屋を出る)
 (ある場所の中から外に出る)



図.3 “进”と“出”の比較 (刘月华主编 (1998 : 5) を改変⁶)

上例 (9) と図.3 から、刘月华主编 (1998) でもまた、“进”と“出”のペアが対称的に記述されていることがわかり、言語事実からも、対称的な側面が観察される。次例を参照されたい。

- (10) a. 不大会进来两个人，一胖一瘦。(《暴风骤雨》)
 (しばらくせず、二人入ってきた。一人は太っていて、一人は痩せていた。)
 b. 到了家，推开了虚掩着的门，拍着翅膀飞出一群鸽子来。(《倾城之恋》)
 (家に着いてから、カギのかかっている扉を押し開けると、翼を羽ばたかせながらハトがひと群れ飛び出てきた。)

⁶ 括弧内の日本語は拙訳。

(11) “进”表示领属关系或占有关系，由外向内改变。(刘月华主编 (1998 : 205))
 (“进”は、所有関係や占有関係が、外から内に変わることを表す。)

a. 昨天商店里刚进了一批货。(吕叔湘主编 (1999 : 309))

(昨日店に品物が入ったばかりだ。)(牛島・菱沼監訳 (2003 : 206))

b. 他们来不及整顿房屋，先去张罗吃的，费了许多事，用高价买进一袋米。

(《倾城之恋》)

(彼らは部屋を整理するのが間に合わず、先に食材を買い、多くのことを費やし、高値でコメを一袋仕入れた。)

(12) “出”表示领有关系或占有关系等的转移。(刘月华主编 (1998 : 219))

(“出”は、所有関係や占有関係などの移転を表す。)

a. 他是个铮铮铁汉，甘心付出最大的劳动换取最小的报酬。

(刘月华主编 (1998 : 219))

(彼は錚々たる鉄のような男で、誰よりも多く働き、誰よりも少ない報酬を受け取れることをいとわなかった。)

b. 经过两个多月的努力，商城 300 个摊位全部租出。(《人民日报》)

(2ヶ月余りの努力の結果、ショッピングモールにある 300 店舗は全て貸し出された。)

(10) は存現文、(11) (12) はメタファー義が用いられた事例である。“进”と“出”は共に存現文でも用いられ、メタファー義があることから、両者には対称的な側面があることがわかる。

1.2.2.2 移動表現の非対称的側面

前節では移動表現の対称的側面、つまりマクロ的側面について述べた。続いて、本節では移動表現の非対称的側面、つまりミクロ的側面について述べる。言語の対称性について、赵元任は次のように述べている。

(13) 在语言现象中寻找系统性和对称性，在方法学上可取的，只要不走得太远。(吕叔湘译 (1972 : 11))

(言語現象において、体系性、対称性を見出すのは、方法論において受け入れられるだろう。あまり離脱さえしなければ。)

(13) や、1.2.2 節におけるラネカーの指摘のように、移動表現における対称的側面は、決して多くは見られない。言語事実からの傍証として、1.2.1 節に挙げた例 (4)

(5) では、“进”と“出”のイディオムに見られる非対称性を見たが、ここでは一歩

踏み込んで、“進”と“出”の非対称性は、広範囲に見られることを示す。次例を参照されたい。

非対称性①：“進”は起点（3 次元的空間）と共起不可である。

まず1つ目に、“進”と組み合わせる場所は、起点読みができないことがあげられる。次例（14）（15）を続けて参照されたい。

- (14) a. 中間経路：正经过大门口。一位警察跑进门来，招呼大家。（《龙须沟》）
（正門を通りすぎたところ、ある警官が駆け込んでいって、みんなを呼びかけた。）
- b. 着点：一八八九号的车子开到了，藤椅子也上了岸，吴老太爷也被扶进汽车里坐定了。（《子夜》）
（1889 号の車が到着し、座椅子が陸揚げされ、呉お爺さんが支えられながら車の中に入っていき、腰をおろした。）
- c. 起点：她走进教室来了。→“教室”を起点と解釈することは不可能。
（彼女は教室に入ってきた。）
- (15) a. 中間経路：我什么话也不说，微笑着，出了木匠的大门，空手回家了。
（《我读一本小书同时又读一本大书》）
（私は何もいわずに、微笑みながら大工さんの門を出て、手ぶらで家に帰った。）
- b. 着点：休息一会，三个人就跑出门外，商量怎样度过这午后的剩余的辰光。（《三人行》）
（少し休んで、三人はすぐ門の外に出て、この午後の残りの時間をどのように過ごそうかと話しあった。）
- c. 起点：走出院子，他叹口气说：“哭三年了，眼睛都哭瞎了。”
（《暴风骤雨》）
（庭を出て、彼はため息をつき、「三年も泣き続けて、目がダメになった。」と言った）

(4b) でも触れたが、上例（14c）のように、シNTAXのレベルでも“進”はやはり起点と共起することができない。反対に“出”は、起点、着点、中間経路と共起可能である。

非対称性②：“出”は“里”と共起不可である。

次に、方位詞“里”との共起関係から、非対称性を見る。次例を参照されたい。

(16) a. 他跑进 (教室 / 教室里) 来。

(彼は (教室 / 教室の中に) に駆けこんできた。)

b. 他跑出了 (教室 / *教室里)。

(彼は (教室 / ?教室の中) を駆け出た。)

c. 他从 (教室 / 教室里) 跑出来。

(彼は (教室 / 教室の中) から駆け出てきた。)

上例のように、“进”は、方位詞“里”と組み合わせさせた場所と共起可能であるが、“出”はそれが不可能である。起点は、場所を介詞“从”によって前置させることによって、“里”と組み合わせることが可能となる。

特筆すべきは、“进”と“出”のような内外への位置変化、ひいては着点への移動と起点からの移動の非対称性は、中国語に限らず汎言語的に見られ、更には言語間に共通した現象も観察されることにある。実際、空間移動の非対称性の研究は多くの蓄積があり、夙に Fillmore (1972) ; 池上嘉彦 (1981)、また、連語論 (言語学研究会編 (1983) ; 鈴木康之 (2011)) においても、興味深い点が指摘されている。まず、Fillmore (1972) の例を参照されたい。

(17) a. The man came into her bedroom. (Fillmore (1972 : 377))

(その男は彼女の寝室に入った。)

b. He came from somewhere. (Fillmore (1972 : 370))

(彼はある場所から来た。)

(18) a. He went to London for a week. (Fillmore (1972 : 369))

(彼はロンドンに1週間行った。)

b. *He went from somewhere. (Fillmore (1972 : 370))

(彼はある場所から行った。)

上例のように、come は into, from 共に共起可能であるが、went は from と共起不可能である。これは、上例 (4b) (14c) のように、着点指向の“进”が、起点と共起不可能であることに関連すると言えるだろう。このことに併せて、日本語の事例も参照されたい。

(19) a. 太郎は教室 {ヲ / カラ} 出た。

b. 太郎は庭に出た。

- (20) a. 太郎は教室{*ヲ／ニ}に入った。
 b. 太郎は門を入った。

日本語でも、内から外への位置変化を表す動詞「出る」は、「ヲ／カラ／ニ」格と共起可能であるが、外から内への位置変化を表す動詞「入る」は「ヲ格」との共起は不可能である。但し、(20b)のように中間経路はこの限りではない。このように、着点指向の移動動詞が、起点と共起不可能な事例は、汎言語的といえるかもしれない。

続いて、池上嘉彦（1981：126）では、非対称性について次のように指摘がされている。

- (21) 「起点」と「到達点」という概念は、「変化」の始めと終わりという意味で論理的には完全に対等のものである。しかし、言語に現れている限りでは、人間の心理は圧倒的に「起点」より「到達点」の方に傾斜しているように思われる。これはまず共時的なレベルでは、「到達点」がどちらかといえば「無標識的」なものとして扱われるのに対し、「起点」は「有標識的」な項としてふつう扱われるということに認められる。

（池上嘉彦（1981：126））

着点と起点の無標・有標性について、次のような例が挙げられる。

- (22) a. 今日学校（に／Ø）行きますか？
 b. 教室（から／*Ø）出てください。
 (23) a. 过了一会儿，济南站到了，我起身将书（放进包里／放包里）。

（《坐车艳遇》）

（しばらくして、済南駅についた。私は体を起こして、本をバッグに入れた。）

- b. 我有些犹豫，但还是伸出手去，这把剑没有我想像中的沉，反倒挺轻巧的，我缓缓的把剑（拔出了剑鞘／*拔了剑鞘）。（《古剑璇玑》）

（<http://m.sangwu123.com/Html/5/5149/2339650.html>）

（私は少し戸惑ったが、やはり手を伸ばした。この剣は思っているほど重くはなく、むしろ軽かった。私はゆっくりと剣を鞘から抜いた。）

上例（22）のように、日本語の着点マーカー「ニ」は省略可能であるが、起点マーカー「カラ」は省略不可能である。同様に、中国語においても、場所と共起する場合、外から内への経路を表す補語“进”は省略可能であるが、内から外への経路を表す補語“出”は省略不可である。よって、着点は無標的であり、起点は有標的である

といえる。これらの詳細は第7章で論じる。

また、連語論における指摘も挙げておきたい。

(24) とりはずしのむすびつきのあらかず連語の三単語な性格は、とりつけの Kategorie ほど厳密ではない。(言語学研究会編(1983:31⁷))

(24) が示唆するところは、もう少し説明が必要だろう。「とりはずしのむすびつき」とは、連語論における連語という言語単位の一つであり、「とりつけのむすびつき」とは対照を成す。次例を参照されたい。

(25) 「とりつけのむすびつき」

～に	～を	～する
場所的な名詞	もの名詞	とりつけ動詞

○かべにポスターをはる ○アルバムに写真をはりつける
○くぎに帽子をかける ○テーブルに茶碗をおく(鈴木康之(2011:12-13))

(26) 「とりはずしのむすびつき」

～から	～を	～する
場所的な名詞	もの名詞	とりはずし動詞

○はしらから時計をはずす ○コートからほこりをはらいおとす
○封筒から切手をはがす ○はちまきを頭からとる(鈴木康之(2011:13-14))

上例のように、連語論(言語学研究会編(1983);鈴木康之(2011))では、大量の言語事実から日本語の格パターンが記述され、体系的にまとめられている⁸。「とりつけのむすびつき」と「とりはずしのむすびつき」は、端的にいえば客体(モノ)の移動を表す使役移動構文であり、前者の場所は「ニ格」で、後者の場所は「カラ格」で表される。つまり、(24)では、「ニ格」で示される場所は省略されることは少ないが、「カラ」格で示される場所は省略されることが多いことが指摘されている。つまり、起点は着点に比して省略されやすい。この理由については、第7章で論じる。

また、中国語の“上”“下”の非対称性については、多くの蓄積がある(cf.周统权

⁷ 鈴木康之(2011:14)にも同様の指摘がある。

⁸ 日本語の場合、事象の類型と対応を持つ格構成が構文とみなされ、こういった格構成の分析は、日本語学では連語論的アプローチ(collocational approach)と呼ばれる(cf.深田・仲本(2008:255))。

(2003) ; 范金玲・李红 (2003) ; 商怡 (2014))。“上”“下”もまた、“进”“出”のように、対称的側面と非対称的側面を共に有している。まず、対称的事例を挙げる。

- (27) a.跳上车。(車に飛び乗る)
- b.跳下车。(車から飛び下りる)
- (28) a.穿上衣服。(服を着る)
- b.脱下衣服。(服を脱ぐ) (丸尾誠 (2014b : 19))

(27) では車を、(28) では話し手を基点に、“上”は付着を、“下”は離脱を表している。よって、両者は対称的であるといえる。次に、非対称的事例を見てみる。周统权 (2003) では、“上”は、2次元、つまり「面」をカテゴリーとし、“下”は、3次元、つまり「立体」をカテゴリーとしていることが指摘されている (cf.周统权 (2003 : 40))。

- (29) a.火车从桥上通过。(周统权 (2003 : 40))
- (列車は橋 (の上) を通過した。)
- b.火车从桥下通过。(周统权 (2003 : 40))
- (列車は橋の下を通過した。)
- (30) a.墙上贴着一张地图。(周统权 (2003 : 40))
- (壁にポスターが貼ってある)
- b.墙下站着一个人。(周统权 (2003 : 40))
- (壁の下に人が立っている。)

(29) (30) からもわかるように、“上”は接触を表し、“下”は広がりのある3次元の空間を表しているため、両者は非対称的であるといえる。

皮相的分析であるが、両者の非対称性は、ヒトの重力への捉え方に動機づけ (motivation) られることが考えられる。大谷直輝 (2012) では、ヒトの重力への捉え方から、英語の **over** と **under** の非対称性が分析されている。大谷直輝 (2012) では、上と下の表す領域に見られる境界の明確性の違いについて、次の図を用いて説明している。



(a) 上の TR と下の LM (b) 下の TR と上の LM

図.4 垂直軸の非対称性 (大谷直輝 (2012 : 53) を改変)

- (31) 物理的な事象が TR (例 人間) の場合、上にある LM (例 空や天井) とは接触せず、下にある LM (例 床や地面) と接触する必要がある。さらに重力があるので、TR は何かに支えられる必要がある。上記図.4 (a) のように、LM が TR の下にある場合、LM は TR と接触して、TR を支えるが、図.4 (b) のように、LM が上にある場合、LM は TR を支えられない。よって、LM 以外に TR を支える存在が喚起される。(大谷直輝 (2012 : 53))

図.4 と (31) の指摘から、(29) (30) で挙げた“上”と“下”の非対称性が説明可能である。つまり、重力の関係から「上」とは面を指し、「下」とは立体を指す。

図.4 からわかるように、「下」は、TR がいる位置と LM が喚起されるため、一定の領域が確保される、いわば有界領域であるといえ、反対に、「上」は非有界領域であるといえる。このことは、次例のような非対称性にも動機づけられる。次における“下”は「完成するまでに (全体) でどれだけ時間・費用などがかかる」という意味を表している (cf.丸尾誠 (2014b : 26))。

- (32) a.全部节目表演下来得三个小时。(《汉语动词用法词典》26)
(全部の演目が終わるまでに3時間がかかる。)(丸尾誠 (2014b : 26))
b.这项研究做下来至少还要半年。(《汉语动词用法词典》592)
(この研究をやり遂げるのに少なくともあと半年はかかる。)
(丸尾誠 (2014b : 26))

完成は、いわば有界的であり、“上”が完了を表せないのも、図.4 から見られる「上」の非有界性によるものと考えられる。

以上の先行研究から、空間移動の非対称性は、汎言語的、少なくとも日本語、英語、中国語でも見られることがわかった。

本節における考察から、本研究の研究意義を次にまとめる。

- (33) a. 広域から言語間にみられる一般性を発見すること。
b. 尚且つ個別言語に特有の事例の提示すること。
c. 理論から非対称性が生起する理由を説明すること。

1.3 研究方法

前節では研究意義について述べた。続いて本節では、本研究の研究方法である認知言語学について述べる。詳細な理論的背景の説明は第2章に譲り、本節では生成文法 (generative grammar) との比較から、次の3点を述べる。

- (34) a. 認知言語学における言語観⁹。
 b. 認知言語学における文法。
 c. 認知言語学を研究方法として用いる妥当性。

認知言語学の創立者の一人であるであるレイコフ（George P. Lakoff）やラネカーが、かつて生成文法を研究していたように¹⁰、認知言語学の特徴を浮き彫りにする上で、生成文法と比較することは有効な手段である。

1.3.1 認知言語学における言語観

本節では、認知言語学における言語観について述べる。まず、次を参照されたい。

- (35) a. 認知言語学は、言語記号と客観世界の間には、我々の経験に基づいて構築された認知的世界が介在していると考える認知主義的な言語観に立っている（cf.尾谷昌則（2011：36））。
 b. これに対し、客観主義的言語観では、認知的世界は切り捨てられ、言語記号は客観世界と結びつけられて考えられている。
 （cf.尾谷昌則（2011：36））。

次の図.5 で表されるように、言語学では、言語表現が客観世界と直接的に結びついているという見方を「客観主義的言語観」、客観世界と言語表現の間に、認知世界が介在する見方を「認知主義的言語観」という2つの見方にわかれるている。次の図を参照されたい。



図.5 客観主義的言語観と認知主義的言語観

（尾谷昌則（2011：36）を改変）

⁹ 言語観を明確にしておくことについて、チョムスキーは次のように述べている。「言語のどのような側面の研究においても、「言語とは何か」という問いに対する答えは明確であるべきです。この問いに対する答えがある限りにおいてのみ、言語獲得、言語使用、言語変化、言語の起源、そのシステムを実行する内的メカニズムといった言語の様々な側面にかんする諸問題を真剣に研究することが出来るようになるのです。（福井・辻子訳（2015：8））」

¹⁰ 認知言語学の史的展開は、西村・野矢（2014：4-30）に詳しい。

認知言語学者の考える「認知」は、知覚や身体経験に根ざしており、他の認知能力から独立しているのではない（山梨正明監訳（2011：36））。ここでいう「認知能力」とは、非常に広範囲に亘る。認知言語学は、認知心理学や心理学、哲学といった隣接分野からの乗り入れが可能であり¹¹ ¹²、認知能力は、環境・社会との相互作用、五感、空間認知、運動感覚をはじめとする、幅広い身体的な経験を指す（cf.山梨正明（2000：8））。このような考え方は、身体性（embodiment）や経験基盤主義（experientialism）言われる（Lakoff and Johnson（1980）；Johnson（1987））。

では、ヒトの最も基本的な認知能力であるゲシュタルト知覚を例に、認知的アプローチが、言語研究にどのようにコミットされるのかを概観する。ゲシュタルト（gestalt）とは、刺激の部分的特徴や要素ではなく、全体的構造や「まとまり」を表す言葉である（cf.川畑秀明（2010a：56））。例えば、ピアノ曲が挙げられる。ピアノの曲は、単なる多数の音符の集合ではなく、多数の音符の集合以上の性質を持っている。（cf.大村政男（2006：36））。ゲシュタルトの法則には、次のような要因が挙げられる。（36）を簡略化した図.6と共に参照されたい。

- (36) a.近接の要因：近接しているもの同士はひとまとまりになって認識されやすい。
 b.類同の要因：いくつかの刺激があるときは同種のもの同士がひとまとまりになって認識されやすい。
 c.閉合の要因：互いに閉じ合っているもの同士はひとまとまりになって認識されやすい。
 d.連続の要因：いくつかの曲線になりうる刺激があると、なめらかな曲線として連続しているものは1つとして見られやすい。
 （川畑秀明（2010a：56））

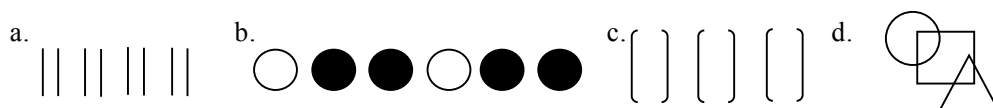


図.6 ゲシュタルトの法則（大村政男（2006：37）を改変）

ここでは、(36a)の「近接の要因」の言語への表象として、次例を挙げる。

¹¹ 黒田航（2003：82）では、「認知言語学をいっそう魅力的なものとしうるのは、隣接分野との互換性である。言語能力の前提を切り捨てることによって、ほかの分野の研究成果との乗り入れが可能となっているからである」と指摘されている。

¹² 認知言語学と隣接分野の関わりについては、辻幸夫（2003）に詳しい。

(37) a. ゴキブリはどこにでもいる。(山梨正明 (2012 : 22))

b. あの子は1日中ずーっと咳をしている。(山梨正明 (2012 : 24))

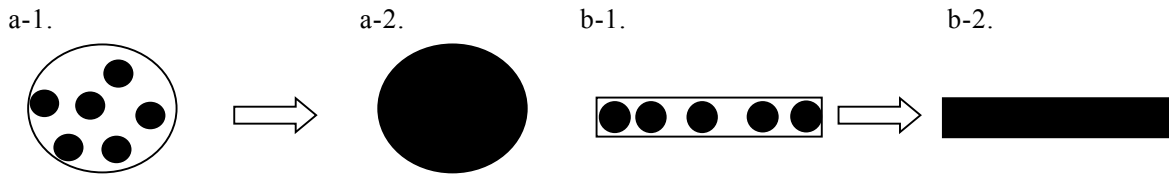


図.7 近接の要因

もし、客観主義言語観、つまり言語を現実を写しだす鏡のように捉え、文との整合性を判断すると、図.7 (a-2) のように、びっしりと埋まったゴキブリは到底想像し難いので、(37a) は非文になるだろう。(37b) も同様に、1日中秒刻みに咳をしていると到底考えづらい。しかしそれでも、我々が (37) を自然と受け入れられるのは、近接性の要因という、個々の集合体を、つながりのある全体として理解する能力があるためである¹³。本研究と関連して、空間移動の例も挙げておきたい。

(38) a. 一群孩子跑过去了。

(子供たちが走って行った。)(『白水社 中国語辞典』)

b. 他家里的妻子不在，他便大街小巷的去问，一家一家店铺问过去。

(《梦里花落知多少》)

(家には妻が不在で、彼は町中を一店舗ずつ聞いて回った。)

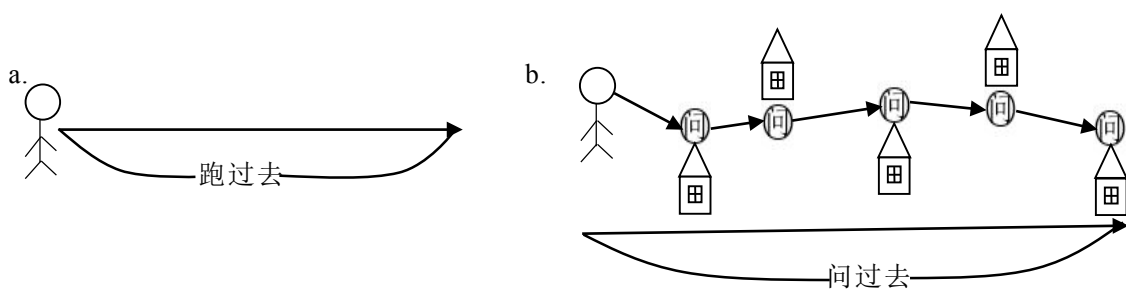


図.8 客観的様態と主観的様態

(38a) と (38b) の差異もまた、近接の要因により説明が可能である。前者は、移動

¹³ 山梨正明 (2012 : 22-23) では、(37) のような表現は、複数の個体の有限個の集合体のイメージスキーマを連続的な集合体のイメージスキーマに変換する主観的な認知プロセスによって説明可能であると述べられている。

の様態“跑”が移動の着点まで継続することが客観的に認識可能であるが、後者は主観的に認識される。移動の途中で生起する“問”という事象を、近接の要因によって、移動の開始から終了まで継続する、主観的な様態として解釈するのである。そのため、“問過去”のような表現が可能となる。

以上、認知言語学における言語観について述べた。

1.3.2 認知言語学における「文法」

続いて、生成文法との比較から、認知言語学における「文法」について述べる。

(39) a. 認知言語学では、文法 (grammar) は、習得可能な用法の体系 (usage system) として構築される。(cf. 黒田航 (2003 : 80))

b. 生成文法では、文法は、習得不可能な規則の体系 (rule system) として構築される。(cf. 黒田航 (2003 : 80))

認知言語学とは対照的に、生成文法は、上記で述べたような身体性を切り捨て、言語現象を徹底して、「自然現象」として取り扱っている (cf. 福井直樹 (2012 : 14))。その理由の一つとして、言語と数学の相似性が挙げられる。自然数が $n+1$ によって無限に求めることができるように、有限のシステムから、自然数の解を無限に得ることができる。これを離散無限性 (discrete infinity) という (cf. 福井・辻子訳 (2012 : 22-23))。チョムスキーは、離散無限性を類推的に言語に当てはめることによって、自然言語もまた、有限の文法規則 (grammar rule) から、無限の文を生み出すことができるシステムだと考えた。更に離散無限性は、経験から獲得されるものではなく、自然現象のように客観的に存在するため、言語が持つ有限の規則もまた、客観的に存在し、心臓や肺のように生得的に獲得され、自律的 (autonomous) に働くことが、自然と導きだせる。そして、この客観的に存在する (と考えられている) 有限の文法規則を明らかにするのが、生成文法の研究目的の一つである (cf. 福井・辻子訳 (2011 : 2))¹⁴。なお、生成文法における仮説は、反証可能かどうか厳しい議論を重ねることによって、その妥当性は検証・証明できるとされており、これは、自然科学では当然に行われている手法である (尾谷昌則 (2011 : 7-8))^{15 16}。以上見てきたように、生成文法

¹⁴ チョムスキーは、認知言語学で強調される概念形成能力や想像力が他の生物にもあることを認め、そのうえで、「これら想像力や概念形成能力が爆発的になるのは、数学の能力のおかげである」としている。(cf. 福井・辻子訳 (2011 : 79-80))

¹⁵ 但し、生成文法において、一般原理から導き出せないものの集合をレキシコンと定義される。(cf. 尾谷昌則 (2011 : 11))。

¹⁶ ラネカーは、「理論言語学者によって一般的に想定されている基本的な離散性が、「言語の中に発見された」のか、それとも「言語に課せられてきた」のか、この点を問う必要がある」と述べている (山梨正明監訳 (2011 : 16))。

は、(習得不可能な)「規則性」や「体系性」に力点が置かれている。その一方で、生成文法とは対称的に、認知言語学では「複雑性(複雑系)」や「用例の体系」に力点が置かれている。複雑性(複雑系)とは、「非常に数多くの自律的構成要素の競合によって構成される(半開放系)のこと」である(黒田航(2003:88))。言語学を複雑系の科学と認め、文法を「用法の体系」だと認めることは、「文法には多くの規則的な事例と例外的な事例が同時に含まれる」という文法の本質を矛盾なく説明することが可能である(黒田航(2003:84))。ラネカーは、「言語学者の関心は正しい話し方の規定ではなく、言語自体の記述にある(山梨正明監訳(2011:[3]))」こと、また、「重要なのは、ある言語表現の組み合わせが文法的かそうでないかを断定的に決定することではなく、その言語表現に関連する要因をすべて考慮し、動機付けの種類と程度を確かめることである(山梨正明監訳(2011:116))」ことを述べている

以上、認知言語学における文法について述べた。

1.3.3 認知言語学を用いる妥当性

本節では、認知言語学を研究方法として用いる妥当性について述べる。認知言語学と非対称性は、次の2点において親和性が高く、認知言語学は本研究の分析方法として妥当であるといえる。

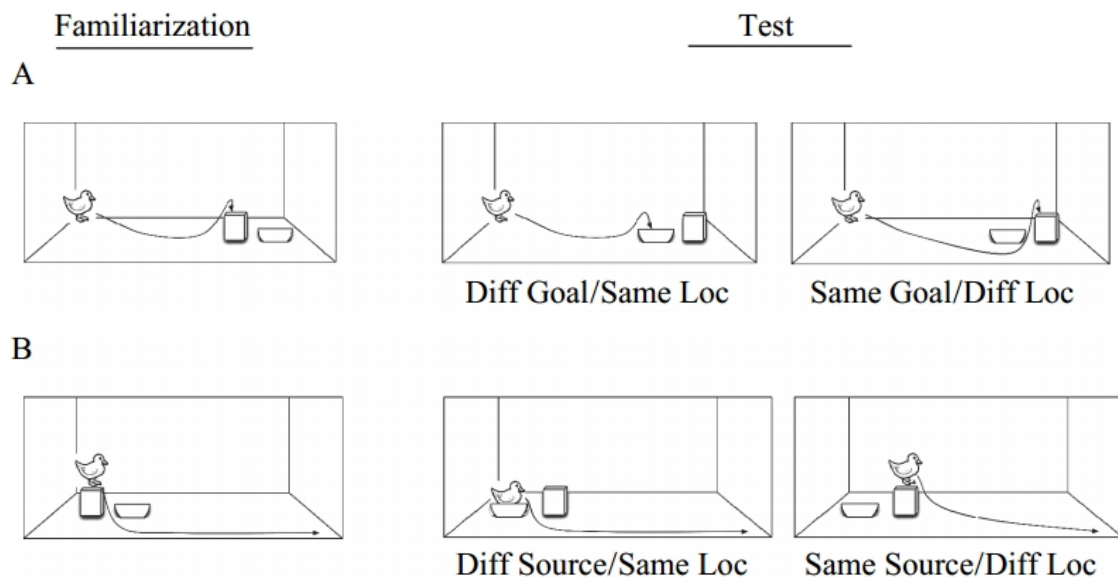
- (40) a.非対称性は、言語を微視的に見る視点の1つであり、扱うデータは幅広い。認知言語学も同様に、文法を用法と見做し、幅広いデータから言語運用のモデル構築を目指す。
- b.空間移動に見られる非対称性は、認知のバイアスを介して発生している。

既述のように、言語を対称的に見た場合、記述できるデータの範囲はごく狭まる。これとは反対に、言語を非対称的に見た場合、扱えるデータは広まる。よって、非対称性と認知言語学は親和性が高いといえる。より肝心なのは(36b)である。子どもが最も早く身につける基本的な認知能力の1つに、モノの理解とモノとモノが物理的空間の中でどのように関係し合っているかについての理解がある(cf.宮浦国江訳(2006:22))。「着点への移動」と「起点からの移動」の非対称性の研究は、発達心理学の俎上にも載せられ、「着点への移動」と「起点からの移動」の非対称性は、前言語段階、すなわちヒトの認識レベルでも起こることを分析したのが、ラクスタ(Laura, M. Lakusta)の一連の研究である。ラクスタは、上記(21)の池上嘉彦(1981)の指摘などから、自然言語に見られる着点バイアスは、前言語段階においても現れるのではないかという着想を得た(cf.Lakusta et.al(2003:181))。それは例えば、「鳥がボールから飛び出て、ポットに入る」といった単純な移動事象を目にし、子供と大人にその

状況を描写してほしいと頼むと、彼らは起点よりも、着点をより言及するという

(cf. Lakusta and Carey (2015 : 154))。ラクスタは、乳児の注視反応を用いた実験方法である馴化-脱馴化法によって、幼児の起点と着点への注視時間を検証した。馴化-脱馴化法とは、認知科学で用いられる実験方法のひとつである。馴化とは、乳児に同じ刺激パターンを繰り返し提示すると、乳児は刺激提示の開始時点では興味をもって注視するが、次第に刺激に対する興味（あるいは注意）が低下するにつれて注視時間が短くなることを指す。そこで、刺激を別のものに変えて提示すると、刺激に対する注視時間は、長くなる。これを脱馴化という (cf. 川畑秀明 (2010b : 365))。つまり、脱馴化が起こると対象を識別したとみなし、起こらなければ、対象が識別されていないとみなされる。例えば、乳児に何度も繰り返して同じ円を見せ、注視時間が減少すれば、それは「馴化」したといえる。反対に、違う図（例えば十字）を見せ、注視時間が増加すれば、脱馴化が起きているといえ、幼児は円と十字を識別しているといえる (岩男ほか訳 (2003 : 27-28))。

では、ラクスタの実験結果 (Lakusta (2005)) を次に簡潔にまとめる。実験手順として、まず Familiarization Phase で馴化を行い、Test Phase において、着点/起点への注視時間を計る。Test Phase には、アヒルが Familiarization Phase とは異なる形をした着点に向かうパターンと、Familiarization Phase とは異なる位置に置かれた同じ形をした着点に向かうパターンの2パターンが用意してある (A)。起点もまた同様に、Familiarization Phase とは異なる形をした起点と、Familiarization Phase とは異なる位置に置かれた同じ形をした起点の2パターンが用意してある (B)。更に起点は、模様が施されたスーパー起点もある (C)。次の図を参照されたい。



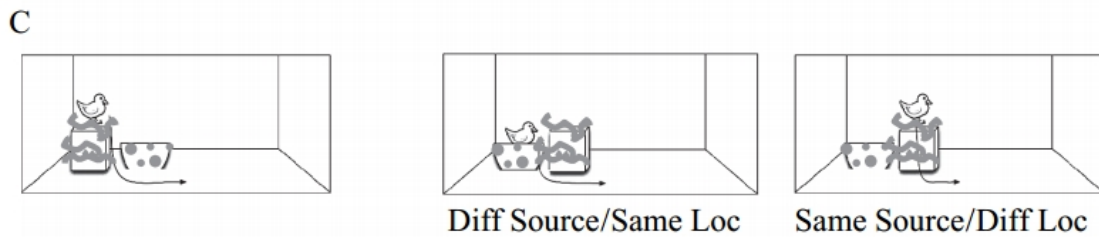


図.9 ラクスタの実験 (Lakusta et al. (cf.2007 : 183))

実験結果：

A (着点への移動)：Diff Goal/Same Loc への注視時間は、Same Goal/Diff Loc よりも長い⇒着点は識別される。

B (起点からの移動)：Diff Source/Same Loc への注視時間は、Same Source/Diff Loc と同じ⇒起点は識別されていない。

C (Supre 起点からの移動)：Diff Source/Same Loc への注視時間は Same Souce/Diff Loc よりも長い⇒起点は識別されている。

以上の実験結果から、幼児の注視時間は、着点と起点で対称的にならず、着点のほうが起点よりも長いという非対称的になることがわかった。つまり、言語における非対称性もまた、自然発生的ではなく、認知のバイアスを通して生起すると考えたほうが自然であるといえる。

以上の内容から、研究方法として認知言語学を使うことは妥当であるといえる。

1.4 研究対象

続いて、本節では、研究対象を述べる。内外への位置変化と状態変化は、現代中国語において“进” / “出”で記号化され、該当するフレーズは (41ab) のように2つにわけられる。

- (41) a. 経路を表す動詞 + 直示
 (“进” / “出”) + (“来” / “去”)
- b. 付随要素 + 経路を表す補語 + 直示
 (動詞) (“进” / “出”) (“来” / “去”)

- (42) a. 请进来吧！(吕叔湘主编 (1999 : 310))
 (どうぞお入りなさい。)((牛島・菱沼監訳 (2003 : 185))

b. 兔子把树叶衔进洞里去。(吕叔湘主编 (1999 : 310))

(ウサギは木の葉を口にくわえて穴の中へ入れた。)

(牛島・菱沼監訳 (2003 : 208))

(43) a. 出了这条街，一拐弯就到。(吕叔湘主编 (1999 : 121))

(この通りを出て角を曲がるとすぐ。)((牛島・菱沼監訳 (2003 : 59))

b. 我们学校一下子运不出那么多矿石。(吕叔湘主编 (1999 : 122))

(1度にあんなにたくさんの鉱石を運び出せない)

(牛島・菱沼監訳 (2003 : 60))

(44) a. 别人的意见他听不进去。(吕叔湘主编 (1999 : 310))

(ぼくの話なら彼はまあ聞いてくれるだろう。)

(牛島・菱沼監訳 (2003 : 208))

b. 我进过这所中学。

(私はこの中学に入ったことがある。)(『白水社 中国語辞典』)

(45) a. 万一出了问题怎么办?

(万一問題が生じたらどうするのか?)(『白水社 中国語辞典』)

b. 我看出来了。(吕叔湘主编 (1999 : 124))

(見えた。識別できた。)(牛島・菱沼監訳 (2003 : 61))

“进”／“出”は、内外への位置変化を表す動詞としてだけでなく、(42b) (43b)のように、外から内への位置変化に伴う原因や手段を表す付随要素を前置することも可能であり、さらに (44) (45) のように、具体的な位置変化ではない、抽象的な状態変化を表すことも可能である。本研究では、(42a) を“进”／“出”フレーズ①、(43b) を“进”／“出”フレーズ②と呼ぶ。“进”／“出”フレーズのような構造は、吕叔湘 (1979 : 41) では“复合动词 (複合動詞)”、朱德熙 (1982)、刘月华主编 (1998) では、動詞に後置される“进”／“出”は“趋向补语” (方向補語) (directional complement) と見做され、当該フレーズは、“动补结构” (動補構造¹⁷) と呼ばれている。(cf. 朱德熙 (1982 : 147))。

さて、非対称性を分析するにあたり、“进”と“出”を先行研究と言語事実を吟味しながら理論的に分析しなければならないことは言うまでもないことだが、非対称性の真の理解には、“进”／“出”フレーズ以外にも、関連事項も抑えておく必要があると、本研究は考える。では、“进”と“出”、そして非対称性を十分に理解するためには、他に何を分析する必要があるのだろうか。ここでは、図式を用いて“进”／“出”フレーズ以外の本研究の対象を明らかにする。認知言語学では、よりイメージ

¹⁷ 訳語は、杉村・木村訳 (1985 : 171) より。

能力を重視した記述を行っている（山梨正明監訳（2011：41））。図表を使うメリットについて、ラネカーは、図表の大半は、ほとんどの目的を達成するために正確に描かれており、明示的でわかりやすく、発見を促すようなある種の有用性も兼ね備えていると述べている（cf.山梨正明監訳（2011：12））。このことを、英語の内から外への位置変化を表す動詞 Enter を例に見てみる。次の引用文（46）と図.9を参照されたい。

(46) For instance, the concept Enter can be analyzed as a combination of the image schemas object, source-path-gola, and container-content.

(Langacker (2008 : 10))

(例えば、図に示されるように ENTER という概念は、対象物のイメージ・スキーマと、起点・経路・着点のイメージ・スキーマと、容器と中身のイメージ・スキーマとの組合せとして規定することができる¹⁸⁾。

(山梨正明監訳（2011：41）)

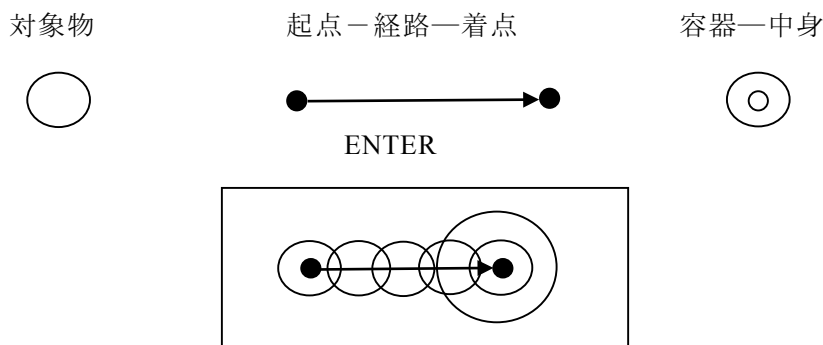


図.10 Enter のイメージ・スキーマ

(山梨正明監訳（2011：41）を改変)

図.10 から、内外の位置変化には、「移動事象」のみならず、「容器-中身」のように、境界のある空間に内容物が含まれる「存在（包含）事象」も関わることがわかる。このことを、具体例と図.11 から検証する。

(47) a. 桌上有一本书。(机の上に本がある。)

b. 他把书放在桌上。(彼は本を机の上に置いた。)

¹⁸ 認知心理学においても、同様の指摘が見られる。スキーマの特徴について、スキーマは他のスキーマを内包するような埋め込み機能を持つと述べている（cf.都築誉史（2010：198））

c.他从抽屉里拿出了一本书。(彼は引き出しから本を取り出した。)

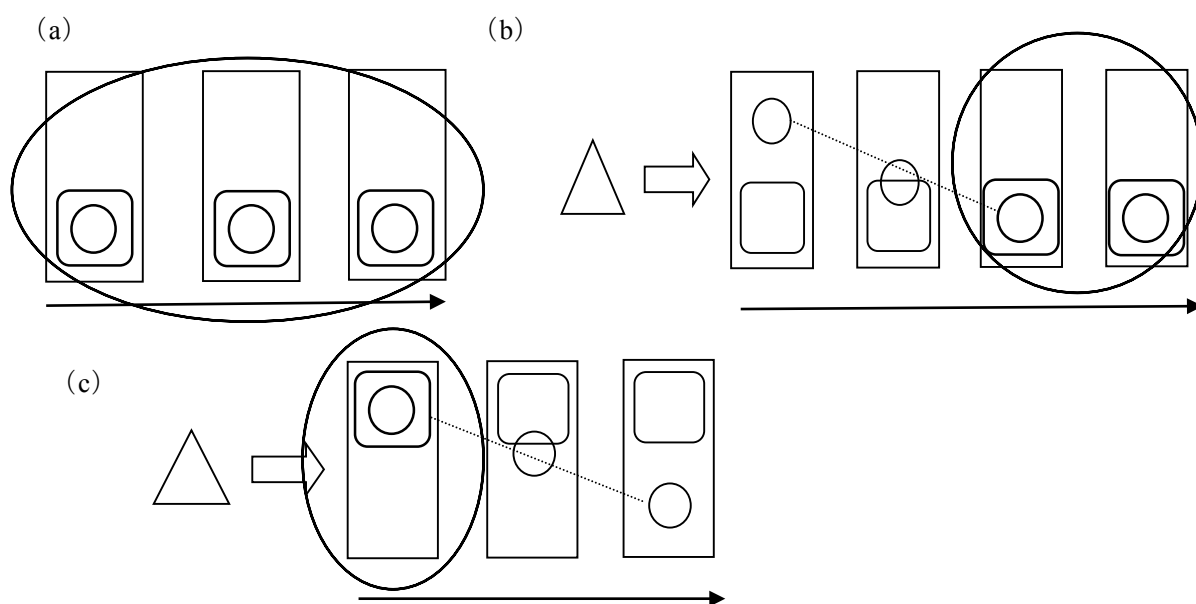


図.11 存在事象

事物の包含は、(47a) のような単純な存在のみならず、(47b) のような外から内への位置変化の終着状態、(47c) のような内から外への位置変化の開始状態をも含意する。よって、存在事象もまた、移動事象と併せて分析する必要があることが考えられる。

以上の考察から、本研究は、“進” / “出” フレーズ、そして両者の非対称性の他にも、移動事象、存在事象も射程に入れて、議論を展開していく。具体的な議論内容は、次節で述べる。

1.5 本研究の構成

内外への位置変化と状態変化の非対称性を明らかにすることは、言語の一般性を研究するうえで重要であるが、非対称性への理解へ近づくためには、関連する「移動事象」と「存在事象」もまた視野に入れて研究する必要があることを前節で述べた。

本研究は、全四部構成で論を展開する。既に冒頭で述べたように、本章を含んだ第 I 部は、研究の土台となる、本研究の紹介と理論的背景を述べる。次に、第 II 部では、移動事象と存在事象を分析する。第 III 部では、本研究の核心部分である“進” / “出” フレーズ、そして両者の非対称性を分析する。そして最後に、第 IV 部で全体のまとめと今後の課題を述べる。本研究の構成を、次のように図式化しておく。

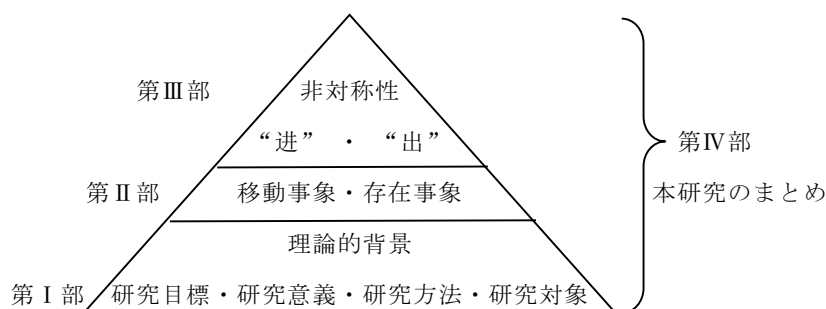


図.12 本研究の構成

続けて、各部各章の議論の焦点を次にまとめる。

第Ⅰ部：序論

第1章（序章）：研究目標、研究意義、研究方法、研究対象を中心に述べる。

第2章（理論的背景）：認知言語学の理論仮構物について述べる。

第Ⅱ部：分析①—移動事象と存在事象について—

第Ⅱ部では、分析①として移動事象と存在事象を分析する。

第3章（移動事象について）：第3章では、次の2点を考察する。

- ①言語類型論の枠組みから、中国語における移動表現を概観する。
- ②認知言語学の枠組みから、移動の付随要素に包入される意味役割を考察する。

第4章（存在事象について）：第4章では、次の2点を考察する。

- ①認知言語学の観点から、概念レベルから存現文を定義づける。
- ②認知言語学の観点から、概念レベルから存現文を体系的にまとめる。

第Ⅲ部：本論②—“进”と“出”、そして非対称性について—

第Ⅲ部では、“进”/“出”フレーズを、それから両者の非対称性を考察する。第5章と第6章の議論の流れは、ほぼ同一である。

第5章（“进”フレーズ再考）：次の4点を論じる。

- ①“进”の統語的特徴
- ②刘月华主编（1998）の分析をまとめ、問題点を指摘する。
- ③第3章の分析から、“进”フレーズにおける動詞を、意味役割から分類する
- ④“进”の拡張義を認知意味論（cognitive semantics）から分析する。

第6章（“出”フレーズ再考）：次の4点を論じる。

- ①“出”の統語的特徴。
- ②刘月华主编（1998）の分析をまとめ、問題点を指摘する。

③第3章の分析から、“出”フレーズにおける動詞を、意味役割から分類する。

④“出”の拡張義を認知意味論の観点から分析する。

第7章（“進”/“出”フレーズに見られる非対称性について）：次の3点を論じる

①位置変化に見られる非対称性を挙げる。

②状態変化に見られる非対称性を挙げる。

③「連続性」というスキーマから、非対称性を分析する。

第IV部：終章

終章：（全体のまとめ・今後の展望）：

終章では、本研究の内容をピックアップし、簡潔にまとめることで、本研究の内容と意義を再確認する。主に次の3点について述べる。

①各章ごとの分析をまとめる。

②本研究の独創性について述べる。

③今後の課題について述べる。

以上、各部及び各章の議論の焦点について述べた。

1.6 おわりに

本章では、研究目標、研究意義、研究方法、研究対象を中心に述べた。これらを次に簡約し、本章のおわりにかえる。

- (48) a.研究目標：“進”と“出”の非対称性を記述し、それを、認知言語学の観点から説明する。また、移動事象と存在事象も分析する。
- b.研究意義：空間移動の非対称性は、汎言語的に見られる現象であり、言語事実を渉猟し、分析することは言語の一般法則を見つけ、個別言語の特徴を明らかにする。また、これらを説明することに意義があるといえる。
- c.研究方法：認知言語学を用いる。非対称性は、言語をミクロ的に見る視点であり、認知言語学もまた、データを広範囲に扱う。また、空間移動の非対称性は認知のレベルから起っていることが発達心理学の研究から明らかになっている。以上の2点から、認知言語学を研究手法として扱うのは妥当であるといえる。
- d.研究対象：移動事象、存在事象、“進”/“出”フレーズ、及び両者の非対称性

第2章 理論的背景

2. はじめに

第1章では、本研究の導入として、研究目標、研究意義、研究方法、研究対象を述べた。続いて本章では、認知言語学の理論的背景を詳述する。

認知言語学には、多くの理論仮構物が用意されている。これら理論仮構物は、直感的に自然であり、心理的な妥当性が認められ、経験的に裏付けられる利点がある (cf. 山梨正明監訳 (2011 : [3])). このことについて、ラネカーは次のように述べている。

- (1) The general strategy employed is to seek converging evidence from each of three general sources: (i) what we know about cognition (independently of language), (ii) what is needed for viable semantic descriptions, and (iii) whether the constructs support an optimal account for grammar.

(Langacker (2008 : 85))

(認知文法で採用されている一般的な方法とは、次の3つの一般的な観点から集められた証拠を追求し、それを基盤として言語分析を行うというものである。(i) 言語に関すること以外で、認知について何がわかっているか (ii) 実現可能な意味記述には何が必要か (iii) 理論仮構物が最適な文法の説明に不可欠な要素となっているかどうかという点である。(山梨正明監訳 (2011 : 112))

認知言語学では、言語に固有とはいえない一般的な認知能力だけを引き合いにだすように、注意が払われている (山梨正明監訳 (2011 : 9))。そこで、本章ではなるべく一般的な認知能力及び認知プロセス (cognitive process)¹と言語事実を結びつけて説明をし、認知言語学における理論の実在性を詳述していく。最後に全体のまとめを述べる。

2.1 解釈

1.3.1 節でも触れたように、認知言語学は、客観世界と言語表現の間には、認知の世界、即ち認知のバイアスを介することを認め、このバイアスを幅広い範囲で認めていく立場に立っている。この認知のバイアスを、ここでは「解釈 (construal)」と呼ぶことにする。解釈の多様性について、ラネカーは次の容器に入った水の図 (図.1 の概念

¹ 認知プロセスとは、概念化者が事象を理解し、解釈を与え、分節・構造化し、コード化 (encode) し、行動や発話につながる一連の過程を言う (辻幸夫編 (2013 : 270))。

内容) を例に挙げ、4つの解釈可能性 (a~d) を、対応する言語表現と共に挙げている。次の図.1 と例 (2) を参照されたい。

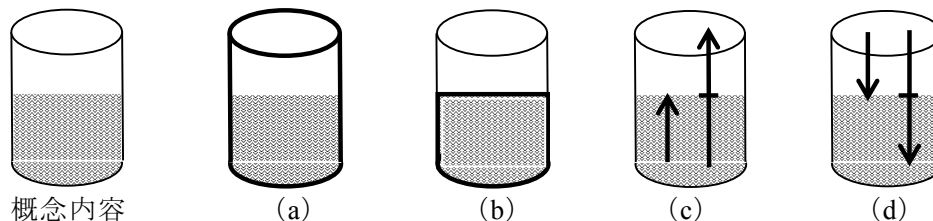


図.1 容器と水 (Langakcer (2008 : 44) を改変)

- (2) a. the glass with water in it. (水が中に入ったグラス。)
b. the water in the glass. (グラスに入った水。)
c. the glass is half-full. (グラスは半分満たされている。)
d. the glass is half empty. (グラスの半分は空である。)

(山梨正明監訳 (2011 : 55 - 56) ²)

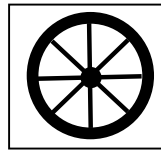
解釈 (2a) は容器全体を示しており、(2b) はその中身、(2c) は液体に示されている容量が、容器に入れられる量の半分であるという関係を、(2d) は、容器の空いている部分が容器の容量の半分であるという関係を示している (cf.山梨正明監訳 (2011 : 55 - 56))。このように、客観的には同一の事象 (event) であっても、解釈によって異なる概念が得られることがわかる。

谷口一美 (2005 : 3 - 12) では、言語表現の意味にとって重要な認知能力として、認知的際立ちと心的走査が挙げられている。そこで、次節では、認知的際立ちに関わる「ベース・プロファイル (base・profile)」、認知的際立ちと心的走査が共に関わる「心的走査 (mental scanning)」、更に事象観察の立脚点に関わる「パースペクティブ (perspective)」を詳述する。

2.1.1 ベース・プロファイル

プロファイルとは、焦点化であり、ベースとは、プロファイルの背景的要素である (cf.辻幸夫 (編) (2013 : 338))。まず、簡単な例を挙げて説明する。次の図を参照されたい。

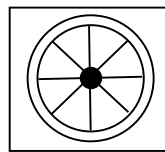
² 括弧内の日本語訳は拙訳。



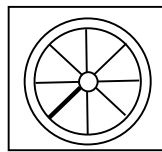
wheel

図.2 wheel (Langacker (2008 : 67) を改変)

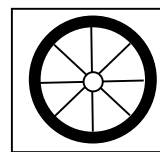
図.2 は wheel を概略的に図式化したものである。wheel には、hub や spoke, rim といったパーツが含まれ、これらは、図.2 を基に、次のように図式化可能である。



(a) hub



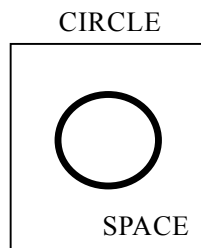
(b) spoke



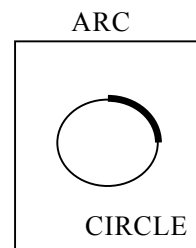
(c) rim

図.3 hub, spoke, rim (Langacker (2008 : 67) を改変)

図.3 の (a) hub (b) spoke (c) rim は、それぞれ太線の部分を指しており、これらは全て wheel を基にしている。つまり、hub, spoke, rim という概念は、wheel をベース、つまり背景的要素とし、太線になっている部分をプロファイルすることによって獲得されたといえる。では、wheel は何をベースとするのだろうか。続いて、次の図を参照されたい。



(a)



(b)

図.4 CIRCLE と ARC (Langacker (1987a : 184) を改変)

四角の上部には、プロファイルによって得られる概念が、四角の中にはプロファイルを行うためのベースがそれぞれ書かれている。ARC は CIRCLE をベースとし (図 4 (b))、CIRCLE は SPACE ((二次元) 空間) をベースとする (図 4 (a))。よって、wheel もまた、空間をベースとしているといえる。空間や時間のように、これ以上還元されない領域を、基本領域 (basic domain) という (cf.Langacker (1987a : 411))。

認知文法では、文法範疇は、概念内容全体ではなく、プロファイルの特性によって

決定されると考えられている (cf.山梨正明 (2011 : 125))。例えば、名詞 (noun) は、一般にモノ (thing) を表すと考えられているが (cf.Langacker (2008 : 93))、ラネカーは、ベース・プロファイルによって、名詞を概念的に定義づけている。図.4 の CIRCLE, ARC を例にとつていうと、両者は共に SPACE, CIRCLE という領域 (domain) の一部を占めていることから、名詞の概念的な意味とは、ある領域を占める一定の区域 (region) であるということが出来る (cf.Langacker (1987a : 218))。

モノは事物 (entity)³の下位概念であり、事物の下位概念には、他にも関係 (relation) がある。モノと関係の違いと文法範疇について、ラネカーは together と group を例に説明している (cf.Langacker (1990 : 75))。次の図を参照されたい。

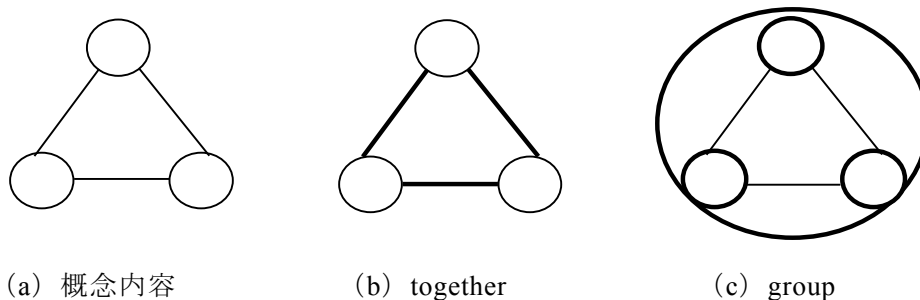


図.5 together と group (Evans and Melanie (2006 : 562) を改変)

together (副詞) と group (名詞) は、概念内容は同一であるが、プロファイルする領域が異なる。前者は、各個体の連結部をプロファイルし、後者は、概念内容全体をプロファイルする。前者は、副詞の概念的な特徴⁴であり、後者は、名詞の概念的な特徴⁵である。

また、関係を理解する上で、個々の要素の認知的際立ちは均等にならず、非対称になる点に留意する必要がある。この際立ちの非対称性の関係を表したのが、tr (trajector : トラジェクター) と lm (landmark : ランドマーク) である (cf.Langacker (1987a : 217))。tr は、最も認知的際立ちが高い部分を指し、lm はそれ以外を指す。認知文法で馴染みのある例として、above と below が挙げられる。次例と図.6 を参照されたい。

³ 認知文法において、事物とは、この世で我々が考え得る、あらゆる事物の総称を指す (cf.Langacker (1987a : 199))。

⁴ A relational predication presupposes a set of entity, and profiles the interconnections among these entities. (Langacker (1987b : 230))

⁵ An nominal predication presupposes the interconnections among a set of conceived entities, and profile the region thus established. (Langacker (1987b:230))

- (3) a. The knob is above the keyhole. (取っ手はカギ穴の上にある。)
 b. The keyhole is below the knob. (カギ穴は取っ手の下にある。)

(辻幸夫 (編) (2013 : 255))

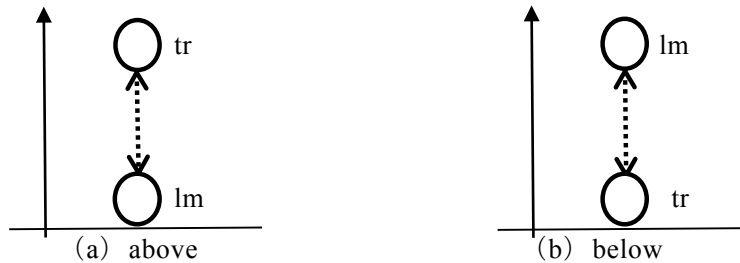


図.6 above と below (辻幸夫 (編) (2013 : 255) を改変)

(3a) は、かぎ穴を手掛かりにして、取っ手の位置を明らかにしている。概念化者の意識は、かぎ穴、取っ手両方に向けられているが、(3a) は、ノブの位置を問題にしている点で、それに対する注意度のほうが高い (辻幸夫編 (2013 : 255-256))。これとは反対に、図. 6 (b) はかぎ穴の位置について述べられているため、認知的際立ちはかぎ穴のほうが高くなる。

tr と lm は、ゲシュタルト心理学における図 (figure) ・地 (ground) より着想を得ている (cf.松本曜 (2003b : 50))。図と地の代表例として、ルビンの壺 (rubin's vase) が、人口に膾炙するところであろう。次の図を参照されたい。

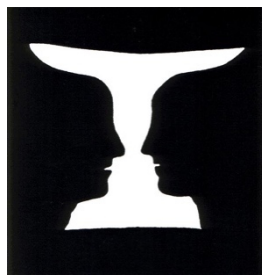


図.7 ルビンの壺

図.7 のルビンの壺から、2通りの概念が得られる。まず、周囲を覆う黒い部分に注目した場合、中央の白い部分は背景化 (background) され、向かい合う顔の形が前景化 (foreground) される。反対に、中央の白い部分に注目した場合、周囲は背景化され、壺の形が前景化する。図と地は、前景 (foreground) と背景 (background) の関係を指す。ラネカーは、図と地を、表裏一体の関係ではなく、地をむしろ「第二の図」だとしているため、ゲシュタルト心理学とは異なる用語を用いている (cf.松本曜 (2003b : 50))。

話を文法範疇に戻す。図 5.で触れた **together** と **group** を例に見たように、事物は、モノと関係に下位分類される。関係は更に下位分類され、関係と同時に時間をプロファイルする時間的な関係 (**temporal relation**)、副詞のように時間をプロファイルしない非時間的な関係 (**atemporal relation**) に分かれる。前者はプロセス (**process**) (Langacker (1987a : 244)) とも言われ、プロセスは動詞の概念的な特徴にあたる。例として、“出”と“進”で表す空間移動を挙げる。次例と図を参照されたい

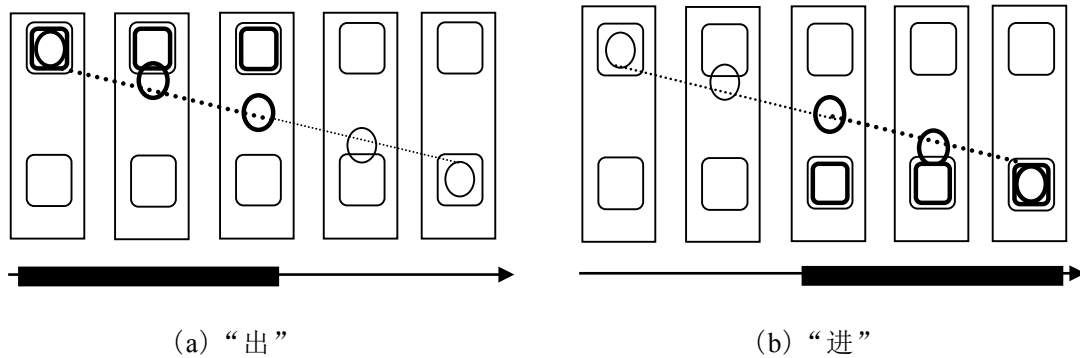


図.8 “出”と“進”

- (4) a. 急忙跑出屋去。(吕叔湘主编 (1999 : 48))
 (あわてて部屋を出ていった。)(牛島・菱沼監訳 (2003 : 62))
 b. 我挤不进会场。(吕叔湘主编 (1999 : 309))
 (会場が混んで入れない。)(牛島・菱沼監訳 (2003 : 207))

(4a) では、概念化者が、モノの位置が領域の中から外に変化していく各段階を時間軸に沿って追跡し、(4b) では、モノの位置が領域の外から中に変化していく各段階を時間軸に沿って追跡している。反対に、図.8 のような事象を、時間をプロファイルしない場合、英語では前置詞が当てはまる。ラネカーは、次の図と例を用いて説明している。

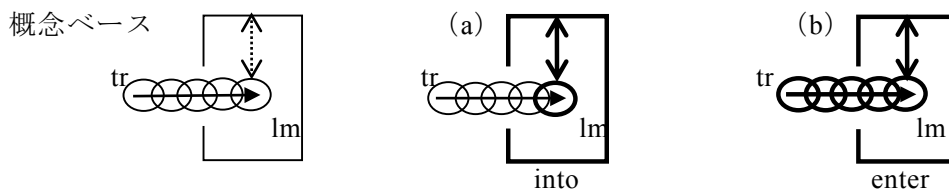


図.9 into と enter (Langacker (2008 : 101) を改変)

- (5) a. The train chugged into the station. (Langacker (2008 : 101))
 (汽車はシュッシュュッと音を立てて駅に入った。)

b. He entered the building. (Langacker (2008 : 101))

(彼はビルに入った。)

into, enter は、概念内容を同一にする (図.9 概念内容) が、前者は時間がプロファイルされず、後者は時間がプロファイルされている。中国語の例として、“出”と“从”の比較を挙げる。

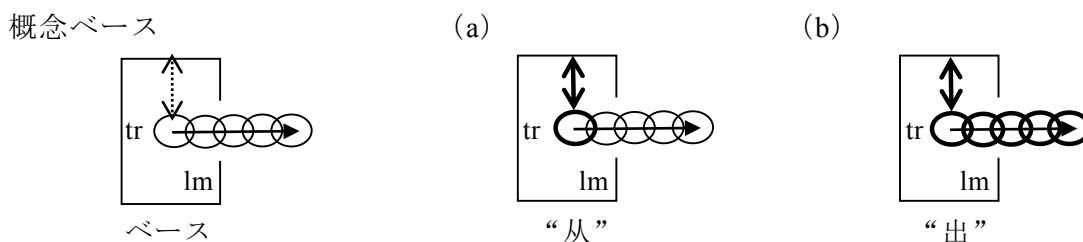


図.10 “从”と“出” (Langacker (2008 : 181) を改変)

(6) a. 张子清二话没说，就**从枕头底下**掏出了这包食盐，坚决地塞进了医生的手里。(《石碑无声 (纪念红军长征胜利 80 周年 · 散文)》)
(張子清は、少しもためらわず、枕の下から袋に入ったその食塩をだし、きっぱりと医者の手押し込んだ。)

b. 读大学在上海，那时没有直达的火车，所以只好**从大连**坐船走，要走将近四十个小时。(《坐船 (十年)》)
(大学は上海で、当時は直通の列車がなく、大連から船に乗るしかなく、40 時間近くも費やした。)

c. 本报记者无论乘飞机、坐地铁，还是**从公园长椅旁**走过，都会看到有人捧着书或电子阅读设备，沉浸在文字的海洋。
(《美国 阅读，快乐生活的一部分》)

(本誌の記者は、飛行機に乗っていようが、地下鉄に乗ろうが、また公園にあるベンチの横を横切ろうが、必ず本か電子書籍リーダーを手にして、文字の海洋に浸る人を見かける。)

上例のように、“从”と“出”の違いは、時間をプロファイルするか否かに認められる。ただし、介詞フレーズ「“从” + 場所」で表す起点は、三次元 ((6a))、二次元、

一次元 ((6b))、通過点 ((6c)) も含まれる⁶。

以上、ベース・プロファイルによって文法範疇もまた概念的に定義づけられていることを述べた。ここまでの内容を次にまとめる。

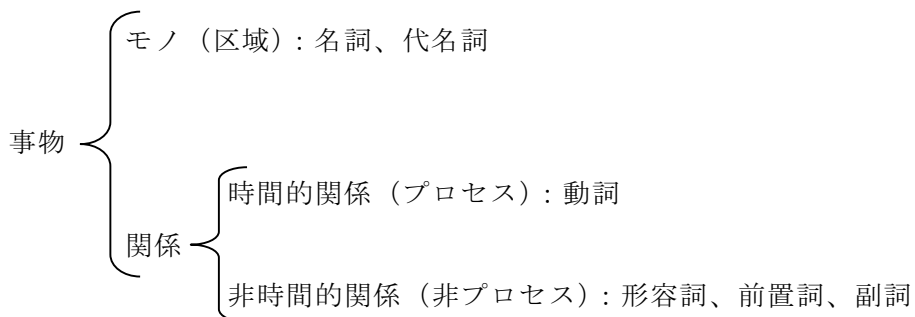


図.11 ベース・プロファイルと品詞分類 (谷ロー美 (2005 : 10) を改変)

上掲図.11 は、英語の分類を表したものである。中国語の場合、非時間的關係の前置詞には、介詞が当てはまる。

以上、ベース・プロファイルについて述べた。

2.1.2 心的走査

ラネカーは、動詞スキーマは関係を理解する能力と時間的に関係を追跡する能力という、2つの基本的な認知能力を必要とすると述べている (cf.山梨正明監訳 (2011 : 137))。ヒトは、物理的に移動するものだけでなく、静的な関係を時間に沿って追跡することが可能である。この認知能力を、心的走査 (mental scanning) という。心的走査の証左として、コスリンらの研究が挙げられる (Kosslyn et al., 1978)。次の図を参照されたい。



図.12 心的走査の実験 (Kosslyn et al., 1978)

コスリンらは、図.12 を用いて、島の中にある 7つのランドマークを視覚的に走査す

⁶ “从”の用法について、詳しくは森宏子 (1998) を参照されたい。

る時間と、図を記憶し、頭の中で各ランドマークを走査する時間を比べた。その結果、物理的に距離が離れていれば、心的走査もまた、視覚的走査と同様に時間がかかることがわかった (cf.松岡和夫 (2014 : 85))。では、心的走査がどのように言語に表象しているかを見る。次例を参照されたい。

(7) a. The car **ran** from Tokyo to Osaka.

(車は東京から大阪まで走った。) (河上誓作 (1996 : 15))

b. The highway **runs** from Tokyo to Osaka

(高速道路が東京から大阪まで走っている。) (河上誓作 (1996 : 15))

(8) a. 把头**伸**过来。

(頭をこちらの方へ突き出す。) (『白水社中国語辞典』)

b. 道路一直**伸**向远方。

(道がまっすぐに遠くまで伸びる。) (『白水社中国語辞典』)

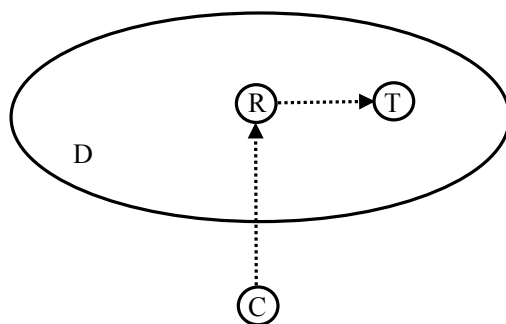
(7a) (8a) は、共に物理的移動を表すが、(7b) (8b) で移動しているのは、視点、若しくは想像である。前者は客観的移動 (objective motion)、後者は主観的移動 (subjective motion) と言われている (cf.河上誓作 (1996 : 15))。

更に、心的走査は、あるモノを間接的に認識するために用いられることがある。このことについて、松本曜 (2003 b : 87) では次のように述べられている。

(9) たとえば、私たちが日常、ある建物の場所を人に教える際に「郵便局のすぐ裏」とか「銀行の隣」などという場合、相手がすでに知っている、あるいは目立っていて把握しやすい郵便局や銀行を参照点として、問題の場所を捕らえやすくしているわけである。あるいは、自分が直接面識のない人について、どのような人であるかを推測する場合に、その人が自分のよく知っている A さんの友達だからいい人 (あるいは、よくない人) だと判断するとしたら、A さんを参照点として問題の人を把握しようとしていることになる。

(松本曜 (2003b : 87))

上記のように、ある対象を把握したり指示する際、その対象を直接把握するのに何らかの困難を伴う場合に、別のより把握しやすいもの、あるいはすでによくわかっているモノを参照点 (reference point) として活用し、本来把握したい対象を捉えるという参照点能力 (reference point ability) という (Langacker (1999) ; 松本曜 (2003b : 87))。次の図を参照されたい。



C = conceptualizer (概念化者) D = dominion (領域) R = reference point (参照点)

T = target (対象)

.....▶ = metanl path (心的経路)

図.13 参照点構造 (Langacker (1999 : 174) を改変)

参照点構造の言語の表象として、二重主語構造、所有構造が挙げられる。次例を参照されたい。

(10) a. 小李家里穷。(李君は家が貧しい。)(尾上ほか (1998 : 98))

b.*家里小李穷。(? 家は李君が貧しい。)

(11) a. 我的词典。(私の辞書。)

b. ??词典的我。(? 辞書の私。)(相原ほか (1996 : 35))

(10b) (11b) が成り立たないのは、参照点と対象とでは、認知的際立ちに明確な差があり、“家里”や“词典”は“小李”“词典”と比して、参照点になれず、主語の位置に置くことができないからである。

以上、心的走査について述べた。

2.1.3 パースペクティブ

ラネカーは、パースペクティブとは、視点の配置 (viewing arrangement) であり、視点の配置とは「観察者」と「観察されている状況」の全体的な関係のことであると述べている (cf.山梨正明監訳 (2011 : 95-96))。視点配置の構成要素の1つに、前提となる立脚点 (vantage point) がある (山梨正明監訳 (2011 : 95-96))。卑近な例として、当時の子供たちに、「おばけ煙突」と謂われた千住火力発電所があげられる。これは、千住火力発電所の4本の煙突が、時に1本に見えることもあり、2本に見えることもあり、3本、4本に見えることを所以としている。容易に推察可能であろうが、煙突を見る位置によって、見える本数が違うのが、おばけ煙突の正体である。真横から見ると1本、斜めから見ると2本、正面からは4本という具合である。このように、対象を観察する位置、すなわち立脚点の違いによって、異なる概念が得られる。

では、空間における視点の配置がどのように言語に表象しているか概観する。次の図と例を参照されたい。



図.14 立脚点（水平）（Langacker（2008：76）を改変）

- (12) $VP_1 \rightarrow (\text{rock}) \text{ ——— } (\text{tree}) \leftarrow VP_2$
- a. VP_1 : The rock (tr) is in front of the tree (lm) . (岩が木の前にある。)
 The tree (tr) is behind the rock (lm) . (木が岩の後ろにある。)
- b. VP_2 : The tree (tr) is in front of the rock (lm) . (木が岩の前にある。)
 The rock (tr) is behind the tree (lm) . (岩が木の後ろにある。)
- (Langacker (2008 : 76⁷))

図 14.では、立脚点が、rock の前か、tree の後かの 2 通りで表されている。立脚点を rock の前に置く（図 14 (a)）ことによって、(12a) のような意味が、立脚点を tree の後ろに置く（図 14 (b)）ことによって (12b) のような意味が得られる。(12) は、水平における視点の配置であるが、垂直における視点の配置でも、(12) と同様に 2 通りの解釈が得られる。次例と図を参照されたい。



図.15 立脚点（垂直）

- (13) a.この山は、山頂から中腹まで急激なくだりだ。(靱山洋介（2010：29）)
 b.この山は、中腹から山頂まで急激なのぼりだ。(靱山洋介（2010：29）)

図.15 (a) のように、立脚点を上部に置き、下方を眺めることによって、(15a) のような表現が、図.15 (b) のように、立脚点を下部に置き、上方を眺めることによって、

⁷ 括弧内の日本語訳は拙訳。

(15b) のような意味が獲得される。

次に、水平移動 (horizontal motion) の例を見る。次の図と例を参照されたい。

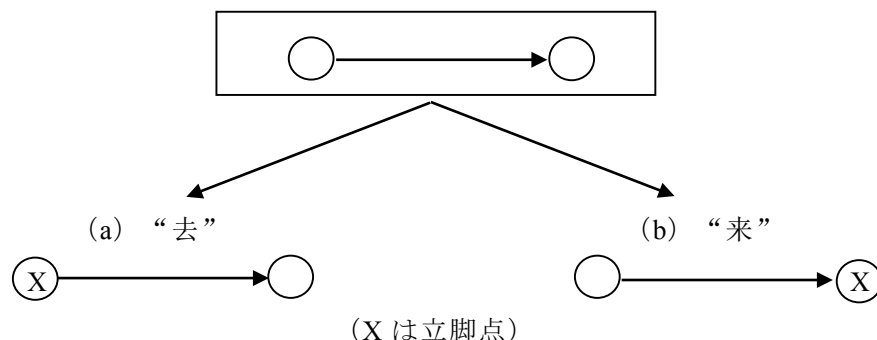


図.16 立脚点 (刘月华主编 (1998 : 4) を改変)

(14) a. 这时小李向我跑来 (“我” 是立足点)。(刘月华主编 (1998 : 3))

(このとき、李さんは私に向かって走ってきた。) (立脚点は「私」)

b. 我看见人们向山上跑去 (“我” 是立足点)。(刘月华主编 (1998 : 3))

(私は人々が山に向かって走っていくのを見た。) (立脚点は「私」)

図.16 のように、概念内容が同一であっても、立脚点が異なることによって、“来” “去” という異なる概念が得られることがわかる。

以上は、水平視点、垂直視点、水平移動における立脚点を見た。立脚点は、空間のような具体的な領域だけでなく、事象構造 (event structure) のような抽象領域にも配置することができる。Tai (1984) ; 影山太郎 (1996) は、言語間に見られる語彙的アスペクトの差異は、事象構造における視点の配置に依ると仮定している。次の図と例を参照されたい。

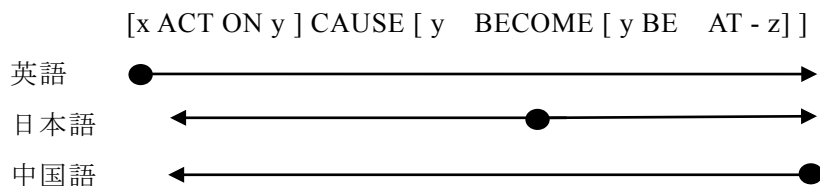


図.17 言語による視点の違い (影山太郎 (1996 : 290) を改変)

(15) a. * I killed john but he didn't die. (Tai (1984 : 291))

(私はジョンを殺したが、彼は死ななかった。)

b. *捕まえたが、捕まらなかった。(影山太郎 (1996 : 289))

c. お父さんは、起こしても起きなかった。(影山太郎 (1996 : 289))

- d. 张三杀了李四两次，但李四都没死。(Tai (1984 : 291))
 (張三は李四を二回殺したが、李四はいずれも死ななかった。)
- e. *张三杀死了李四两次，但李四都没死。(Tai (1984 : 291))
 (張三は李四を二回殺したが、李四はいずれも死ななかった。)

英語では、表現視点が行為者におかれ、事象全体を見つめているため、動詞は結果を内包し、日本語では、視点を上位事象と下位事象の中間に置いているため、結果含意が曖昧となっている。中国語では、視点を結果に置き行為を見つめるため、結果完了を含意せず、結果を含意するためには複合動詞(“杀死”)が用いられる。

以上、パースペクティブについて述べた。

2.2 抽象化

2.1.1~2.1.3 節では、「どこを見るか (ベース・プロファイル)」「どのように見るか (心的走査)」「どこから見るか (パースペクティブ)」という、同一の事象の解釈に関わる認知能力について述べてきた⁸。続いて本節は、事象の抽象化について述べる。

2.2.1 スキーマについて

我々の複数の身体経験から固有の共通点を抽出し、高次の抽象化に到達する認知プロセスは、スキーマ化 (schematization) いわれる (cf.山梨正明監訳 (2011 : 21))。例えば、10 人にパンを描かせれば、10 人とも異なるパンを描くが、全てパンであることが理解できるだろう。これは、我々が対象 (パン) を触り、食べ、作り、観察する環境 (パン) との相互作用によって、対象に対する抽象的な知識が脳に蓄えられているからである。人の最も基本的な経験の一つに、包含関係がある。例えば。児玉・野沢 (2009 : 32) では、「食べる」「飲む」という日常的な行為には、様々な包含関係があり、乳幼児は、包含関係を表す様々な経験を日常的に繰り返すことが指摘されている。次の引用文を参照されたい。

- (15) You wake *out* of a deep sleep and peer *out* from beneath the covers *into* your room.
 You gradually emerge *out* of your stupor, pull yourself *out* from under the covers,
 Climb *into* your robe, stretch *out* your limbs..... (Johnson (1987 : 30))
 (あなたは深い眠りから (out) 目覚め、寝具の中から (out) 部屋を (into)
 じっと見つめる。しだいに無感覚の状態から (out) 抜け出し、寝具から

⁸ 榎山洋介 (2010 : 27) では、同じ物事に対する異なる捉え方として、「同じ物事を異なる視点からとらえる」「同じ物事の異なる部分に注目する」「同じ対象について構成要素に注目するか全体を把握するか」という認知能力が重要であると述べられている。

(out) 出て、ローブを (into) 急いで着、手足を (into) 伸ばし・・・

(菅原・中野訳 (1991 : 102))

これらの内 (in) と外 (out) の意味には、空間における明確な方向付けを伴うものもあれば、抽象的で非空間的な関係を伴うものもある。しかし、それらはすべて、物理的存在者や出来事ないし抽象的存在者や出来事の間に関係を打ち立てる活動を必要とする (菅原・中野訳 (1991 : 103))。内と外にわかれる境界性を有し、内容物を入れることができる事象の数々は、容器 (container) として抽象化され、知識として脳に蓄えられる。次の図.18 はイメージ・スキーマ (image schema) と言われている。イメージ・スキーマとは、特に視覚、空間、動き、そして力と関連する日常の身体経験から抽出されたスキーマ化されたパターンである (山梨正明監訳 (2011 : 41))。

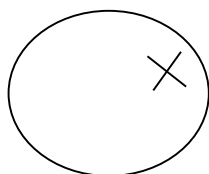


図.18 包含 (Johnson (1987 : 23) を改変)

2.2.2 図表について

イメージ・スキーマに限らず、認知言語学では図表を多用⁹するが、時として誤解を招くことがある。そのことについて、ラネカーは次のように説明している。

(16) Among the misconceptions concerning the diagrams of CG are (i) that they are offered as precise and rigorous formal representations and (ii) that they are merely ad hoc, informal “pictures”. (Langacker (2008 : 10))

(認知文法の図表に関する誤解の中には、以下のようなものが含まれる

— (i) 図表は正確で精密な形式の標示として描かれている。(ii)

図表は単にその場限りのものであり、厳密な意味での何らかの規則に従う描写ではない。(山梨正明監訳 (2011 : 12))

「イメージ図式は命題である」というのは、図表に対する誤解の一つである。なぜなら、図表は、どのように慎重に描かれたであっても、数学的な厳密さには欠けてい

⁹ イメージ・スキーマについては、俗に「イメージ論争」と呼ばれるように、イメージの心理的な実在性について議論が上げられている (cf. 箱田祐司 (2010 : 133))。

るからである (cf.山梨正明監訳 (2011 : 12))¹⁰。ジョンソン (Johnson, M) は、図式は、比較的順応性を持つものであり、異なる状況に適合するように、図式を修正できるのは、関連する状況には反復される構造が潜んでいるからであると述べている (cf.菅原・中野訳 (1991 : 103))。認知心理学では、スキーマは、固定的な要素と可変的な要素を持つとされている (cf.都築誉史 (2010 : 198))。図.18 の包含のスキーマを例にとっていうと、包含のスキーマの固定的な要素は、内と外へと分かれている点、また内にモノを含むことができる点である。可変的な要素は、内と外をわける境界線の具象性である。ラネカーは、多くの境界がファジーなことからも、境界が客観的に認識的できる必要がないことを示される、と述べている (山梨正明監訳 (2011 : 174))。このことを、中国語を例に見てみる。次例と図を参照されたい。

- (17) a. **包里**有三个钱包。(バッグには財布が三つある。)
 b. **杯子里**有一杯水。(グラスに水が入っている。)
 c. **他心里**有别人。(彼の心の中には別の人がいる。)

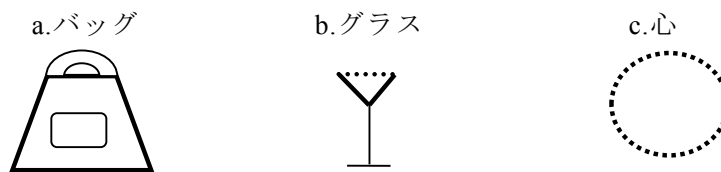


図.19 容器の境界線

内と外の境界は、図.19 (a) バッグのように具体的な境界線でふさがれているモノもあれば、図.19 (b) グラスのように境界が我々の認識によって補填されているモノもあり、図.19 (c) 心のように、境界がどこにあるのか具体的に指摘することが、そもそも不可能なモノもある。このことから、境界は客観的に課されるのではなく、むしろ概念的に課されていることがわかる (cf.山梨正明監訳 (2011 : 174))。

以上、図表について述べた。

2.2.3 スキーマと意味拡張について

経験から獲得されたスキーマが、認知言語学において重要な意義を担う理由は、言語の多義性 (polysemy) (Taylor (2012 : 241))¹¹は、イメージ・スキーマを介して拡張

¹⁰ ラネカーは図式を本質的に「理解を手助けするもの」と述べている。

(cf.山梨正明監訳 (2011 : 12))

¹¹ テイラーは、多義性について次のように述べている。polysemy as the association of two or more related meanings with a single phonological form. (Taylor (2012 : 241))。

されると考えられているからであるといえよう¹²。ジョンソンは、「包含」の経験には繰り返されるパターンがあること、パターンは拡張され、変形され、隠喩的に投射されて、外へのさまざまな（しかし互いに関連した）意義の多くをもたらさう、と述べている（菅原・中野訳（1991：121））。すなわち、物理的移動は、繰り返され、定着した身体経験によって意味拡張されるのである。このことを、次に図式化する。

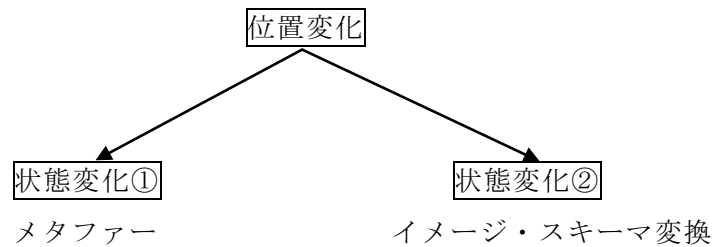


図. 20 イメージ・スキーマを介した意味拡張

位置変化は、イメージ・スキーマを介して、メタファー的な意味とイメージ・スキーマ変換による拡張義に拡張される。“進”と“出”の意味拡張については、それぞれ第5章、第6章に譲り、ここでは、簡潔に例を示す。

まず、メタファー (metaphor) について述べる。メタファーは、修辞の一つではなく、深くヒトの身体経験と関わることを打ち出したのが、Lakoff and Johnson (1980) ; Lakoff (1987) ; Johnson (1987) といった、認知意味論の記念碑的研究である¹³。具体的な事例として、「MORE IS UP; LESS IS DOWN (より大ききは上、より少なきは下)」(cf.渡部他訳 (1986：22)) が挙げられる。次の図と例を参照されたい。

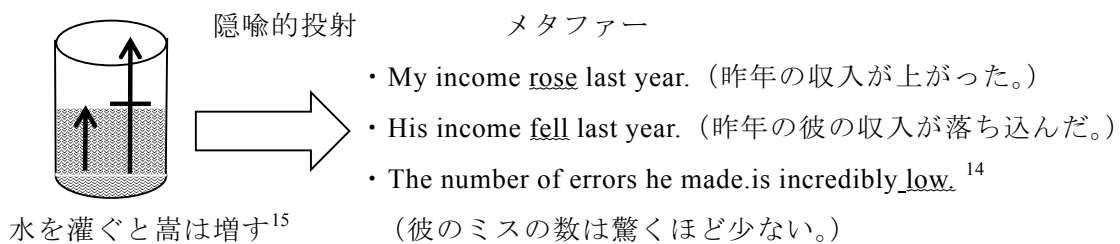


図.21 MORE IS UP; LESS IS DOWN

メタファーは、2つの事物・概念の類似性を見出す「比較する」という能力が基になっている (cf. 靱山・深田 (2003：78))。上記図.21 を例にとつていうと、概念化者は、

¹² イメージ・スキーマを介した意味拡張は、深田・仲本 (2008：166-170) に詳しい。

¹³ メタファー、ひいては認知意味論の史的展開は、谷口一美 (2003：1-8) に詳しい。

¹⁴ 用例は、谷口一美 (2003：21) より。破線部は筆者による。

¹⁵ 図は Langacker (2008：44) を改変。

「水を灌ぐと嵩は増す」という具体的な身体経験から、抽象領域における共通点を見出し、「上がる」や「下がる」といった表現を対応させている。このように、具体的な領域から抽象的領域への対応づけは、写像 (mapping) といわれている (cf.谷口一美 (2003 : 52))。

次に、イメージ・スキーマ変換 (image-schema transformation) による意味拡張の例を挙げる。認知心理学における検証により、ヒトにはイメージを操作する能力があることが知られている。その先駆的な研究がシェパードとメツェラーの、心的回転 (mental rotation) に関する研究である (Shepard & Metzler (1971))。次の図を参照されたい。

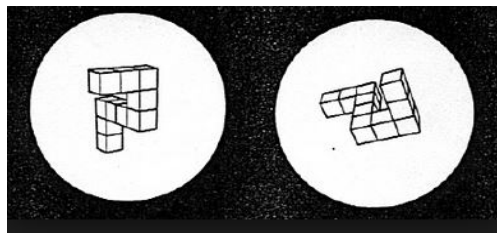


図. 22 心的回転 (Shepard & Metzler (1971))

シェパードとメツェラーは、図.22 のように、角度が違う同形の図を被験者に見せ、角度の違いと二つの図を一致させるまでの時間を実験した。角度が異なることに比例して、一致させるまでの時間がかかる実験結果から、ヒトにはイメージを頭の中で操作する能力があることがわかる (cf.箱田祐司 (2010 : 130-131))。このヒトのイメージ操作能力と意味拡張の動機づけの繋がり、認知意味論の分野で検証されている。ここでは、Lindner (1981) の研究を参考に、out の意味拡張について述べる。次の図と例を参照されたい。

- (18) a. The syrup spread *out*. (シロップが広がった。)
 b. The posse spread *out*. (群衆が散らばった。)
 c. They stretched *out* the taffy. (彼らは飴を引き延ばした。)
 d. We rolled *out* the carpet. (私たちはカーペットを広げた。)
- (池上ほか訳 (1993 : 532))

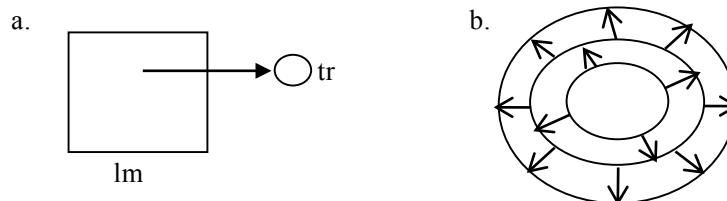


図. 23 池上ほか訳 (1993 : 532) を改変)

内から外への位置変化は、図.23 (a) のように、lm と tr は分離しているが、概念化者は、両者を同一個体にとらえ、上例 (18) のような、膨張を表す拡張義を獲得している。この場合、lm はデフォルトの状態であり、tr は可動部を指す。

以上、抽象化について述べた。

2.3 おわりに

本章では、認知言語学の理論仮構物について詳述した。本章の要点を以下にまとめ、おわりにかえる。

- (19) a. プロファイルとは、焦点化であり、ベースとは、プロファイルの背景的要素である。ベース・プロファイルは、概念を獲得するだけでなく、文法範疇を概念的に名付ける上でも有効であるとされている。
- b. 心的走査とは、概念化者が静的な対象を心的に辿る認知能力である。認知的際立ちの高い参照点を通して、対象に辿り着く心的走査を、参照点能力という。
- c. パースペクティブとは、事象を異なる位置から観察することによって概念を得る認知プロセスである。
- d. スキーマ化とは、経験を体制化、抽象化し、知識として得る認知プロセスである。イメージ・スキーマとは、スキーマを、アナログ的、非命題的に図式化したものである。スキーマは、言語獲得、意味拡張を論じる上で非常に重要である。スキーマを介して拡張される拡張義の動機づけは、メタファーとイメージ・スキーマ変換にわけられる

第Ⅱ部：分析①

第Ⅱ部では、第Ⅲ部と関わる移動事象と存在事象を理論的観点から分析する。第Ⅱ部では、多くの言語事実を提示し、内省的にまとめるのではなく、より原理的な説明を与えることを試みる。具体的に言うと、第3章では、言語類型論における移動表現の動詞に包入される意味役割の分類（田中・松本（1997））に基づきながら、移動表現の付随要素には、なぜ多様な意味役割が包入されるのか、ということについて説明をし、第4章では、なぜ存現文という文法範疇が存在するのか、なぜ存現文は体系を持つのか、という点を説明する。

第3章 移動事象について

3. はじめに

本章は、移動事象に関する言語類型論からの研究（Talmy（1985）；田中・松本（1997）；Slobin（2004））及び認知言語学（Langacker（1987a, 2008））の枠組みから、現代中国語の移動表現を考察するものである。

論の進め方として、3.1節では、言語類型論の枠組みから中国語における移動表現について概観し、3.2節では、認知言語学と認知言語学の枠組みから、付随要素の包入（conflation）¹について考察し、3.3節で全体のまとめを述べる。

3.1 中国語における移動表現

本節では、言語類型論の枠組みから、中国語の移動表現について概観する。

3.1.1 移動事象の構成要素

Talmy（1985）では、移動には、移動物、移動の経路、経路を規定する参照物の3つがあり、これらはそれぞれ、図（figure）、経路（path）、地（ground）と呼ばれている（cf.井上京子（2003：275））。タルミーは移動の各要素と英語の対応を、(1)を例に、(2)のように図式化した。本研究も(2)に倣い、移動の各要素と中国語の対応を、(3)に示す。図.1と共に参照されたい。

(1) The bottle floated out (of the cave) (Talmy (1985))

(ボトルが浮かびながら洞窟から出てきた。)

¹ 包入とは、文の中核である動詞に原因、様態、方法といった要素がとりこまれる現象を指す（田中・松本（1997：130））。

1.4 節でも簡単に触れたが、動詞に後置する要素を一概に「補語」と称するのは、慎重になる必要がある。これは、上記の“走”や“在”の他にも、方向補語 i のスロットに入る“上”“下”“进”“出”といった要素は、動詞にも組み込まれるため、一概に補語と定義づけるのが困難であることに起因する。次例を参照されたい。

(6) a. 游行队伍正好从我家门前过。(吕叔湘主编 (1999 : 245))

(デモ行進がちょうど家の前を通っていった。)

(牛島・菱沼 監訳 (2003 : 157))

b. 从桥上走过。(吕叔湘主编 (1999 : 310))

(橋を渡る。)(牛島・菱沼監訳 (2003 : 208))

(6a) において、経過を表す“过”は単独で用いられるが、(6b) では動詞に後置されている。実際、「動詞とはなにか」という定義をめぐって、Talmy (1985) と Slobin (2004) では、解釈の混乱が見られ、両者とも中国語を異なる枠組みでとらえている (cf. 井上京子 (2003 : 277))。タルミーは、移動事象を表す述部の構成によって、世界の言語を動詞枠づけ言語 (verb frame language) と衛星枠づけ言語 (satellite frame language) に分けた (Talmy (1985))。動詞枠づけ言語とは、日本語のように、移動の経路自体が動詞に包入されている言語を指し、衛星枠づけ言語とは、英語や中国語のように、移動の経路・方向性が動詞以外の要素で表されている言語を指す。次例を参照されたい。

(7) a. フクロウがひよいと出てきた。(堀江・ブラシャント (2009 : 24))

b. An owl popped out. (Slobin (2004 : 224))

c. 飞出一只猫头鹰。(Slobin (2004 : 224))

日本語では、経路が動詞(「出る」)に包入され、英語と中国語では、経路は動詞 (pop, “飞”) に後置される要素 (out, “出”) によって表される。英語には、to, onto, into, from, off, out of, via, across, along など移動の経路位置関係と方向を表す前置詞句が数多くある (cf. 田中・松本 (1997 : 133))。中国語も同様に、動詞に後置する方向補語のスロットには、次のような、経路・方向性を表す方向補語が入る。本研究は、移動の概念内容によって、経路・方向性を4種に分けた。次の分類を参照されたい。

(8) a. 垂直移動：“上”“下”(例：“走下楼”“走下楼”)

“起”(例：“气球慢慢升起”)

- b.水平移動：“回”（例：“寄回国”）
“来”（例：“老郑明天来北京”）
“去”（例：“昨天已经去了三个儿女”）
“开”（例：“离开家”）
“到”（例：“回到家”）
- c.内外への移動：“进”（例：“走进屋”）
“出”（例：“走出屋”）
- d.通過：“过”（例：“汽车开过桥”）

（括弧内の例は刘月华主编（1998：4-5）；吕叔湘主编（1999：345，455）より³）

経路表現を補う表現として、方向を表す介詞“朝”“从”“往”“到”を用いて、「介詞＋場所」フレーズを動詞に前置するケースもある。“往”“到”は動詞に後置することも可能である。次例を参照されたい。

- (9) a.我刚从农村回来。（吕叔湘主编（1999：130）
（私は農村から帰ってきたばかりだ。）（牛島・菱沼 監訳（2003：66））
- b.舰队朝海岛驶去。（吕叔湘主编（1999：115）
（艦隊は島に向かって進んでいく。）（牛島・菱沼 監訳（2003：54））
- (10) a.车队开往拉萨。（吕叔湘主编（1999：547）
（車の隊列はラサに向かった。）（牛島・菱沼 監訳（2003：394））
- b.他回到了家乡。（吕叔湘主编（1999：152）
（彼は故郷へ帰り着いた。）（牛島・菱沼 監訳（2003：83））

タルミーは、語彙カテゴリーから動詞を捉えているため、付随要素に後置される要素を「補語」と呼んでいる。一方で、Slobin（2004）は、動詞を「文の主要部」と捉えているため、タルミーが「補語」と呼称する成分もまた、「動詞」とし、中国語を「同等枠づけ言語（equipollently-framed language）⁴」と位置付けている（cf.Slobin（2004））。この名称の妥当性は、次例から検証可能である。

- (11) a.这时毛泽东已经走下楼来。（《一棵怀抱炸弹的老樟树》）
（このとき、毛沢東はすでに上の階から降りてきていた。）
→*他走楼来了。
- b. 比如，一名男士躺在湖边的大石头上睡得正酣，旁人看了，真怕他一翻

³ “来”と“去”の例のみ、吕叔湘主编（1999）より。

⁴ 用語の日本語訳は、深田智（2013：5）より。

身就掉进水里。(《“中国睡”背后有原因》)

→掉水里。

(例えば、ある男性が湖のほとりにある大石の上でぐっすりと寝ていた。その姿を見て、そばにいる人は寝返りをうつと、水に落ちてしまうのではないかと心配になった。)

経路・方向性を表す要素である補語 ((11a) “下” (11b) “进”) が、(11a) では省略不可であるが、(11b) では省略可能である。これは、動詞“掉”に着点が包入されているためである。よって、補語が経路をとる必須要素であるとは一概にはいえず、動詞と補語の関係は、あくまで「同等」であり、動詞+補語の組み合わせは、「複合動詞」とも呼ぶことも可能である。但し、付随要素を表す動詞に後置される要素が、動詞か補語かという問題は、本研究にとって本質的な問題ではないので、本研究は、本動詞に付随する成分をこのまま「補語」と呼ぶことにする。

直示についても触れておきたい。方向補語のスロットに入る“来/去”は、移動の方向を表す点を賦与し、刘月华はこの点を“立足点(立脚点)”と呼んでいる(cf.刘月华主编(1998:3-4);刘月华ほか(2001:547-548))。“来/去”によって定められる立脚点は、言語環境によって、次のように3種に分類されている(cf.刘月华等(2001:547-58))。

①当说话人出现或用第一人称叙述时，说话人或“我”的位置就是立足点。

(cf.刘月华等(2001:547))

(話し手が出現、或いは第一人称で物事を述べる場合、話し手、或いは「私」の位置が立脚点になる。)

(12) a.他向我走过来。(立足点是“我”－说话人的位置)

(cf.刘月华等(2001:547))

(彼は私に向かって歩いてきた。)(立脚点は、「私」－話し手の位置)

b.昨天我们上口语课，铃还没响，老师就进教室来了。

(立足点是“我们”－说话人的位置) (cf.刘月华等(2001:547))

(昨日私たちは会話の授業を受けた。ベルが鳴らないうちに、先生が教室に入ってきた。)

→立脚点は、「私たち」－話し手の位置

②在用第三人称进行客观叙时，可以把立足点放在正在叙述的人物所在的位置上。

(cf.刘月华等(2001:547))

(第三人称を用いて客観的に物事を述べる場合、立脚点を今まさに叙述している人物の居場所に置くことができる。)

(13) a. 小张忽然昏倒在地，大家急忙向他跑过来。

(立足点是“小张”所在的位置)(cf.刘月华等(2001:547))

(張さんは突然気絶して地面に倒れ、みな慌てて彼にかけよってき
た。)(立脚点は張さんがいる位置)

b. 看见张大夫，他急忙跑了过去。(立足点是“他”原来所在的位置)

(cf.刘月华等(2001:547))

(医者の張さんを見ると、彼は急いでかけよっていった。)

(一立脚点は「彼」がいる位置)

③在用第三人称进行客观叙述时，也可以把某一处所当作立足点，这个处所或者是正在描述的对象，或者是正在叙述的事件发生的地点。(cf.刘月华等(2001:548))
(第三人称を用いて客観的に物事を述べる場合、ある場所を立脚点にすることができる。この場合、場所或いは描写している対象、或いは叙述しているできごとが起こった場所が立脚点となる。)

(14) a. 为了叫井冈山变得更快，国家派来了两千好儿女，同井冈山人一起来开发这座万宝山。(立足点是“井冈山”)(cf.刘月华等(2001:548))

(井冈山をもっと早く変貌させるために、国は、二千人もの良い男女を連れてきて、現地の人と一緒にこの宝の地を開発する。)

一立脚点は“井冈山”

b. 会场里坐了不少人，这时还不断有人进来。

(立足点是“会场”)(cf.刘月华等(2001:548))

(会場内には少なからず人が座っていたが、この時もまた絶え間なく人々が入ってきた。)

一立脚点は“会场”

但し、“来／去”は、無条件に立脚点を賦与するものではなく、制約があることが、丸尾誠(2014b)で指摘されている。次例を参照されたい。

(15) 把名字刻进去。(→*刻进来)(名前を刻み込む。)

(丸尾誠(2014b:49))

丸尾誠(2014b:49)は、名前が刻み込まれる場所に人間が存在しえないこと

が“来”の使用に抵触するとしている。

更に、“来／去”は文の充足性を与えることが、陈忠（2013）；丸尾誠（2014b）で指摘されている。直示（“来／去”）は移動表現を成立させるための必須要素であるとは限らず、場所目的語と組み合わせる時は、直示が省略可能であることが丸尾誠（2014b：189）で指摘されている。

- (16) a. *走进 → 走进教室（教室に入る） / 走进来（入ってくる）
b. *站起 → 站起身（立ち上がる） / 站起来（立ち上がる）
- (17) a. *把猪关回 → 把猪关回圈里 / 把猪关回去
（豚を元通り囲いに閉じ込める）
b. *把文件装进 → 把文件装进书包里 / 把文件装进去
（書類を詰め込む）
（丸尾誠（2014b：189）を改変）

また、陈忠（2013）は、フレーズを“完全终结”と“不完全终结”にわけ、“把”構文や目的語前置文は、完了性を強く要求するため、“来／去”との共起を必須とする、と述べている（陈忠（2013：20））。次例を参照されたい。

- (18) a. 我拿出来了一本书。（私は本を取り出した。）
b. 我拿出了一本书。（陈忠（2013：19））
- (19) a. 树上落下一片树叶来。（木から葉っぱが落ちた。）
b. 树上落下一片树叶（陈忠（2013：19））
- (20) a. 我把书拿出来了。（私は本を取り出した。）
b. *我把书拿出了。
- (21) a. 书我拿出来了。（本は私が取り出した。）
b. *书我拿出了。（陈忠（2013：20））

以上、中国語の移動事象の構成要素を概観した。

3.1.2 地の類型

前節では、移動事象が成立するには、図、経路、地が必要であることを述べた。地は、2種類に大別できる。一つは、有界的な「空間」、もう一つは非有界的な「地点」である。次例と図.2を共に参照されたい。

- (22) a. 我觉得如果你适应快的话你可以自己从楼上走下来，因为这是你的家呀。
（《战斗英雄——史光柱》）

(適応するのが早ければ、自分で上から降りて来ることができると思いますよ、なんだって、ここはあなたの家ですからね。)

b.他一共也只不过走了三十步路，看来却像是刚爬过七八座山似的。

(《七种武器之长生剑》)

(彼は三十歩歩いたにすぎないのに、見た目は山を7つか8つ超えたところのようだった。)

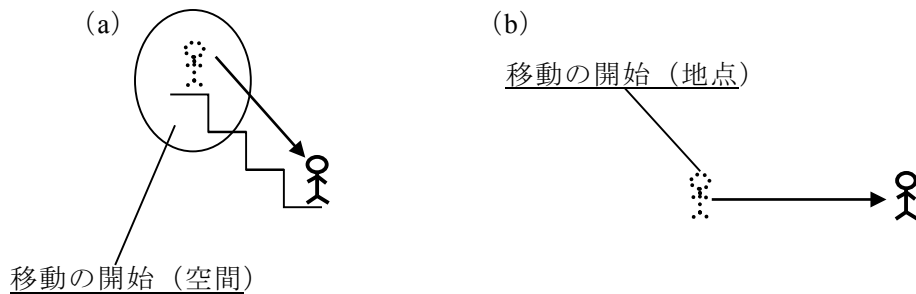


図.2 空間と地点

(22a) は、移動が生起されるのは具体的な空間内部で、(22b) は、動作“走”が生起した地点となる。但し、(22b) のように、移動の起点が、地点でもある場合、それが必ずしも動作行為が生起した地点であるとは限らない。次例を参照されたい。

(23) a.那天可真是热闹，城里街道两旁站满了人，手里拿着小彩旗，商店都斜着插出来青天白日旗……(《活着》)

(その日は本当に賑やかで、街の道の両側には人がいっぱい、カラフルで小さな旗を手にし、店には全て中華民国の国旗が斜めに掲げられていた。)

b 衣着艳丽的女仆把一盘一盘的食物摆上了红木八仙桌《宋氏家族全传》

(艶やかな服を身にまとった女中が、料理を一皿ずつ紅木のテーブルに並べた。)

(22b) と (23ab) の違いは、(22b) は移動の起点は、“走”が生起した地点でもあるのに対し、(23ab) の起点は“插”や“摆”が生起した地点ではない点にある。

(23) における“插”や“摆”は、移動の着点で生起する。このことについては、3.4.3.4 節で述べる。

空間と地点の組み合わせは多様で、考え得るだけでも、次のように7パターンで表すことが可能である。図.3 の四角は空間を、丸は地点を指す。

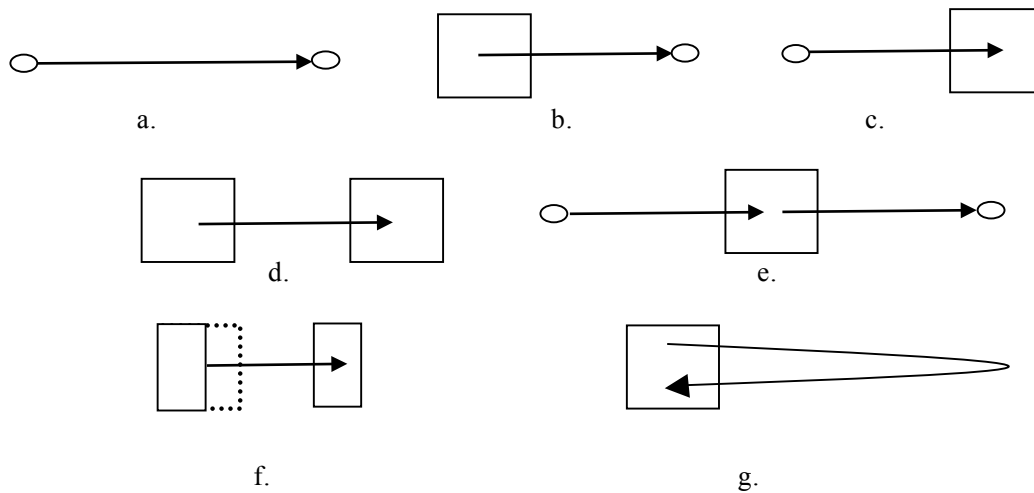


図.3 移動の地点の類型

それぞれ対応する例を次に挙げる。

- (24) a.她一直两个手举着火炬走了几百米。(《东方时空》)
 (彼女はずっと両手にトーチを持ったまま、数百メートル歩いた。)
- b.他自己也是从农村走出来的，知道教育对于人生的重要性。
 (《再访皮村(报告文学)》)
 (彼自身もまた、農村から出てきたので、教育が人生にとって重要であることを知っている。)
- c.因此他每次上课，走进教室时总要夹着一大摞书。(《我的老师沈从文》)
 (そのため、彼は授業のたび、教室に入るときに、いつも積み重なった本を挟んで入ってくるのだった。)
- d.我们从学校走到我们要坐车的站一般都要走 20 分钟以上。(《新闻热线》)
 (学校から、私たちが乗る駅までふつうは徒歩 20 分以上かかる。)
- e.这一年已经是我第七次自己坐火车了，我每次都是 11 点 50 上车 7 点多下车。(《微博》)
 (今年で、一人で列車に乗るのはもう七回目だ。毎回私は 11 時 50 分に乗って、7 時すぎに降りる。)
- f.朱可夫站起来揽过孩子，把面包掰开分给了她们。(《百家讲坛-朱可夫》)
 (ジューコフは立ち上がり子供を抱き寄せ、パンをちぎって、子供たちに分け与えた。)
- g.当时都不知道我是怎么走回家的。(《艾滋病：“歧视是一堵墙”》)。
 (その時は自分がどうやって家に帰ったのかさえ覚えていなかった。)

以上、中国語における地の類型を概観した。

3.2 移動事象の認知的側面—ベース・プロファイルから—

続いて、認知言語学の観点から、動詞に包入される意味役割について述べる。本研究は、付随要素に包入される各種意味役割の動機づけを、ベース・プロファイルに定め、以下に記述していく。

3.2.1 ベース・プロファイル

前章 2.1.1 節で述べたベース・プロファイルの重要性は、次の 2 点に集約される。

- (25) a. プロファイルとは、焦点化であり、ベースとは、プロファイルを行うための背景的要素である。
- b. ベース・プロファイルは、概念を得られるだけでなく、文法範疇を概念的に名付ける上でも有効であるとされている。

3.2.2 プロファイルによる概念獲得

2.1.1 節では、ベース (wheel) を基に、プロファイルする範囲や位置によって、hub, spoke, rim といった異なる概念を獲得することを述べた。このように、プロファイルする領域を操作することによって、概念を獲得する事例を他にもいくつか見てみる。次例と図を参照されたい。

- (26) a. 地面を掘る。(表面)
- b. 土を掘る。(中身)
- c. 穴を掘る。(結果) (山梨正明 (1999 : 41))

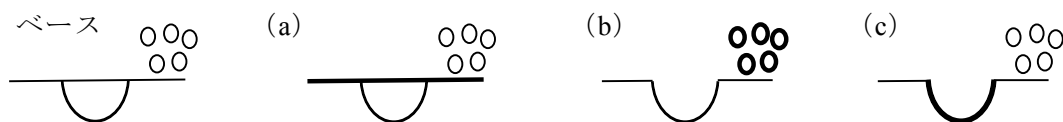


図.4 動詞「掘る」(山梨正明 (1999 : 41)) を改変)

日本語の動詞「掘る」は、図.4 (ベース) をベースにし、プロファイルする領域を操作することによって、目的語の性質に多様性を持たせている。

移動事象に関わるベースをプロファイルする領域を操作することによって概念を獲得する認知プロセスは、ラネカーによって指摘されている。彼は、移動動詞 *come*, *arrive* を例に、両者の違いを、プロファイルする領域の違いから説明している

(cf.Langacker (2008 : 69))。次の図を参照されたい。



図.5 come と arrive (Langacker (2008 : 69) を改変)

come と arrive は、移動物がスタートからゴールまでの経路上のすべての地点を時間軸に沿って連続的に占有するという関係性を喚起している。両者の意味上の違いは、移動全体をプロファイルしているのに対し、arrive は移動物が最後に着点へたどり着いたという、移動の一部を表している点にある (山梨正明監訳 (2011 : 89))。

続いて中国語の例を見てみる。中国語では、“抱” (抱く) “举” (挙げる) “背” (背負う) といった、身体への付着を表す動詞は、次例のように二義的に用いることが可能である。次例を参照されたい。

- (27) a. “我们家孩子的病是其他孩子传染的，打完针我就把孩子抱到人多的地方去，让其他孩子也跟着我们一块儿打针！”。

（《我家孩子病了，别传染你们》）

（私たちの子供は、他の子どもから伝染したので、注射が終わったら、すぐに子供を多くの人がいる場所に抱きかかえていき、一緒に注射をするよう呼びかけたいと思います。）

- b. 把孩子抱在怀中，一是让他感觉你的肌肤之亲，二是方便语言交流。

（《童车不是好东西》）

（子供を胸に抱くのは、スキンシップを感じさせ、言葉のやりとりがしやすいようにするためである。）

(27a) の“抱”は、対象を抱いた状態を移動の着点まで維持する様態を表し、(27b) は、“抱”という動作によって対象を自分の胸元に移動させる使役移動を表している。この二義性もまた、プロファイルによって説明が可能である。つまり、(27a) は子供が胸に抱かれた、いわば動作の終了状態がプロファイルされており、(27b) は、子供が胸に抱かれるまでの一連の流れがプロファイルされている。

このように、プロファイルする領域を操作することによって、概念はより多様に獲得されている。そして、移動表現における付随要素の多様性もまた、このプロファイ

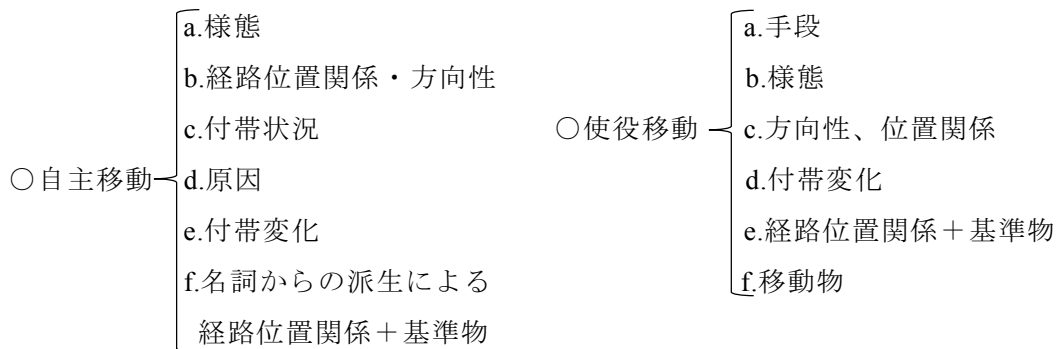
ルに依るのである。このことを、田中・松本（1997）における付随要素の分類に基づき、次節で述べる。

3.2.3 田中・松本（1997）における付随要素の分類

具体的な分析に移る前に、田中・松本（1997）における英語と日本語の付随要素を概観する。

3.2.3.1 英語の分類

田中・松本（1997）では、英語の移動表現に包入される意味要素を、次のように分類している。例と共に参照されたい。なお、田中・松本（1997）に例文が載せられていない場合、該当する動詞だけ記す。



【自主移動】

- (28) a. **amble** (ゆっくりと歩く) **bowl** (すいすいと進む) **clamber** (よじ登る)
 (田中・松本 (1997 : 131))
- b. John **passed** the building.
 (ジョンはそのビルの近くを通りすぎた。) (田中・松本 (1997 : 134))
- c. She **wore** sunglasses to the party.
 (彼女はパーティにサングラスをして行った。) (田中・松本 (1997 : 137))
- d. The napkin **blew** off the table.
 (ナプキンがテーブルから吹き飛んだ。) (田中・松本 (1997 : 138))
- e. Mud has **stuck** to my shoes.
 (泥が靴にくっついた。) (田中・松本 (1997 : 138))
- f. John **deplaned** from Boeing 747.
 (ジョンはボーイング 747 から降りた。) (田中・松本 (1997 :))

【使役移動】

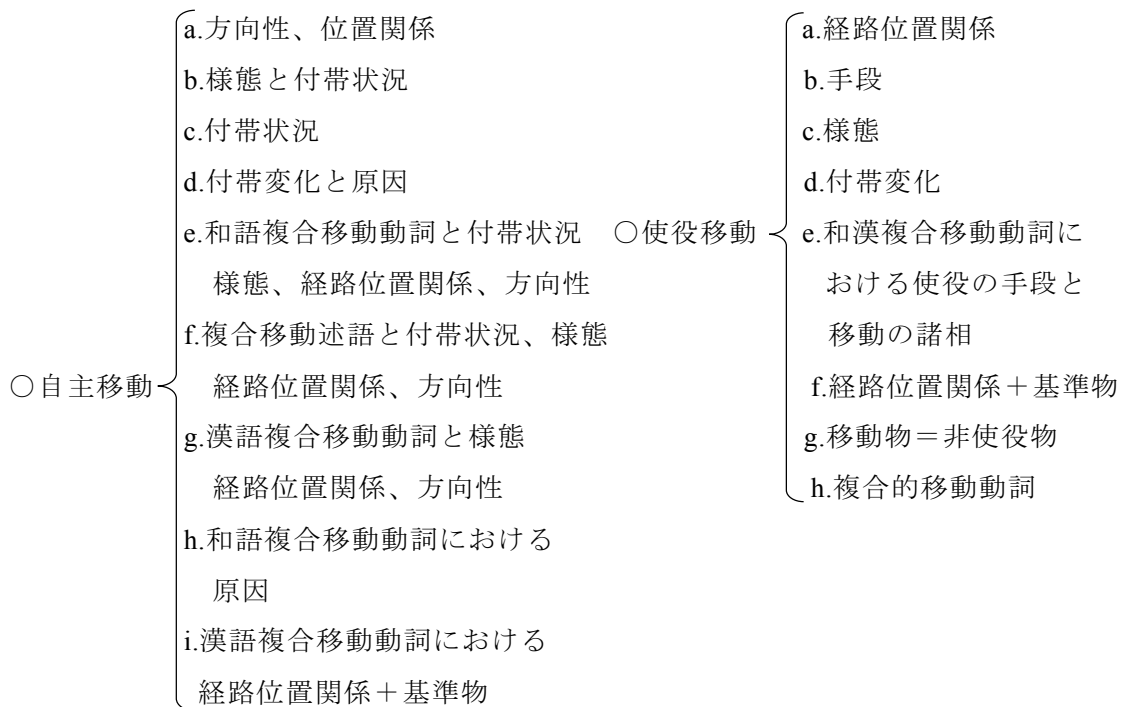
- (29) a. Bill **threw** a ball up into the sky.
 (ビルはボールを空高く投げ上げた。) (田中・松本 (1997 : 154))

- b. They **floated** the raft down the river.
 (彼らはそのいかだを浮かべて川を下らせた。)
 (田中・松本 (1997 : 158))
- c. John **dropped** the book onto the floor.
 (ジョンはその本を床に落とした。)(田中・松本 (1997 : 159))
- d. They **detached** the freight car from the train.
 (その列車から貨車を引き離した。)(田中・松本 (1997 : 161))
- e. **bank** (銀行に預ける) **bed** (ベッドに寝かす) **beach** (浜に乗り上げる)
 (田中・松本 (1997 : 165))
- f. **asphalt** (アスファルトで舗装する) **bait** (餌をつける)
 (田中・松本 (1997 : 167))

手段には、モノを移動させる「物理的移動」、社会的な行為を表す「社会的使役」、使役行為者が移動物共に移動し、移動に伴って使役を継続して行うことを表す「継続使役」、人間の移動を引き起こす「ヒトへの使役」に細分化されているが、ここでは割愛し、詳細は3.2.4.2節で述べる (cf.田中・松本 (1997 : 155-157))。

3.2.3.2 日本語の分類

田中・松本 (1997) では、日本語の移動表現に包入される意味要素を、次のように分類している。例と共に参照されたい。



【自主移動】

- (30) a.彼は {意気揚々と/車で/歩いて} 山の頂上まで登った。
(田中・松本 (1997 : 141))
- b.彼女は終着駅まで本を読んだ。(田中・松本 (1997 : 143))
- c.その釘は手で簡単に(壁に)刺さった。(田中・松本 (1997 : 144))
- d.駆け上がる 這い上がる 舞い上がる (田中・松本 (1997 : 145))
- e.彼は思いっきり学校に走って行った。(田中・松本 (1997 : 147))
- f.歩行する 潜行する 飛行する (田中・松本 (1997 : 148))
- g.崩れ落ちる 焼け落ちる 絡み付く (田中・松本 (1997 : 149))
- h.離陸する 離党する 退団する (田中・松本 (1997 : 151))
- i.その大火事の日、その家の台所付近から出火したらしい。
(田中・松本 (1997 : 152))

【使役移動】

- (31) a.彼はボールを空高く蹴り上げた。(田中・松本 (1997 : 169))
- b.太郎はボールを次郎に投げた。(田中・松本 (1997 : 171))
- c.飛ばす 転ばす 浮かす (田中・松本 (1997 : 172))
- d.壁を折り紙で飾った。(田中・松本 (1997 : 172))
- e.打ち上げる 蹴り上げる 投げ上げる (田中・松本 (1997 : 172))
- f.納棺する 投獄する 入棺する (田中・松本 (1997 : 176))
- g.どこの家庭にも、必要な量の水を給水する。(田中・松本 (1997 : 176))
- h.太郎はその本を学校へ持って行った。(田中・松本 (1997 : 178))

3.2.4 付随要素の多様性

移動には、必ず経路が生起し、経路とは、移動の開始地点から終了地点まで位動物が通る地点の全てをむすんだものである。したがって、経路には起点、通過点(通過部分)、着点が生起する(cf.田中・松本(1997:128))。このことから、移動のベースは、概略的に次のように図示することができる。

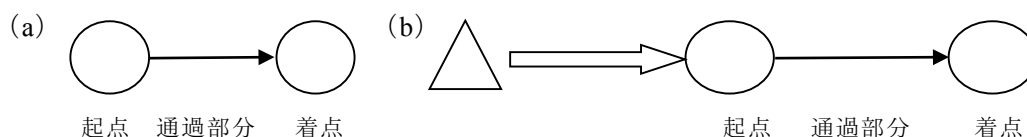


図.6 移動ベース

上記図.6 (a) は自主移動 (self-motion)、(b) は使役移動 (caused-motion) である

5. 図.6 (b) の左方にある太矢印は、人為的な作用を指す。

そして、本研究は、このベースを移動の背景的要素とし、「全体」「起点」「通過部分」「着点」をプロファイルすることにより、各付随要素が獲得されると主張する。その全体像を、次のように図式化する。

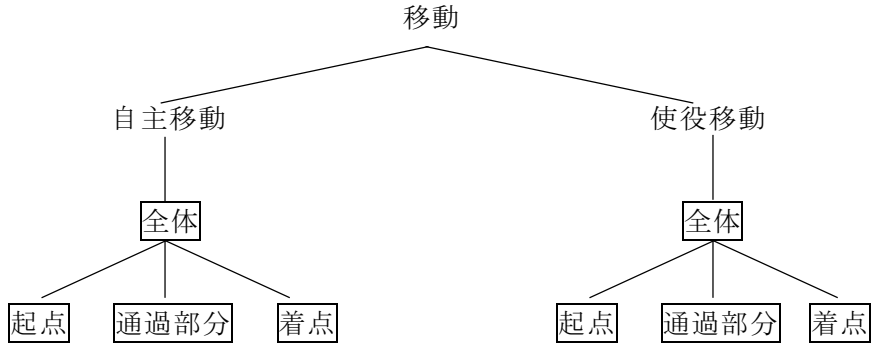


図.7 プロファイルによる移動表現における付随要素の意味役割①

3.2.4.1 全体プロファイル

3.1.1 節の (8) でも触れたように、移動の概念内容は、次の①～④に分類され、それらを概略的に次のように図示する。

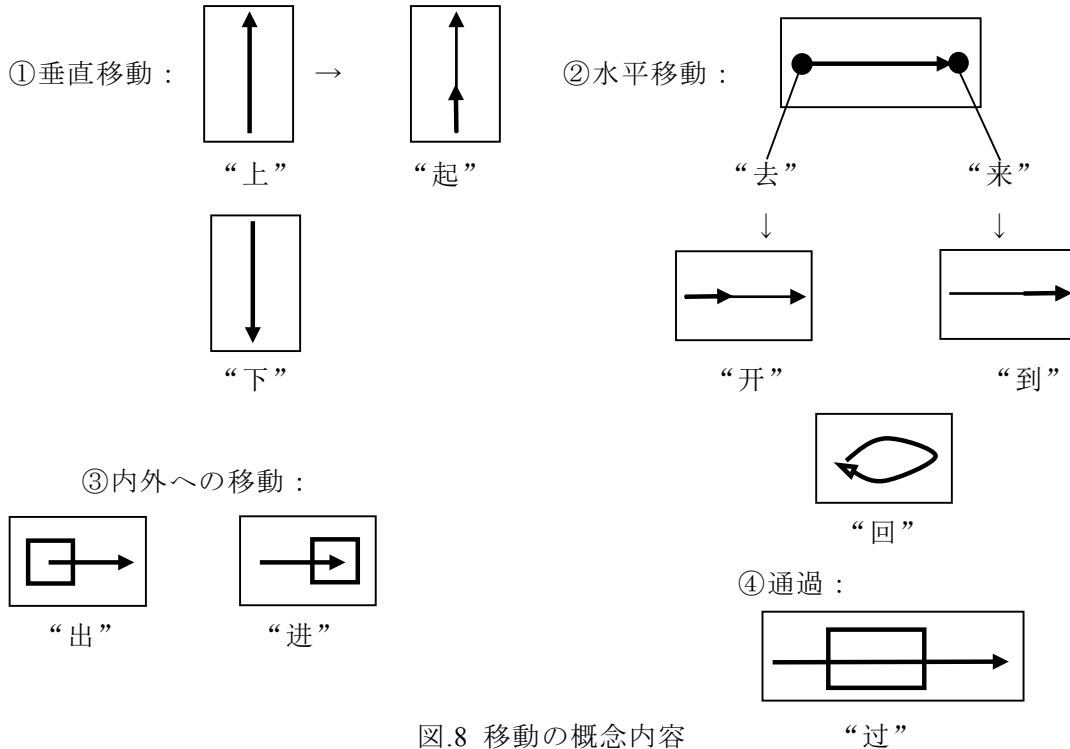


図.8 移動の概念内容

⁵ Leslie (1988) では、幼年期から、子供はひとりでに動かす物体と、押される等、力を加えられることによって動かされる物体との区別に敏感であることが報告されている (cf.児玉・野澤 (2009 : 34))。

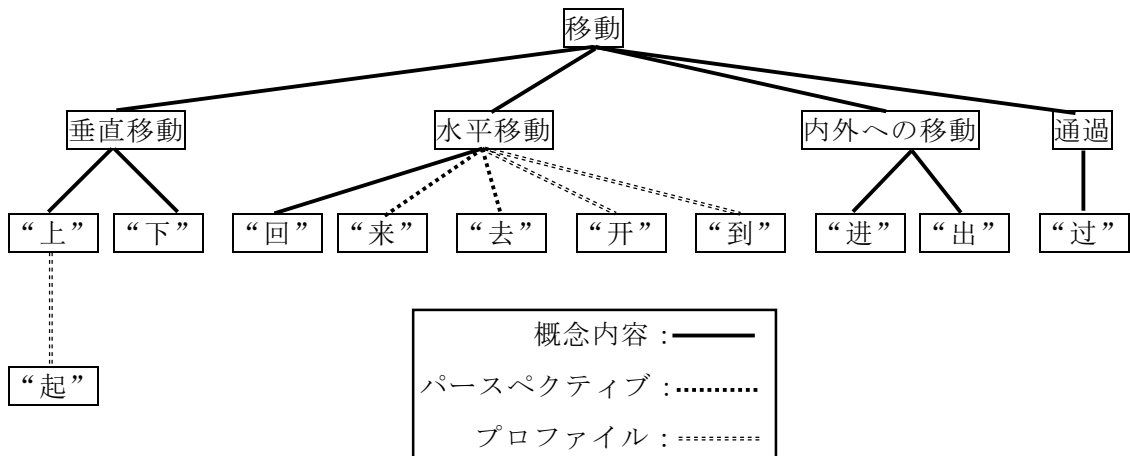


図.9 移動の概念内容一覧

図.9 は、移動の概念内容を簡潔に示したものである。移動は、まず概念内容によって「垂直移動」「水平移動」「内外への移動」「通過」に分類される。垂直移動は、更に上に向かう移動と下に向かう移動にわかれ、それぞれ“上”“下”によって記号化される。“起”は、“上”の開始部分をプロフィールすることによって、記号化される。次に、水平移動は元の場所に戻る“回”と、そうでないものに大別される。後者は、パースペクティブとプロフィールの違いによって、それぞれ“来”“去”“开”“到”と記号化される。内外への移動は、その経路の違いによって“进”と“出”にわかれ、通過は“过”で記号化される。移動経路全体をプロフィールすることによって得られる経路・方向性を表す動詞は、補語になれる動詞と補語になれない動詞に二分される。次の分類と例を参照されたい。

- 経路・方向性 {
- 補語：“上”（上がる）“下”（下がる）“进”（入る）“出”（出る）
 - “回”（戻る）“过”（過ぎる）“起”（離れる）“开”（離れる）
 - “到”（着く）“来”（来る）“去”（行く）
 - 非補語：“沉”（沈む）“穿”（通る）“登”（上る）“掉”（落ちる）
 - “降”（落ちる）“离”（離れる）“倒”（倒れる）

(32) a.刚下到第三层。（《汉语动词用法词典》p.407）

（さっき三階まで下がった。）

b.我们到了哈尔滨立刻就进行采访。（《汉语动词用法词典》p.90）

（ハルピンに着いたら直ちにインタビューをします。）

(33) a.海湾里沉了一条船。（《汉语动词用法词典》p.47）

(海湾に船が一艘沈んだ。)

b.小学生乱穿马路，很不安全。

(小学生が無秩序に大通りを横切って，とても危険だ。)

(『白水社 中国語辞典』)

また、経路・方向性を表す動詞には“掉”(落ちる・落とす)“穿”(通る・通す)“沉”(沈む・沈める)といった、自他を兼用する動詞がある。

(34) a.把石头沉在水里。

(石を水中に沈める。)(『白水社 中国語辞典』)

b.船沉了下去。

(船は沈んで行った。)(『白水社 中国語辞典』)

(35) a.把土豆条在面筋中间穿过去，再套一下。(《菜谱大全》)

(じゃがいもを細長くきったものをグルテンの間に通し、再びかぶせる。)

b.咱们从操场穿过去吧。

(運動場を通り抜けて行こう。)(『白水社 中国語辞典』)

3.2.4.2 起点プロフィール

起点プロフィールは、次のように図式化可能である。

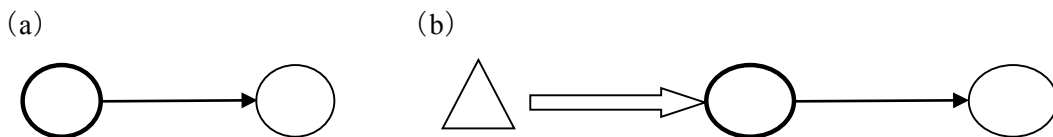


図.10 起点プロフィール

起点プロフィールによって包入される動詞の意味役割は、次のように細分化可能である。まず、自主移動における意味役割と例をあげる。

自主移動 {
・原因：“吹”(吹く)“跌”(つまづく)“刮”(吹く)“卷”(巻く)“摔”(転ぶ)“绊”(ひっかかる)“摇”(揺れる)
・付帯変化(自然):“断”(切れる)“褪”(抜ける)

「原因」とは、主体の移動が生起する非意図的な外的要因が動詞に包入されていることを指す。

(36) a.遇难者的衣服都被吹走了。(《财经视界》)

(遭難者の服は、全て吹き飛ばされてしまった)

b.车子怎么会开到撞断电线杆,还摔进田里? (《中国新闻》)

(車の運転がどうやって電柱が折れるまで突っ込み、さらに田んぼに転がり落ちることがあろうか。)

次に、付帯変化とは、主体の移動が生起することにより、移動物が場所に付着したり、離脱したりすることが動詞に包入されていることを指す。起点プロファイルの場合は、移動物が離脱することを表す。

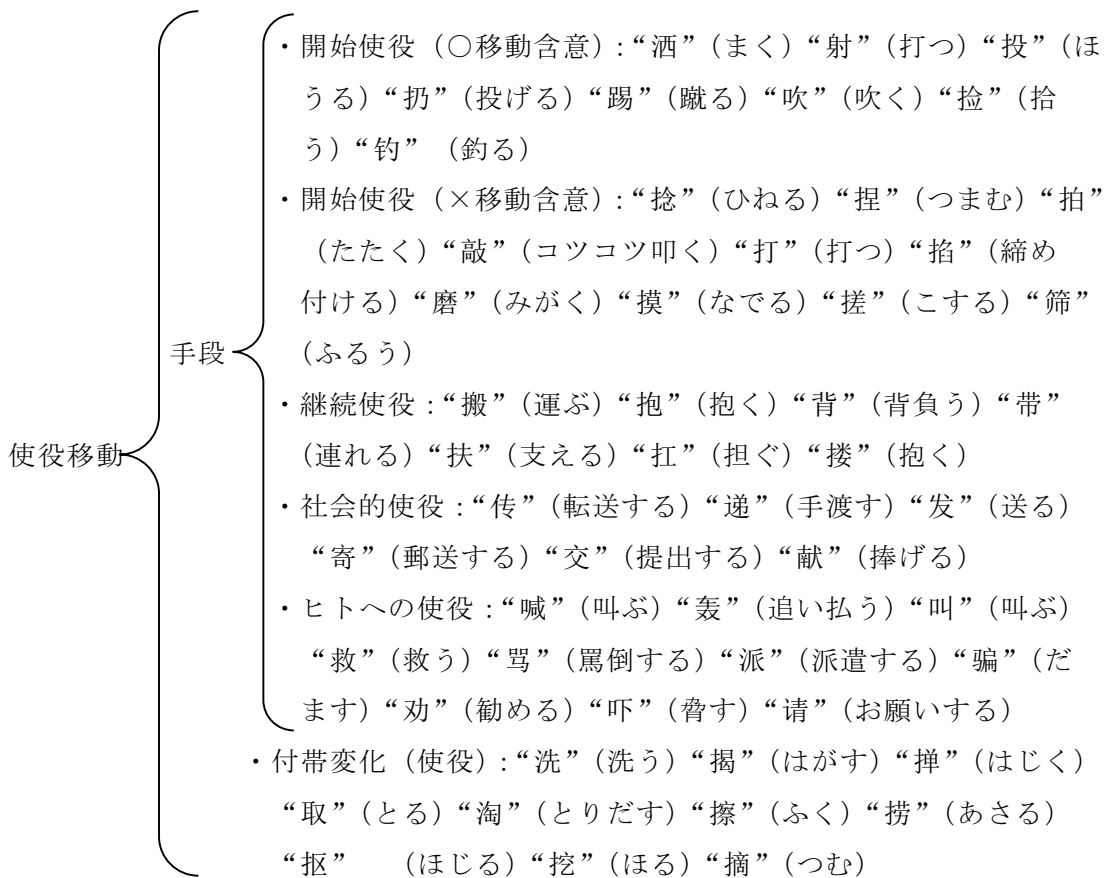
(37) a.苹果从树上掉下来了。(リンゴが木から落ちてきた。)

(白水社《中国語辞典》)

b.鸡身上的毛全褪下去了。(鶏の体の毛はすっかり抜け落ちた。)

(白水社《中国語辞典》)

次に、使役移動における動詞と例を挙げる。



「手段」は、「開始使役」「継続使役」「社会的使役」「ヒトへの使役」に分類される

(cf.田中・松本(1997:154-158))。「開始使役」とは、モノのみの移動が動詞に包入され、「開始使役」には、移動を含意しない動詞もまた用いられる。次例を参照されたい。

【+移動含意】

- (38) a.他用脚将剪刀从门缝踢出门外。(《夺命高校》)
(彼は足でハサミを扉の隙間から門の外へと蹴りだした。)
- b.别去踩绿地，拿着夹子一下，绕着走，把垃圾捡起来。(《城市零距离》)
(芝生を踏んではいけません、トングで取って、ぐるっと回って、ごみを拾いなさい。)

【-移動含意】

- (39) a.事发后工作人员摆起铁马围蔽现场，然后将玻璃逐块敲下来，才能更换新玻璃。(《今日报道》)
(事故が起きた後、従業員は鉄柵で現場を取り囲み、そのあとガラスを一枚ずつ叩き落して初めて、新しいガラスに取り換えることができる。)
- b.“是妈咪太粗心，洗脸时将面皂搓眼里。”(《藏心男子》)
(ママがいい加減だったの。顔を洗うときに、顔用せっけんを目に入れちゃって。)

続いて、継続使役とは、モノとヒトが共に移動することを表す。

- (40) a.刚刚从飞机搬下来的救灾物资经过简单的交接以后，没有太多的停留就被搬上了开往灾区的货车。(《朝闻天下》)
(飛行機から降ろされたばかりの救援物資の引き渡しの手続きを簡単に済ませたあと、あまり長くは止まらず、被災地へ向かう貨物車に乗せられた。)
- b.难道你让你的士兵游泳把你的大炮背过去吗?
(《美公布新军事战略 空海一体盯防中国?》)
(まさか、お前は自分の兵士にバズーカ砲を背負って泳がせたんですか?)

社会的使役とは、社会的な営みによって、モノを移動させることを表す。

- (41) a.我们记者就帮您拍几张照片发过去，好让孩子也放心呀。(《眩晕的日子》)

(私たち記者が写真を何枚か撮って送り、子供たちもしっかりと安心させてあげましょう。)

b.我在 1946 年前写的作品，几乎全都是沈先生寄出去的。

(《我的老师沈从文》)

(私が 1946 年までに書いた作品のほとんどが、沈先生が郵送にだしてくれたんです。)

ヒトへの使役とは、ある動作によってヒトの移動を誘発させることを表す次例を参照されたい。

(42) a.我那时想当众人面儿把她骂出去，可又一想，人家是来告诉我离婚的，我凭什么还骂人家，没这权利了。(《比如女人》)

(私は、その時公衆の面前で彼女を怒鳴り、出ていかそうとした。しかし、相手が私に離婚を告げにきたので、何様のつもりで相手を叱るのだと、この権利はなくなってしまった。)

b.眼看着周围那些同样被骗进来的人由于不堪折磨，意志力越来越薄弱，甚至有一些人选择了主动服从，(《第一现场》)

(周りに同じように騙されて入った人たちが、苦痛に耐え切れず、意志がますます弱り、自ら服従を選ぶ人も出てくるのを見て・・・)

付帯変化は、ある具体的な空間から対象を取り出すことを表す。

(43) a.油锅里会剩下五斤油，刘洪安就会将上层的两斤油舀出来，留着自用。

(《新闻和报纸摘要》)

(油鍋の中の残りが 5 斤になると、劉洪安は必ず上にある油を 2 斤掬い出して、自分用に残しておいた。)

b.把大刀从身后拔出来的时候，都要唱着这首歌奋勇杀敌。

(《用作品纪念抗战胜利 70 周年》)

(大刀を背中から抜き出すときは、いつもこの歌を歌いながら勇気を振るわせ、敵を殺すのだ。)

3.2.4.3 通過部プロフィール

通過部プロフィールによって、様態が包入される。

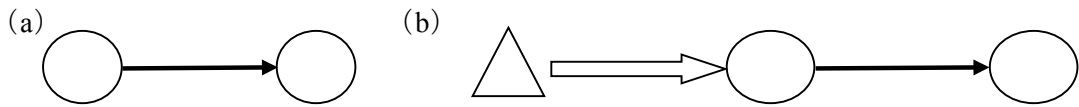


図.11 通過部プロフィール

自主移動の様態は、主体の意志によって生じる意志的なものと、非意志的なものに分けられる。

{	様態	{	自主	意志：“奔”（駆ける）“蹦”（跳ねる）“冲”（突き進む）“闯” （突進する）“飞”（飛ぶ）“赶”（急ぐ）“趴”（這う） “游”（泳ぐ）“转”（回る）“追”（追う）
			非意志：“流”（流れる）“飘”（ひらひら舞う）“冒”（吹きだす） “偏”（傾く）“塌”（倒れる）“长”（伸びる）	
		使役	：“拧”（ひねる）“扭”（ねじる）“滚”（転がす）“划”（こぐ） “开”（運転する）	

【自主・意志】

(44) a. 刘小杰又跳入湖中，奋力向他们游过去。

（《青春与热血的壮美交响—12•14 英雄群体事迹追记》）

（劉小傑も湖に飛び込み、彼らに向かって力を振るわせ泳いで行った。）

b. 然后那个医生就跑下来跟我先生说，你太太要生了，你赶快回去拿小孩衣服。（《追她追到内蒙古：黄世英和张怀霞》）

（その後、あの医者は駆け下りてきて、私の夫に「奥さん生まれそうですよ、急いで子供の服をとりに行ってください」と言った。）

【自主・非意志】

(45) a. 电风扇在运行中若发现耗电量大或外壳温度高、异常响声、烧焦气味、冒出黑烟……（《科技文献》）

（もし扇風機が稼働中に、電池が大量に消耗、或いはカバーの温度が高い、異常音、焦げた匂い、黒い煙が出てくるのを目にしたら……）

b. 这时我看见他的背影，我的泪很快地流下来了。（《背影》）

（このとき、私は彼の後ろ姿を見かけ、涙がすぐ流れでた。）

【使役】

(46) a. 把螺丝拧进来。（《汉语动词用法词典》 p.262）

（ネジをひねり入れる。）

- b. 把肉都卷进去。(《汉语动词用法词典》p.213)
 (肉も巻き入れる。)

3.4.3.1 節でも触れたが、様態を表す動詞にもまた、“伸”(伸ばす・伸びる)“转”(回る・回す)と自他兼用の動詞がいくつかある⁶。次例を参照されたい。

- (47) a. 你伸出手来!
 (手を伸ばしなさい!)(『白水社 中国語辞典』)
 b. 树枝从墙头伸到墙外来了。
 (木の枝が塀の上から塀の外まで伸びている。)(『白水社 中国語辞典』)
- (48) a. 汽车回正以后要平稳地把方向盘转到原来的位置。(《行车遇险如何应对》)
 (車のタイヤが真っすぐになったら、ゆっくりとハンドルを元の位置まで回す。)
 b. 他围我转了一圈儿。
 (彼は私の周りをぐるっと回った。)(『白水社 中国語辞典』)

なお、移動の様態は、副詞によって表現することも可能である。次例を参照されたい。

- (49) a. 因为要慢慢地走，去欣赏路边的风景，他们都预感这可能是父亲最后一次走这条路了。(《放弃治疗，然后活着!》)
 (ゆっくりと歩いて、道の両側の風景を楽しむ必要があった。彼らは、この道を父が二度も歩かないと予感したからだ。)
 b. 有一次，爸爸很晚喝得醉醺醺地回来，那天我一个人在家，爸爸摔倒在门口。(《我和人家不一样》)
 (一度、父は夜遅くべろんべろんに酔っぱらって帰ってきた。その日私は一人で家において、父は玄関に倒れた。)

3.2.4.4 着点プロフィール

着点プロフィールによって、「付帯変化」「結果」「目的」が包入される。

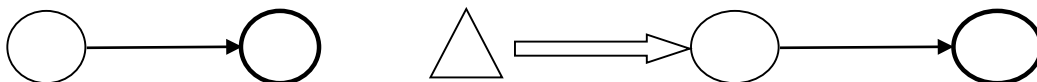


図.12 着点プロフィール

⁶ 中国語の自他動詞は、申亜敏(2009)に詳しい。

包入される意味役割は、次のように細分化される。

- 着点
- ・付帯変化（自然）：“纏”（絡みつく）“混”（混ざる）“黏”（“粘”）（くっつく）“着”（触れる）
 - ・付帯変化（使役）：“包”（包む）“夹”（挟む）“种”（植える）“塞”（詰め込む）“贴”（貼る）“放”（置く）“缝”（縫う）“盖”（かぶせる）
 - ・結果：“蹲”（しゃがむ）“跪”（ひざまずく）“排”（並ぶ）“躺”（横になる）“站”（立つ）“坐”（座る）
 - ・目的：“拌”（まぜる）“炒”（いためる）“換”（(水などで) 混ぜる）

付帯変化（自然）とは、移動が生起することにより、移動物が場所に付着することを指す。

【付帯変化（自然）】

(50) a. 两张纸粘在一起了。

(2枚の紙が1にくっついた。) (『白水社 中国語辞典』)

b. 永合垅是血吸虫病的重疫区，垅内的水井全淹了，雨水、泥水、污水混在一起，连续半个月没有干净水洗脸刷牙。(《人民日报》)

(永合垅は、住血吸虫病の重度感染区域であり、永合垅の井戸が水害にあつて水没、雨水、泥水、汚水が混ざり、半月も顔を洗い歯を磨くきれいな水がなかった。)

【付帯変化（使役）】

(51) a. 她把围巾给他包在头上。

(彼女はスカーフを彼の頭に巻いてあげた。) (『白水社 中国語辞典』)

b. 把信封粘上了。

(封筒(を貼りつけた→)の封をした。) (『白水社 中国語辞典』)

結果状態とは、移動の着点で維持される動作が包入されていることを指す。

(52) a. 先坐下来再买票

(先に席を取ってから切符を買う。) (『白水社 中国語辞典』)

b. 他胖了，蹲不下去了。

(彼は太っていて、じっとしゃがんでられない。)

(『白水社 中国語辞典』)

目的とは、ある動作を実現するために、移動を引き起こすことを指す。これには、調理方法を表す動詞の例も多くみられることが、丸尾誠（2014b：46）で指摘されている。次例を参照されたい。

- (53) a.把肉**炒**进去。《《汉语动词用法词典》p.45》
（ひき肉を入れて炒める）（丸尾誠（2014b：46））
b.把水泥和沙子**拌**在一起。
（セメントと砂を一緒に攪拌する。）（『白水社 中国語辞典』）

3.2.4.5 道具プロファイル

移動を生起させる場合、道具を用いることが頻繁にある。道具プロファイルとは、道具をプロファイルし、その結果、道具を表す名詞が動詞に包入される認知プロセスを指す。よって、次の図.13は、図.6で示したベースとは若干異なる。

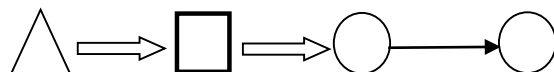


図.13 道具プロファイル

道具：“铲”（スコップ・シャベルですくい取る）“锄”（くわでたがやす）“锉”（やすりでとぐ）“锯”（のこぎりで引く）“铡”（押し切りでくさを切る）

- (54) a.功夫不大，牛尾巴**锯**下来了，他揣起牛尾巴，转身又奔了围墙。
（《郭德纲说话》）
（あまり時間をかけずに、牛の尻尾をのこぎりで切り落とすと、彼はそれをかかえて、反対を向き囲いの壁まで走り出した。）
b.来来来，把特制的披萨**铲**出来，记住，要小心啊，这是特制的，和那个爱心披萨是不一样的啊……。《《赖声川 一妇五夫》》
（さあさあ、特製のピザをだしますよ。気をつけてね、これは特製ですからね。あのハートのピザとは違いますからね。）

3.2.4.6 変化物プロファイル

上記道具プロファイルの他にも、ベースが図.6と異なるものがある。変化は、対象に働きかけて、対象そのものを変化させ、その一部を移動させることを表す。

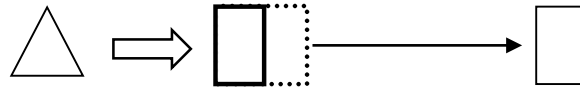


図.14 変化物プロフィール

変化：“掰”（二つ変化に割る）“裁”（裁断する）“拆”（折る）“扯”（ちぎる）“刮”（削る）“剪”（切る）“砍”（たたき切る）“撕”（やぶく）“劈”（断ち切る）

- (55) a.而美国设计师新研发出来的这款自行车，脚蹬就可以当做防盗车锁。将脚蹬**拆**下来，扣在车轮上，再在尾部上锁（《脚蹬车锁》）
 （アメリカのデザイナーが開発したこの自転車は、ペダルが防犯用のカギとなる。ペダルをとりはずし、前のタイヤにはめ、さらに後ろのペダルのタイヤにカギをかける。）
- b.后来我解剖，把它肚皮**剪**开看一看，好多蛇里面都有水。（《江西蛇王》）
 （その後私が解剖し、蛇の腹を切り開いてみると、多くの蛇の腹の中に水があった。）

本節の分析を、次にまとめる。

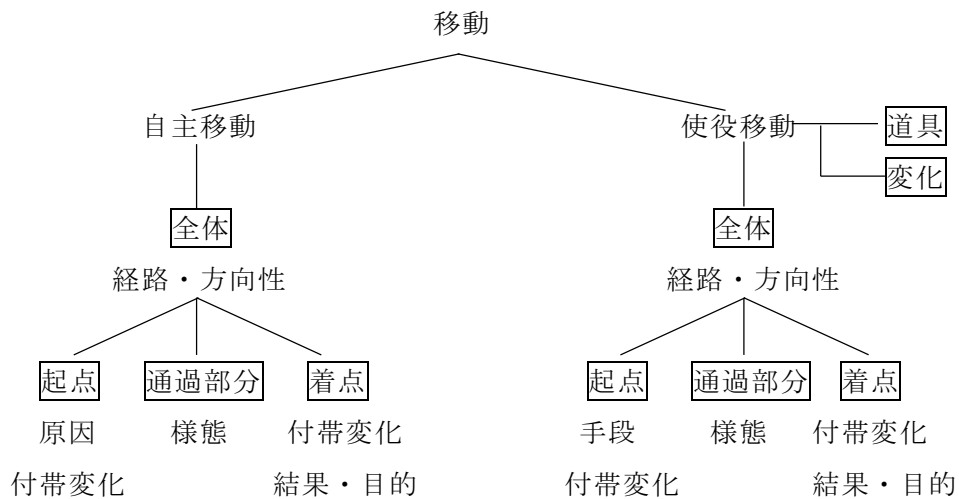


図.15 プロファイルによる移動表現における付随要素の意味役割②

3.3 おわりに

本章の要点を次のようにまとめ、本章のおわりにかえる。

- (56) a.言語類型論の観点から見ると、中国語は、衛星枠づけ言語、乃至は同等枠づけ言語に分類される。
- b.中国語における経路・方向性は、動詞、方向補語、また「介詞+場所」フレーズによっても表される。
- c.動詞に包入される多様な意味役割はベース・プロファイルから説明が可能である。

ただし、(56) cについては、さらなる考察が必要である。それは、動詞に包入される意味役割の全てがベース・プロファイルで説明できるわけではないからである。例えば、起点と原因の関係はメタファーである (cf.山梨正明 (2009 : 106-109))。これらについては、別稿で論じることにする。

第4章 存在事象について

4. はじめに

前章では、主に移動表現の中心である動詞に包入される付随要素を、ベース・プロファイルから分析した。本章における分析でもベース・プロファイルが重要な役割をなす。本章は、現代中国語の静態存在文、動態存在文、出現文、消失文といった、LP+VP+NPの形式で表される「存現文」(呂叔湘主編(1999);宋玉柱(2010)など)という文法範疇を、認知言語学の枠組み(Langacker(1987a, 1999, 2008, 2009); Taylor(2002); テイラー・瀬戸(2008))から分析する。先行研究では、存現文の定義と、その体系(分類)は、言語事実からの帰納的な内省判断に基づくものであった。そこで本研究は、理論的な観点から、存現文を概念レベルから説明する。具体的には、「なぜ存現文という文法範疇が存在するのか」、「なぜ存現文には体系が存在するのか」という2点について説明する。

論の進め方として、4.1節で先行研究における存現文の定義と体系、本研究の着眼点を述べ、4.2節では参照点構造から存現文を定義づけ、4.3節では、ベース・プロファイルから存現文を定義づけ、同じくベース・プロファイル、パースペクティブから存現文を体系づけ、4.4節で全体のまとめを述べる。

4.1 存現文の基本事項—先行研究から—

本節では、存現文の基本事項として、存現文の定義と体系を先行研究から概観する。

4.1.1 存現文の定義

まず、存現文の定義を先行研究から、アトランダムに3つ引用する。次の(1)を参照されたい。

- (1) a.表示事物存在、出現或消失的句式。(张志公等(1979:142))

((存現文は)事物が存在、出現、消失することを表すフレーズである。)

- b.句首有表示处所的词语,全句表示什么地方存在、出現或消失了什么事物的句子叫存現句。(黄伯荣等(1983:391))

(文の最初には場所を表す語がきて、文全体では、ある場所に何かが存在、出現、消失する文を存現文という。)

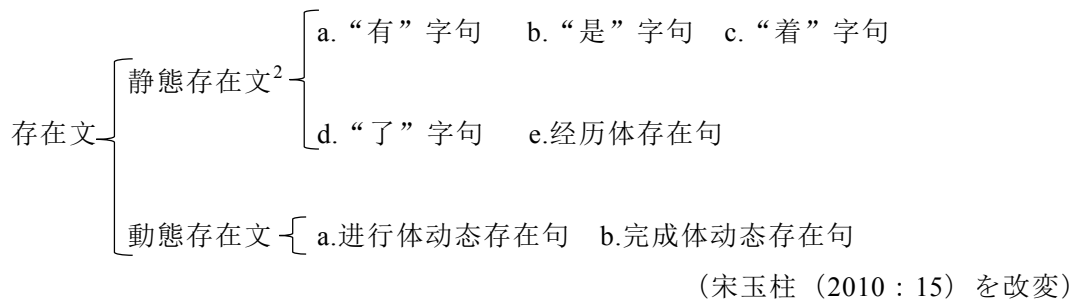
- c.其典型的共同核心句式意义是:表达某处所存在某事物。

(张贤亮・范晓(2010:13))

((存現文の) 典型的な共通の核心的な意味は、ある場所にある事物が存在することを表す文である。)

4.1.2 存現文の体系¹

次に、存現文の体系(分類)を先行研究からいくつか挙げる。存現文は、存在を表す存在文と、出現と消失を表す隠現文に大別される。宋玉柱(2010:15)は、存在文を次のように分類している。例(1)と共に参照されたい。



- (2) a. 门口有一个人。(入口に誰かいる。)
 b. 窗前是个花园。(窓の前は花園だ。)
 c. 墙上贴着一张画。(壁に絵が貼ってある。)
 d. 船上点了一盏灯。(船に明かりがともっている)
 e. 窗子上贴过几张剪纸。(窓に何枚かの切り絵が貼られていた。)
- (3) a. 天上飞着一只鸟。(空に鳥が飛んでいる。)
 b. 门前挖了一道沟。(門の前に溝が掘ってある。)

(以上、宋玉柱(2010:15)を一部改変³)

続いて、隠現文は、出現文と消失文に分類される。次例を参照されたい。

- (4) a. 教室里、宿舍里、图书馆里，跑出许多人来。(宋玉柱(2010:80-81))
 (教室、寮、図書館から人がたくさん走ってでてきた。)
 b. 昨天我到河北岸去过，发现那儿来了许多外乡人。(宋玉柱(2010:81))
 (昨日私は川の北側まで行った。そこには多くのよその土地の人が来ていた。)
- (5) 他家死了一头牛，一家人非常难过。(宋玉柱(2010:82))

¹ 先行研究における存現文の類型のまとめは、張賢亮、范晓等(2010)に詳しい。

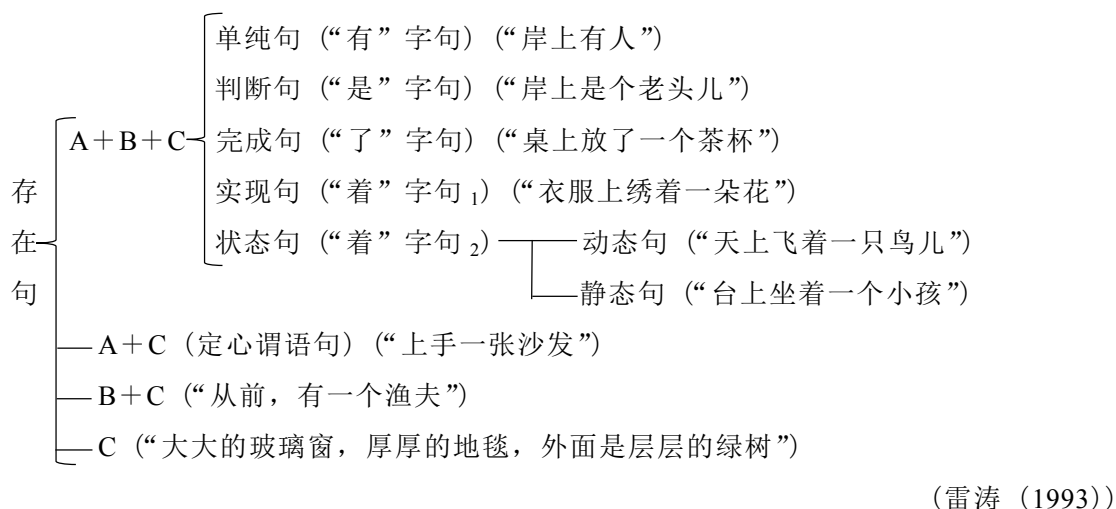
² 静態存在文は、他にも述語を用いない“定心谓语句”(例：山下一片好风光)“名词谓语句”(例：满地垃圾)があるが、本研究では考察対象外とする。

³ 括弧内の日本語訳は拙訳。

(彼の家では牛が一頭死んで、一家全員がひどく悲しんだ。)

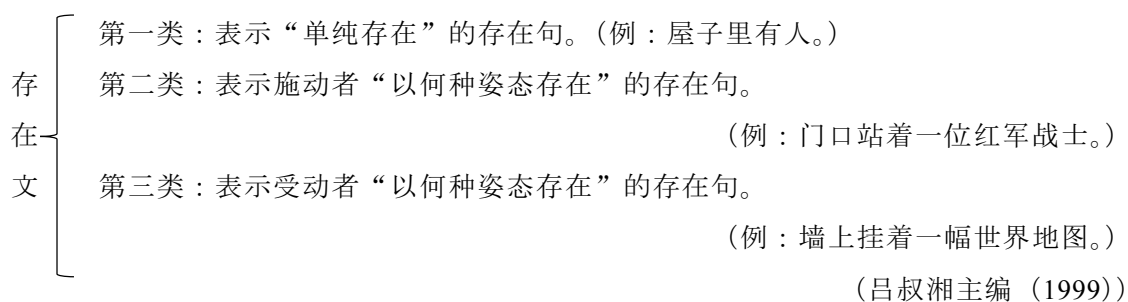
(4) は出現文、(5) は消失文である。出現する場所は、(4a)「どこから」という起点的な場所だけでなく、(4b)「どこに」という着点的な場所もまた表すことができる。このことについては、4.3.2 節で詳述する。

この他にも先行研究における存現文の体系をいくつか簡潔に紹介しておく。雷涛(1993)は、次のような体系を挙げている。



雷涛(1999)は、存在文を「A+B+C式」「A+C式」「B+C式」「C式」に分類し、それらを更に下位分類している。

他にも、吕叔湘主编(1999)における分類も挙げておく。



以上、先行研究における存現文の体系を概観した。

4.1.3 本研究の着眼点

本研究が、記述に徹せず、概念レベルから説明を行うのは、「妥当な一般化(=最適な一般化)」の定義の不明瞭さにある。記述的一般化(describe generalization)とは、

事前調査によって網羅的に列挙された外延に対応する内包の言明をうまく見つけることである（黒田航（2011：1））。そして、「妥当な一般化（＝最適な一般化）」の定義は、言語学の教科書には書いていない約束事の一つである（cf.黒田航（2011：1））。

言語学における認知的プログラムは、体系性、規則性に囚われすぎた研究プログラムを補う形で世に広まりつつある（黒田航（2003：90））。よって、本研究もこれまでの先行研究を補う形で、分析を行う。

4.2 存現文の定義①—参照点構造から—

続いて本節では、参照点構造から、存現文の文法的特徴を認知言語学から分析し、存現文を概念レベルから定義づける。具体的には、次の2点である。

(6) a.存現文は、なぜ「場所→モノ」の語順をとるのか。

b.存現文の形式：LP+VP+NPのNPには、なぜ不特定（indefinite）のモノしか入れられないのか。

4.2.1 存現文の語順

まず、(6a)を分析する。“‘有’字句”（上記2a）が発話される話者の事象認知について、相原ほか（1996）；大島吉郎（2013）が、興味深い点を指摘している。次の(7-8)を、続けて参照されたい。

(7) a.桌子上有什么东西吗？（机の上には何かがありますか。）

—桌子上没有什么东西。（机の上には何もありません。）

—桌子上有书。（机の上には本があります。）

b.“有”を用いた質問文では、聞く人は机の上に物があるかどうか知らず、ましてや何があるかも知りません。答えは、机の上に物があるかないかをいってもよいですし、何があるかを答えてもよいのです。

（相原ほか（1996：88-89））

(8) a.桌子上有一本书。（机の上に本が一冊ある。）

b.話者：初めて目にする状況であり、発見、気付の表現→目の前に机がある→机の上には何かある→数は一つである→それは本の形状をしており、本と認識される→それがどのような内容かは知らない。

（大島吉郎（2013：17-18））

(7) (8)の指摘から、話者（概念者）は「場所→モノ」の順に認識しており、それが“‘有’字句”の語順に反映されていると理解することが可能である。2.1.2節で述

べたように、事象を捉えるために心的経路を辿る認知能力は、認知心理学では心的走査と呼ばれている。つまり、存現文が「場所→モノ」の語順をとるのは、「場所→モノ」の順で心的走査が行われ、その心的走査の順が語順に反映されているため、と説明が可能である。

4.2.2 存現文の文法的制約

次に、(6b) を分析する。存現文の形式：LP+VP+NP の NP のスロットには、特定 (definite) のモノを入れることができないことが知られている (宋玉柱 (2010 : 11)⁴)。次例を参照されたい。

(9) a. 前面大树底下站着几个人。

(前の大木の下に数人が立っている。) (李臨定 (1993 : 330))

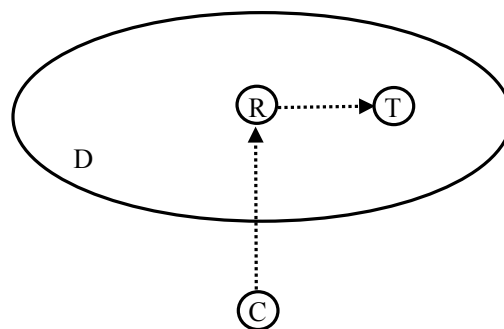
b.*前面大树底下站着她。(前の大木の下に彼女が立っています。)

(10) a. 床上躺着一个病人。

(ベッドに患者が寝ている) (李臨定 (1993 : 330))

b.*床上躺着他。(ベッドに彼が寝ている。)

(9b) (10b) が非文である理由は、前節で述べた心的走査と認知的際立ちの関わり、すなわち、2.1.2 節で述べた参照点構造から説明が可能である。2.1.2 節で挙げた参照点構造を、次に再掲する。



C = conceptualizer (概念化者) D = dominion (領域) R = reference point (参照点)

T = target (対象)▶ = metanl path (心的経路)

図.1 参照点構造 (Langacker (1999 : 174) を改変)

⁴ 宋玉柱は、“NP 都有一种不确指性，特别是用了数量词组的句子，这种不确指性更明显。” (NP には、一種の不特定性がある。特に、助数詞と組み合わせると、その傾向はよりはっきりと読み取れる。) と述べている。

参照点を介して対象にアクセスするのは、対象の認知的際立ちが低く、直接アクセスすることが困難なためである。よって、“他/她”のような特定のモノは、場所を介して間接的にアクセスする必要はなく、(9b) (10b) は非文となる。

存在文は LP を省略することが不可能であることが指摘されている (cf. 宋玉柱 (2010 : 6))。これは、不特定のモノに直接アクセスすることが困難であることに起因する⁵。次例を参照されたい。

- (11) a. 门口坐着两个老太太。(門には老婆が二人座っている。)
 b.*坐着两个老太太。(宋玉柱 (2010 : 6))
- (12) a. 院子外边有两颗枣树。(庭の外には棗の木が二本ある⁶。)
 b.*有两颗枣树。(宋玉柱 (2010 : 6))

以上の考察から、参照点構造から説明可能である存現文の定義を次にまとめる。

- (13) 存現文とは：領域を介し、領域と関連する不特定のモノを提示するために言語 に表象した、文法範疇の一つである⁷。

ここで、領域という用語について説明しておく。Langacker (2009) によると、領域とは、「存在領域」と「限定領域」に分類される。次の図を参照されたい。

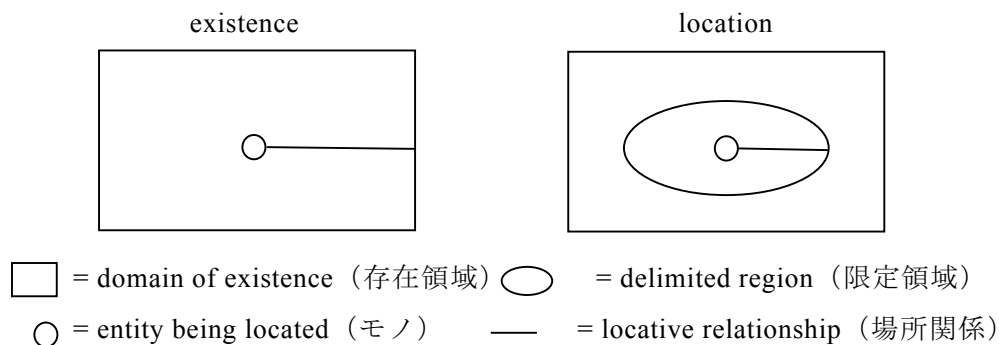


図.2 Existence と Location (Langacker (2009 : 99) を改変⁸)

⁵ 他にも、関連する事例として、「数量詞+名詞」フレーズが主語の位置に置けないことが挙げられる。例 a) 有一个人站在沙漠里。(誰かが砂漠にいる) 例 b) *一个人在沙漠中。「数量詞+名詞」フレーズが主語の位置に置けないのは、「数量詞+名詞」が不特定性を表しているためである、と説明が可能となる。また、存現文には、ハダカ名詞も NP のスロットに入れられるが、言語環境の支えが必要である。このことについて、刘月华等 (2001) は、次の例を挙げている。例 1) 桌子上摆着酒、饼干、白糖、酱油等等。(2001 : 724) 例 2) 他进屋一看，桌子上摆着菜，却不见一人 (2001 : 724)。

⁶ 括弧内の日本語訳は拙訳。

⁷ 存現文に類似したカテゴリーに、There be 構文が挙げられる。谷口一美 (2004 : 75) は、There be 構文を、未知のもの「提示・導入」と分析している。

⁸ 括弧内の日本語訳は拙訳。

限定領域とは、「教室」や「椅子の上」といった、有界性 (bounded) のある空間であり、存在領域とは非有界性 (unbounded) の空間である。これは、2.1.1 節でも述べた基本領域でもある⁹。

以上、存現文を参照点構造から考察した。

4.3 存現文の定義②と体系付け—ベース・プロファイルから—

続いて本節では、存現文をベース・プロファイルから定義づけ、更に存現文を、上位カテゴリーと下位カテゴリーにわけ、存現文の体系を、概念レベルから説明する。上位カテゴリーはベース・プロファイル、下位カテゴリーは同じくベース・プロファイル、またパースペクティブから分類する。

4.3.1 上位カテゴリー

2.1.1 では、ベース・プロファイルは、文法範疇を概念的に特徴づける上でも有効であることを述べた。続いて本節では、ベース・プロファイルは、存現文の体系や定義づけにも有効であることを述べる。まず、ベース・プロファイルから説明可能な、存現文の定義を次に挙げる。

(14) 存現文とは：領域とモノの関係を、時間と共にプロファイルし、概念化した文法範疇である。

(14) を、静態存在文を例に考察してみる。次例と図.8 を参照されたい。

(15) a. 东院有一个养鱼池。(宋玉柱 (2010 : 17)

(東院に養魚池がある。)

b. 墙上写着两个字。(宋玉柱 (2010 : 26)

(壁に文字が二文字書いてある¹⁰。)

⁹ 例えば、“下雨”“刮风”“出太阳”といった自然現象を表す存現文には、一般に LP は現れない。これは、雨や風が非有界的な「空」を領域としているからだと思われる。

¹⁰ 括弧内の日本語訳は拙訳。

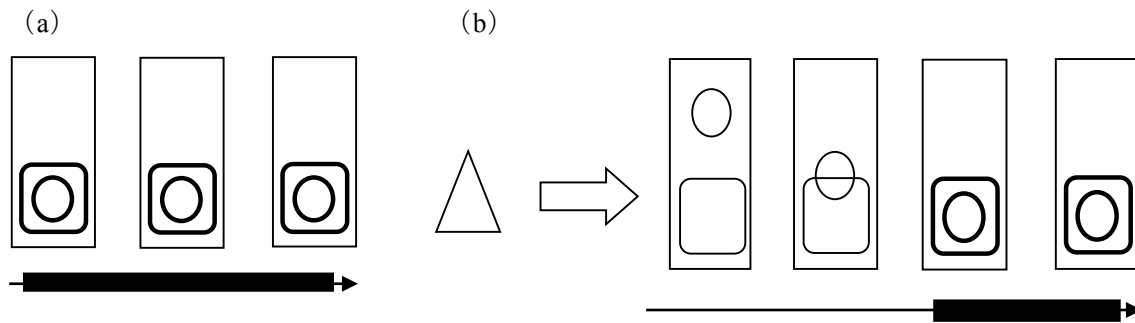


図.3 静態存在文

図.3 では、モノと領域の関係が、時間と共にプロファイルされていることが表されている。両者の関係は、時間が過ぎても変わらず、持続していることから、状態のプロセスを表しているといえる。このことからわかるように、プロセスは更に細分化可能であり、テイラー (Taylor, J. R) は、プロセスを次のように下位分類している (Taylor (2002 : 401))。

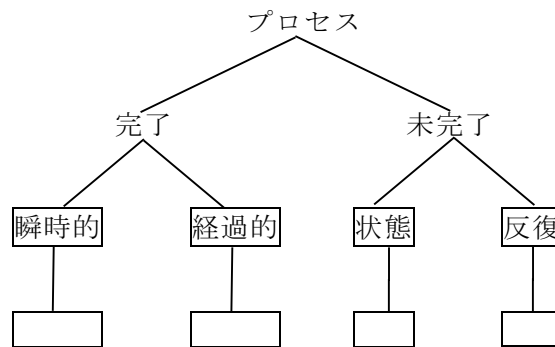


図.4 プロセスの下位分類 (Taylor (2002 : 401) を改変)

プロセスは、完了プロセスと未完了プロセスに分類され、前者は更に瞬時的と経過的、後者は状態と反復に細分化される。そして、この図.4 が、存現文の上位カテゴリーに当たる。すでに自明のことかもしれないが、静態存在文は、未完了一状態プロセスのロットに入る。

しかしながら、図.4 の 4 つのロットには、一つ存現文のカテゴリーに当てはまらないものがある。それは、完了一経過的プロセスである。完了一経過的プロセスには、「移動」が当てはまる。移動と存在は共に、モノと領域の関係が時間と共にプロファイルされる文法範疇であるが、移動は特定のモノの位置変化を表すため、(13) で示した、参照点構造からの存現文の定義から外れる。一方で、不特定のモノの位置変化は、「出現」を表す。このことを理解するために、影山太郎 (1996) における概念構造 (conceptual structure) を次に示す。影山太郎 (1996) では、(状態) 変化と出現の違いを、次のように示している。

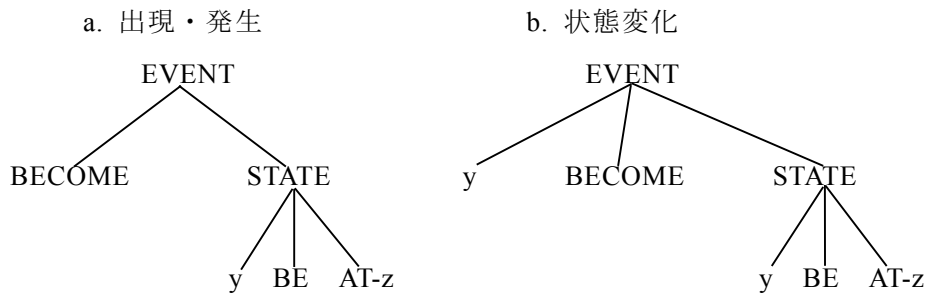


図.5 出現・発生と状態変化（影山太郎（1996：111）を改変）

出現・発生は、何らかの状態（y BE AT-z）が生じることを表し、それに反し、状態変化は次のように初期状態から結果状態への連鎖（chain）があるのが自然である（影山太郎（1996：111））。

(16) [EVENT y BECOME [STATE y BE AT-Z]] (影山太郎（1996：111）)

参照点構造では、最初に参照点、つまり領域が認識され、その次に対象、つまりモノが認識される。上記概念構造からもわかるように、状態変化は、モノの初期状態を認識しているため、参照点構造における心的走査「場所→モノ」の順から乖離する。傍証として、言語事実からも、存現文には動作の進行を表すマーカー“(正)在”が用いられないことも挙げておく。次例を参照されたい。

(17) a. 小路上走着几只活泼的麻雀。(宋玉柱（2010：49）)

(小道に元気なスズメが数匹歩いている。)

→*小路上正在走几只活泼的麻雀。

b. 草地上跑着一匹马。(宋玉柱（2010：50¹¹）)

(草原に馬が一頭走っている。)

→*草地上正在跑一匹马。

さて、完了プロセスと未完了プロセスの違いは、モノと領域の関係が「単純 (simple)」か「複雑 (complex)」かにも認められる。単純とは、事象が一つの構造に還元でき、複雑は、それが不可能であることを表す (cf.Langacker (2008：127))。ラネカーは、次の図から in と into を比較し、単純と複雑の違いを説明している。

¹¹ 括弧内の日本語訳は拙訳。

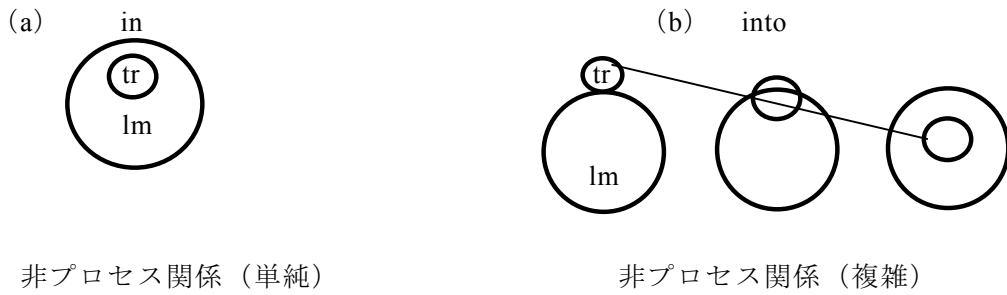


図. 6 (Langacker (2008 : 149) を改変)

(a) in は、どの状態であっても、tr が lm に収まる状態が維持されるが、into は段階ごとに異なる状態がプロファイルされる。モノと領域の単純な関係は、静態存在文の他にも、動態存在文があり、これが、上記図.4 の反復のスロットに当てはまる。次例を参照されたい。

(18) a.池里游着五只母鸭，十分悠然。(宋玉柱 (2010 : 51))

(池には親ガモが五羽、悠然と泳いでいる。)

b.大树底下走着一个人。(宋玉柱 (2010 : 49))

(大木の下を誰かが歩いている。)

動態存在文で組み合わさる動詞(“走”“飞”“跑”)は、“V着”により、非有界性、すなわち反復される運動が与えられる¹²。次の図を参照されたい。

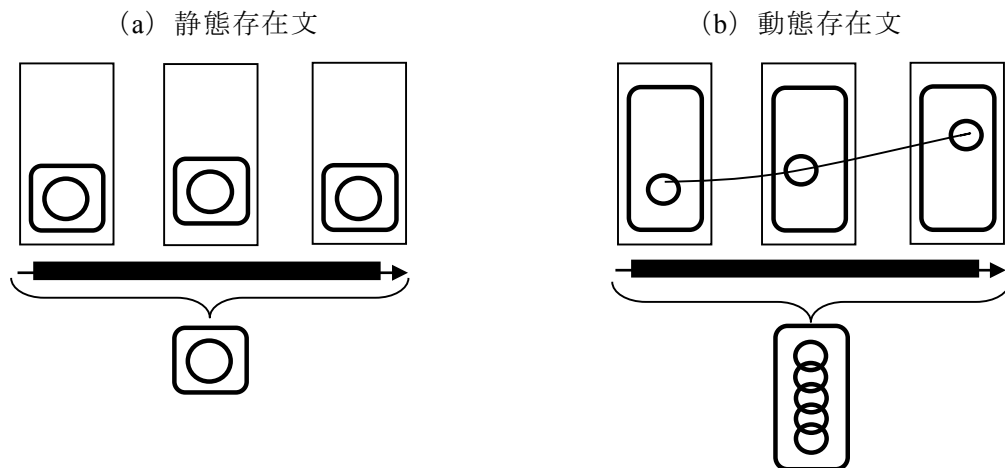


図. 7 静態存在文と動態存在文

¹² 動作の有界性と非有界性については、沈家煊 (1995) に詳しい。

図.7は、静態存在文と動態存在文を図式化し、比較したものである。モノは、領域内で動くことはあっても、領域内に収まる状態が維持される。この点から見ると、動作に限界性は与えられず、動態存在文におけるモノと場所の関係もまた単純であるといえる。

以上、存現文の上位カテゴリーについて述べた。図.4を基に、本節の内容を次にまとめる。

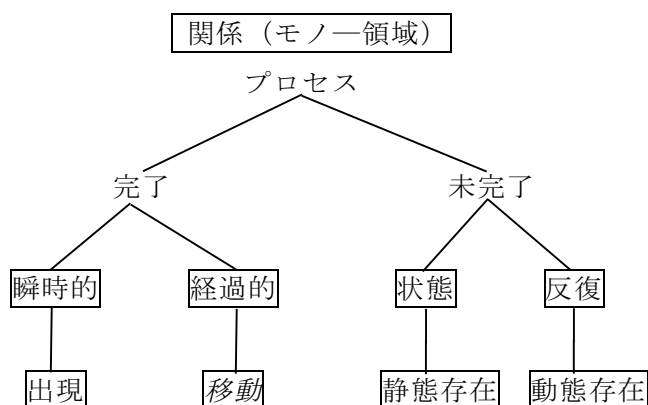


図.8 プロセスの下位分類 (Taylor (2002 : 401) を改変)

4.3.2 下位カテゴリー

次に、下位カテゴリーについて述べる。

4.3.2.1 プロファイル

プロファイルする領域を、起点領域から着点領域に移すことによって、上例 (3) のように、出現する場所を二義的に解釈することが可能になる。次の図と例を参照されたい。

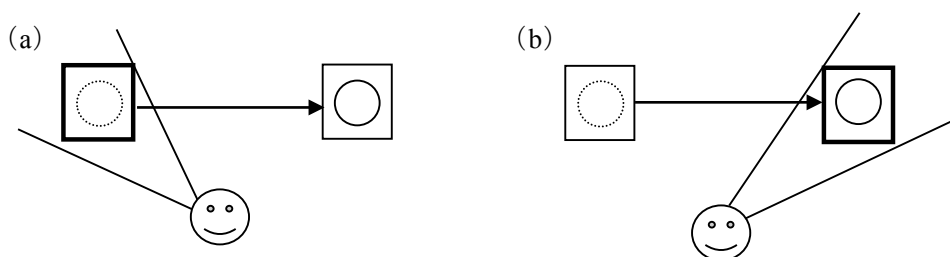


図.9 プロファイル

- (19) a. 山西、河南、内蒙蒙古 来了三个人。(宋玉柱 (2010 : 81))
 (山西、河南、内モンゴルから三人来た。)

- b. 他胸中猛地卷起一阵风暴。(宋玉柱 (2010 : 81¹³))
 (彼の胸の中に急に嵐が巻き起こった。)

4.3.2.2 パースペクティブ

消失文は、パースペクティブから説明が可能である。パースペクティブによる意味拡張の事例として、out の意味拡張が挙げられる。次例を参照されたい。

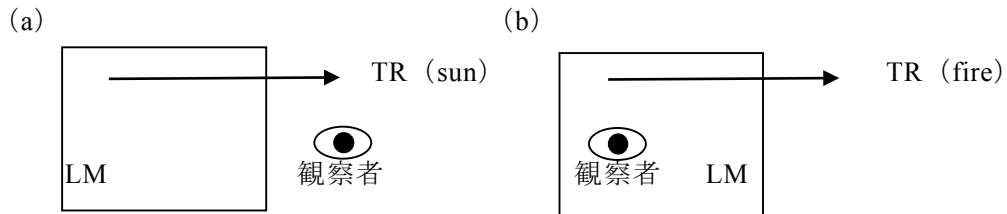


図.10 out の拡張義 (宮浦国江訳 (2006 : 41) を改変)

- (20) a. The sun came out. (太陽が出てきた。) .
 b. The fire went out. (火が消えた。) (宮浦国江訳 (2006 : 41))

(20a) は出現、(20b) は消失を表す。図.10 (a) における LM は感覚外であり、TR が移動によって知覚内に出現することを表している。図.10 (b) における LM は知覚内であり、知覚内にあった TR が知覚外に出ていくことを表している。このことを、次例から説明する。

- (21) a. 院子里搬走了三家，又搬进来两家。(宋玉柱 (2010 : 88))
 (四合院から、3 世帯去っていったが、2 世帯入ってきた。)
 b. 楼里搬走了两家。
 (棟から 2 軒引っ越していった。)(相原ほか (1996 : 166))

(21a) では、話者は、“三家”が“院子”に存在(所属)していたことを知っており、その上でモノが領域外に去ったことを述べている。(21b) も同様に、概念化者は、“两家”が“楼里”に存在(所属)していたことを知っており、その上でモノが領域外に去ったことを述べている。

以上、本節の内容を次のようにまとめる。

¹³ 括弧内の日本語訳は拙訳。

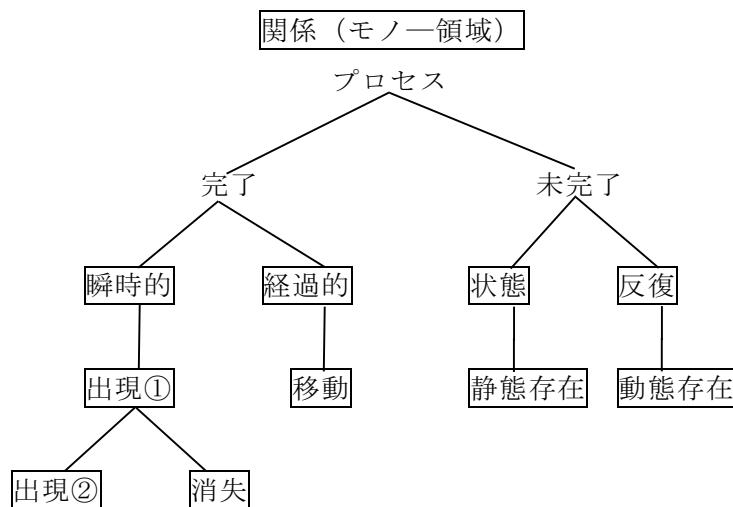


図.11 プロセスの下位分類

4.4 おわりに

本章では、従来までの言語事実に基づいた記述的一般化から内省的な存現文の定義と体系とは視点をずらし、認知言語学の観点から、両者を概念レベルから再分析した。要点を次にまとめる。

まず、存現文の定義は、参照点構造とベース・プロファイルから次のように定めることができる。

- (22) a.存現文とは：領域を介し、領域と関連する不特定のモノを提示するために言語に表象した文法範疇である。。
- b.存現文とは：領域とモノの関係を、時間と共にプロファイルした認知プロセスが言語に表象した文法範疇である。

次に、存現文の類型は、上位カテゴリーと下位カテゴリーに大別され、上位カテゴリーは、ベース・プロファイルにより、次のように分類される。

- (23) モノと領域の時間的關係（プロセス）が、完了一瞬時的にプロファイルされる場合は出現、未完了一状態にプロファイルされる場合は静態存在文、未完了一反復にプロファイルされる場合は動態存在文となる。

下位カテゴリー（出現文②、消失文）は、プロファイルとパースペクティブによって、次のように定義づけられる。

- (24) a.出現文②は、前景化する地点を、起点領域から着点領域に移すことによって獲得される。
- b.消失文は、概念化者の観察視点を起点領域内（知覚内）に移すことによって獲得される。

(田中・松本(1997))及び認知意味論(Johnson(1987))の観点から、次の2点を重点的に分析し、“進”フレーズを再考する。

- (4) a. 位置変化を表す“進”フレーズにおける動詞の分類。
- b. “進”フレーズにおける“進”の意味拡張の動機づけ。

論の進め方として、まず5.1節で“進”の統語的特徴を述べ、5.2節で刘月华主编(1998)を検討し、5.3節で“進”フレーズにおける動詞分類について述べ、5.4節で“進”の意味拡張を分析し、5.5節で全体のまとめを述べる。

5.1 “進”の統語的特徴について

まず本節では、“進”の統語的特徴について3点述べる。1点目は“進”と組み合わせる目的語、2点目は“進”の無標性、3点目はパラフレーズについてである。

5.1.1 “進”と組み合わせる目的語について

“進”に組み合わせる目的語には、次のように制約が見られる。

- (5) a. **主体**：礼堂里又进了**一批人**。(吕叔湘主编(1999:308))
(讲堂にまた多くの人が入っていった。)
(牛島・菱沼監訳(2003:206))
- b. **場所**：有个人从外面跑进**车间**来。(吕叔湘主编(1999:310))
(人が外から仕事場へ駆け込んできた。)
(牛島・菱沼監訳(2003:208))
- (6) a. **受事**：这家商店前几天进了**一批货**。
(この商店では数日前に品物を仕入れた。)(『白水社 中国語辞典』)
- b. **受事**：*他进**那本书**了。(彼はその本を入れた。)
→放进
- c. **場所**：*把那本书进**包里**了。(その本をバッグの中に入れた。)
→放进

(6)のように“進”は、単独では使役移動義を表すことが不可能であり、“放”“插”“装”といった動詞を前置し、“進”フレーズ②で表す必要がある。

5.1.2 “進”の無標性について

また、“進”フレーズ②に包入される動詞に着点が含まれる場合、“進”は省略可能

となる。次例を参照されたい。

(7) a. 他们通过公园墙的一个缺口走进公园。(《比如女人》)

(*走公园)

(彼らは公園の塀のかけたところを通って公園に入った。)

b. 但她没有丝毫退缩，不动声色地把行李扛进了车间。(《1994 年报刊精选》)

(*扛了车间)

(しかし、彼女は微塵も臆せず、落ち着いてに荷物を仕事場に担ぎ込んだ。)

(8) a. 凤凰篝火晚会回来路上吊桥断了，好多人掉进水里……幸好我刚过桥十几秒，我在现场。(《湖南新闻》) (掉水里)

(鳳凰キャンプファイアの帰りに、吊り橋が切れ、多くの人が水に落ちた。幸運にも、私は十数秒前に橋を過ぎていて、現場にいた。)

b. 左手握着一把水稻苗，半弓着腰，照着旁边老乡的样子，尝试着把一株稻秧插进田里，旁边却有不少村民在围观。(《非洲小伙浙江当村官》)

(插田里)

(左手には苗が握られており、腰を曲げ、隣にいる地元の人のように苗を一本田んぼにいれようと図りますが、周りには多くの人間が見に来ている。)

“掉”や“插”は、動詞に経路・方向性、または着点が包入されているため、着点経路を表す“进”は余剰であり、省略可能であることが考えられる。

5.1.3 パラフレーズ

次に、移動物（モノ）と基準物（場所）の語順の関係から、“进”フレーズのパラフレーズについて述べる。次例を参照されたい。

【自主移動】

i. NP+V 进+LP

(9) a. 火车进站了。

(汽車が駅に入った。) (『白水社 中国語辞典』)

b. 一坐进车内，我抑制不住好奇心，就开门见山地发问。(《那里有颗夜明珠》)

(車の中に乗り込むなり、私は好奇心を抑えきれず、いきなり質問をした。)

【使役移動】

i. 把 NP+VP 进+LP

(10) a. 把这几本书也一块儿放进柜子吧。(吕叔湘主编 (1999 : 307))

(これらの本も一緒に戸棚に入れておきなさい。)

(牛島・菱沼監訳 (2003 : 207))

b. 看到火车车厢里安装有多个电插座，非常高兴，不料将充电器插头插进插座后，手机没有一点反应。《车厢插座成摆设 充电宝却卖高价(身边事)》

(列車の車内にコンセントがいくつも取り付けられたのを見て、大変うれしく感じた。しかし、充電器のプラグをコンセントに入れたあと、携帯電話に何も反応がなかったことは、思いもかけないことだった。)

上例 (9) (10) のように、“进” フレーズのパラフレーズは、自主移動、使役移動共に1種のみである。

以上、“进” の統語的特徴を検討した。

5.2 刘月华主编 (1998) 検討

本節では、刘月华主编 (1998) における“进” の分析を検討する。

5.2.1 刘月华主编 (1998) における分析

刘月华主编 (1998) は、“进” (“进来” “进去”) を、大きく“趋向意义” (趋向義) と“结果意义” (結果義) にわけ、それらに組み合わさる動詞を、次のように分類している。

① 趋向義：表示通过动作使人或物体由某处所的外部向内部移动。立足点可在外部，也可在内部 (cf. 刘月华主编 (1998 : 206))

(動作を通して、人、或いはモノが外部から内部へと移動する、また移動させることを表す。立脚点は、外部でも内部でもよい。)

a. ヒトやモノの動きを表す動詞

(11) a. 胡书记朝办公室主任一挥手，自己先钻进车内。

(刘月华主编 (1998 : 203))

(胡書記は、オフィス主任に手を振り、先に車に入った。)

b. 从高高的窗隙里透进了淡淡的青色的微光。(刘月华主编 (1998 : 203))

(高い高い窓の隙間から、淡い青色の光が差し込んできた。)

組み合わさる動詞：“走” (歩く) “跑” (走る) “跳” (跳ぶ) “躲” (隠れる) など

b. 体の動作を表す動詞

(12) a.他把脑袋缩进被窝里，翻上倒下，想了一夜。(刘月华主编 (1998 : 204))
(彼は、脳を布団の中にひっこめ、ごろごろと転がり、一晩考えた。)

b.他头伸进来了，身子还留在外面。(刘月华主编 (1998 : 209))
(彼は頭を伸ばしてきたが、体はまだ外にある)

組み合わせる動詞：“伸(手)”((手を)伸ばす)“探(頭)”((頭)を出す)“迈(脚)”((足を)踏み出す)など

c.モノの位置を変化させる行為動詞

(13) a.你把炉子搬进来，你一边做饭，我们一边谈好不好？
(刘月华主编 (1998 : 210))
(コンロを運び入れて、料理を作りながら一緒に話しましょう。)

b.他劲太小，那个箱子搬不进来。(刘月华主编 (1998 : 210))
(彼は力が小さすぎるのでは、あの箱を運び入れることができない。)

組み合わせる動詞：“端”(平らに持つ)“搬”(運ぶ)“插”(さす)“扔”(投げる)など

d.ヒトの位置を変化させる行為動詞

(14) a.冯老兰说：“你把他带进来”。(刘月华主编 (1998 : 210))
(馮老蘭は「彼を連れてきなさい」と言った。)

b.小毛开了门放他进来，又到洞里把李如珍、春喜都叫出来。
(刘月华主编 (1998 : 210))
(シャオマオは、門を開けて彼を中に入れた。)

組み合わせる動詞：“请”(請う)“叫”(叫ぶ)“喊”(怒鳴る)“推”(押す)など

e.比喻用法

(15) 比喻①：所有関係や占有関係が、外から内に変わることを表す。
(cf.刘月华主编 (1998 : 210))

a.买进来要卖不出去呢？(刘月华主编 (1998 : 211))
(買い入れてもし売り出せないなら?)

b.生猪收购价格调整以后，每市收进两百只上下。
(刘月华主编 (1998 : 205))

(豚の購入価格を調整したあと、どの町でも二百頭ほど仕入れた。)

組み合わせる動詞：“买”(買う)“收”(仕入れる)など

(16) 比喻②：動作に効果が見られる (cf.刘月华主编 (1998 : 215))。

a.看了半天也没看进去。(刘月华主编 (1998 : 215))
(しばらく読んでも、内容が頭に入っていない。)

b.这个人听不进别人的劝告，早晚要摔跤。(刘月华主编 (1998 : 205))
(この人は人のアドバイスに聞く耳を持たない。遅かれ早かれつまず

く。)

組み合わせる動詞：“说”（言う）“听”（聞く）“看”（見る）“读”（読む）など

②結果義：表示凹陷（陥没することを表す。）（cf.刘月华主编（1998：206））

(17) a.一脸愁眉苦脸的样子，眼睛深深地凹进去。（刘月华主编（1998：215））

（浮かない顔をして、目は深くくぼんでいた。）

b.他额头瘪进一块，很显眼。（刘月华主编（1998：215））

（彼のおでこは一部凹んでいて、とても目立っている。）

組み合わせる動詞：“凹”（凹む）“凹陷”（陥没する）“瘪”（へこむ・しぼむ）

上記（15）（16）の比喩は、具体的な移動を表さず、移動義にはあてはまらないため、本研究は、刘月华主编（1998）における分類を、「移動義」「比喩」「結果義」の3種とする。

5.2.2 刘月华主编（1998）検討

本研究は、“进”と関連して、刘月华主编（1998）における分析には、次の2点において不足が見られると判断する。

(18) a.動詞の意味役割についての記述

b.拡張義への動機づけ

まず、(18a)を検討する。次の引用を参照されたい。

(19) 比如“小李走进来了”，表示“小李”通过“走”而“进来”了，即“进来”在语义上指向“小李”，“进来”与“走”的关系是动作与结果的关系。

（刘月华主编（1998：2））

（例えば、“小李走进来了（李さんが歩いて入ってきた）”という文において、“小李”（李さん）は“走”（歩く）を通して“进来”（入ってくる）ことを表している。すなわち、“进来”とは語義上“小李”を指しており、“进来”と“走”は動作と結果の関係にあるといえる。）

刘月华主编（1998）は、方向補語に組み合わせる動詞を、その意味によって分類しているが、「動詞がどのような役割を担うのか」という動詞の意味役割の分析が不十分であった。このことに関連して、杉村博文（2012）では、動詞＋方向補語の関係を、「原因と結果」とし、次のように分析している。次例を参照されたい。

(20) a. 走 过 来
 V x y
 歩く 過ぎる 来る
 (歩いてやってくる)

- b. V : 動力として xy という空間移動を引き起こす「因」となる。
 x : 二つの対立空間（「内と外」「上と下」「むこうとこちら」等）を結ぶ移動（以下「有界転移」と呼ぶ）を表す、y と結合して V に対する「果」となる。
 y : 有界転移 x に話者の視点を賦与する。

(杉村博文 (2012 : 128))

(20) の指摘通り、動詞は「原因」の役割を成すといえる。では、この「原因」とは、具体的にどのように解釈すればいいのだろうか。次例と図.1 を参照されたい。

- (21) a. 他想的是怎么把球踢进对方球门。(《1994 年报刊精选》)
 (彼が考えていたのは、どのようにして相手ゴールにボールを入れることだった。)
 b. 新书到家，仔细地摆进书柜，跟自己说从明天开始每晚都要认真阅读。
 (《20 秒带来的效率 (调心小妙招)》)
 (新书が家に届き、細かく本棚に並べ、明日の晩からまじめに読まなくてはならないと自分に言い聞かせた。)

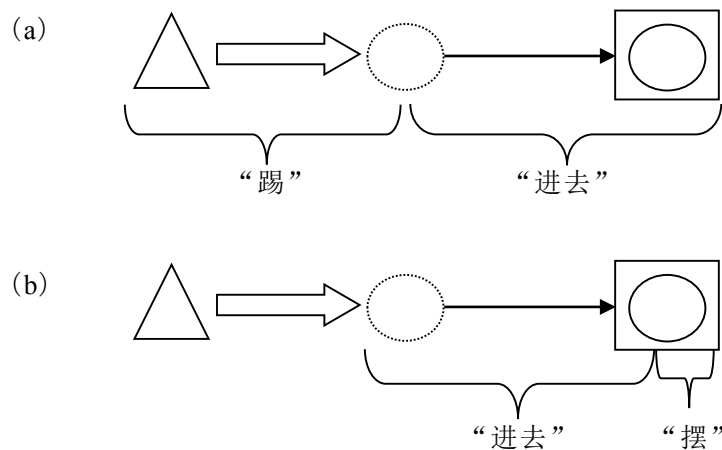


図.1 事象生起

3.1.2 節でも触れたが、(21a) は、“踢”によって移動が生起するため、“踢”は直接、移動を生起するための原因（手段）だと理解できるが、“摆”は移動後の着点で生起するの

で、(21a) (21b) を同列に原因と見做すことは困難である。“摆”のように、着点で生起する動作が動詞に包入される動機づけについては、2.1.3 節で述べた表現視点と、3.2.4.4 節で述べた着点プロファイルが関係していると思われる。第3章では着点プロファイルによって、(21a) のように結果・目的が包入されることを述べた。しかし、プロファイルのみの説明では、言語間の差異を説明することは困難である。それは、例えば中国語の動補構造は、日本語の「複合動詞」に訳しづらいことから明らかである。次例を参照されたい。

- (22) a. 坐上去 (*座り上がる)
 b. 躺上去 (*横になり上がる)
 c. 摆进来 (?並べ入れる)
 d. 插出来 (*插し出す)
 e. 晒出来 (*乾かし出す)

上例に見られる中国語の日本語との差異は、2.1.3 節における表現視点から説明が可能である。2.1.3 節で挙げた内容を簡潔にまとめると、Tai (1984) ; 影山太郎 (1996) によって提唱された、言語によって語彙的アスペクトに差異が生じるのは、事象構造に置かれる視点が言語によって異なることに起因するという仮説である。次の図を参照されたい。中国語は、視点が結果に置かれることから、中国語は「結果重視型」¹の言語であるといえる。

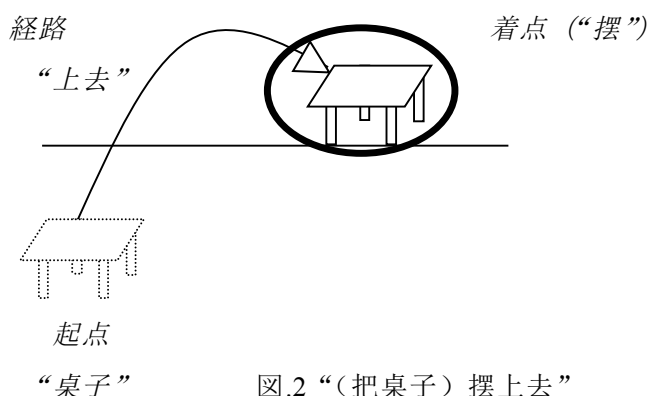


図.2 “(把桌子) 摆上去”

図.2 は、“(把桌子) 摆上去” を図式化したものである。概念化者は、まず着点で生起する動作行為、すなわち結果状態・目的に視点を置き、それによって経路が決定される。このように措定するならば、結果重視型の中国語は、日本語に比

¹ 用語は、申垂敏 (2005 : 231) より。

して (22) のような事例に生産的であることが説明可能である。そして、動詞が担う「原因」とは、次のように2通りに解釈することが可能となる。

- 原
因
- 原因①：動作行為が起こることにより、移動が生起する。
 - 原因②：動作行為を起こすために、移動が生起する。

よって、(21a) は原因①に、(22b) は原因②に当たる。

次に (18b) を述べる。理論に基づいて多義性を分析することは、“進” が、外から内への位置変化から、状態変化を表す拡張義を表す動機づけを明らかにし、より体系的に捉えることが可能となる。認知文法では、精緻化と拡張というカテゴリー化関係によって節点がリンクされるような構造を持つ、カテゴリー化のモデルを「ネットワーク・モデル」という (辻幸夫 (編) 2013 : 288)。ネットワーク・モデルを、本研究の内容に当てはめると、次のように図式化可能である。

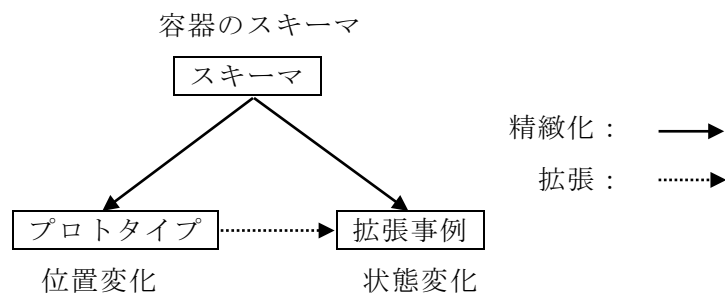


図.3 ネットワーク・モデル (Langacker (1990 : 271) を改変)

図.3 で示したネットワークモデルから、本研究は“進”の意味を、プロトタイプ的な意味である「位置変化」と、拡張事例である「状態変化」に分け、意味拡張の動機づけを明らかにする (ネットワークモデルは、次章で述べる“出”にも同様に当てはめる)。刘月华主编 (1998) と本研究の意味分類を次のように比較する。

刘月华主编 (1998) の分類

- 趋向义 (趋向義)
- 结果义 (結果義)
- 比喻 (比喻)

本研究の分類

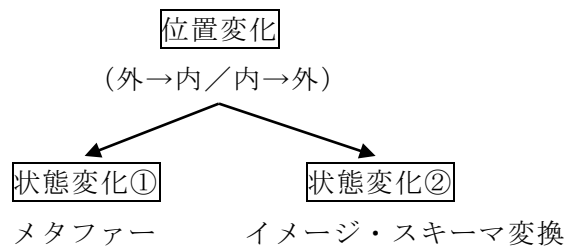


図.4 “進” / “出” の意味分類の比較

既述のように、理論によって意味を分析することにより、より体系的にまとめることができるだけでなく、言語事実をより幅広く検証することが可能となる。例えば、刘月华主编（1998）で挙げられていない“进”の拡張義として、次のような例があげられる。

- (23) a.他进过监狱。(彼は監獄に入ったことがある。)
 b.他去过监狱。(彼は監獄に行ったことがある。)(cf.邵敬敏 (2004 : 38²))

邵敬敏（2004）は、“进+处所宾语”“去+处所宾语”を次のように比較している。邵敬敏（2004）は、(23a)には、監獄に入るという意味があるが(23b)にはそれがないと指摘している。(23a)のように“进+处所宾语”が表す意味を、本研究は、「収監」と名付ける。詳しくは5.4.1.2節で分析する。

以上、本節では刘月华主编（1998）を批判的に検討した。

5.3 動詞分類再検討—包入から—

本節では、位置の変化、すなわち移動を表す“进”フレーズに包入される動詞の意味役割を検討する。

5.3.1 自主移動

①経路

外から内への位置変化は“进”によって表され、動詞としても補語としても用いられる。

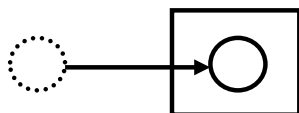


図.5 (外から内への) 経路

- (24) a.火车进站了。(汽車が駅に入った。)(『白水社 中国語辞典』)
 b.屋里进了不少水。(部屋に少なからぬ水が入った。)
 (『白水社 中国語辞典』)

² 括弧内の日本語訳は拙訳。

② 様態

様態とは、主体の移動が生起する内的要因が、移動が終わるまで持続することが動詞に包入されていることを指す。様態は、意志的な様態と非意志的な様態に分かれる。

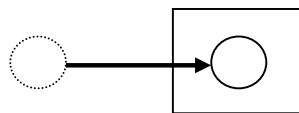


図.6 様態

【意志的】

- (25) a. 他再一次穿上救生衣，**冲进**两米多深的激流中。（《彰显民族的力量》）
（彼は再び救命胴衣を着て、2メートルあまりある深い激流へと飛び込んでいった。）
- b. 那天，淅淅沥沥地下着春雨，俺冒雨**跑进**车间。（《小雨珠》）
（その日、春雨がしとしとと降っていて、私は雨の中、工場の中へと駆け込んだ。）

【非意志的】

- (26) a. 走近海滩，看见工厂的废料大股大股地**流进**海里，把海水染成一种奇异的颜色。（《中国人,你为什么生气》）
（海辺に近づくと、工場の廃棄物がどんどんに海に流されていき、海水が奇妙な色に染まっていくのが見えた。）
- b. 事发在昨晚八点多，一辆吉普车撞倒一辆正在搭客的电动自行车，导致电动自行车上两名男子摔在路边的一辆小轿车的车头。其中一人随后**滚进**了草丛中。（《广州电视新闻》）。
（事故は昨晚の8時に置きた。一台のジープが、客を乗せようとした電動自転車に突っ込み、自転車に乗っていた男二人が路肩に停めていた乗用車の先頭部分にぶつかり、そのうち一人はそのあと草むらの中に転がっていった。）

③ 原因

原因とは、主体の移動が生起する非意図的な外的要因が動詞に包入されていることを指す。

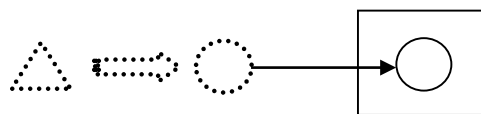


図.7 原因

- (27) a.我正在敬老院照顾老人，家里打来电话说母亲摔进一条两米深的坎里。
 (《和百姓打交道，有苦更有情（最美基层干部）》)
 (私が老人ホームで老人の世話をしているときに、母が転んで2メートルもある深い穴に落ちたという電話を受けた。)
- b.这些人，老天该叫他们跌进沟里摔断腿。(《反“围剿”》)
 (こいつらを神様が山谷に転ばし足を折らせてしまうべきだ。)

④付帯変化

付帯変化とは、主体の移動が生起することにより、移動物が場所に付着したり、離脱したりすることが動詞に包入されていることを指す。

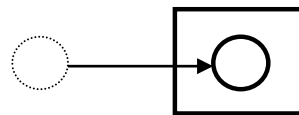


図.8 付帯変化

- (28) a.小河的清水混进浑水中，只见水下的泥沙象暴雨前的恶风卷着乌云在飞快地翻滚。(《大陆作家》)
 (小川の清水が濁った水の中に混ざり、水の下にある泥と砂が、暴雨の前の風が黒い雲を巻き込むように、素早く逆巻いているのが見えた。)
- b.江苏吕四渔场作业时，发现两条鲨鱼在相互撕咬，其中一条受伤鲨鱼缠进渔网中。(《750公斤大鲨鱼惊现港城》)
 (江蘇省呂四の漁場で作業をしていたときに、サメが二匹互いにかみ合っていて、そのうちの一匹が傷を負い、網の中に巻きつけられていることに気がついた。)

⑤結果・目的

結果・目的とは、主体の移動後の結果状態・目的が動詞に包入されていることを指す。

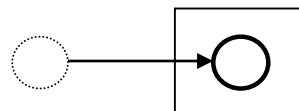


図.9 結果・目的

- (29) a.他原本应该和许多同龄人一样，背起书包上学校，坐进教室听新知。

(《换个眼光看私塾》)

(彼は、同年代の人と同じようにかばんを背負って学校に行き、教室に座って新しい知識を聞くべきだったのだ。)

b.直到有一天，他心满意足地躺进自己打制的棺材。(《大先生（遇见）》)

(いつかは彼が満足して自分で作った棺に入るその日まで。)

5.3.2 使役移動

次に、使役移動について述べる。

①手段³

手段とは、主体が移動を引き起こすために客体に働きかけた動作が、動詞に包入されていることを指す。

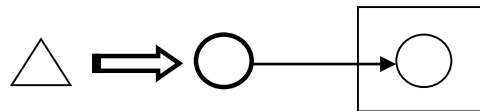


図.10 手段

(30) a.每天上班时，居住在中新天津生态城锦庐小区的居民郭女士都会把前一天的餐厨垃圾扔进楼道里的垃圾投放口。(《风吹垃圾地下跑》)

(毎日仕事に行くとき、中新天津生態城錦廬地区に住む女性の郭さんは、前の日に出了台所のごみを廊下にあるゴミ捨て口に放り込むのであった。)

b.有时我们也去捡豌豆，炸开的豌豆星星点点落在地上，我们就一颗颗捡进小口袋，倒进村里人为我们准备的大麻袋里。(《拾麦穗（十年）》)

(私たちはエンドウ豆を拾いにいくときもあり、開いたエンドウ豆はまばらに地面に落ちており、私たちは一粒一粒小さい袋に拾い入れ、そして村の人たちが私たちのために用意してくれた大きな麻袋の中にまとめる。)

②様態

様態とは、主体が移動を引き起こすために客体に働きかけ、尚且つその動作が着点まで継続されることが、動詞に包入されることを指す。

³ 第3章で挙げた使役の下位分類にあたる例は割愛する。

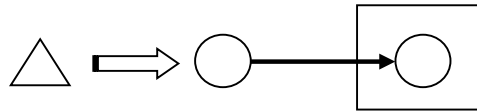


図.11 様態

(31) a.把螺丝拧进来。(《汉语动词用法词典》p.262)

(ネジをひねり入れる)

b.你先把车开进去吧!(《雷锋》)

(さきに車を駐車場に入れましょう。)

③付帯変化

付帯変化とは、主体が、移動引き起こすために客体に働きかけた結果、客体が場所にくっつく動作が動詞に包入されていることを指す。

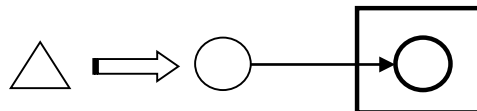


図.12 付帯変化

(32) a.但是把犯人推下山崖或把犯人缝进口袋扔进河里则是屡见不鲜的。

(《美废奴比较：不同的时代，一样的伟绩》)

(しかし、犯人を崖から落としたか、或いは犯人を袋に閉じ込めて投げ入れるのは、珍しくもない。)

b 第二天下午，林学武将早已窃得的手枪放进黑色公文包，就上街溜达。

(《灵犀》)

(二日目の午後、林学武は盗んだ拳銃を黒いバジェットの中に入れて、町へ出てぶらぶらした。)

④結果・目的

結果状態とは、客体の移動後の結果状態や目的が動詞に包入されていることを指す。

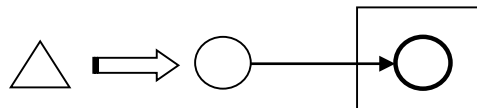


図.13 結果・目的

【結果】

(33) a. 上周, 将忘记吃的稀软柿子冻进冰箱……。(《菜谱集锦》)

(先週、食べるのを忘れていた柿を冷蔵庫で冷やしておき……)

b. 把莲藕、香菜、玉米粒和调味料拌进碎猪肉里。

(《风味莲藕饼(糖友厨房)》)

(レンコン、香菜、トウモロコシと調味料を砕いた豚肉の中に混ぜ入れる。)

⑤ 道具

道具とは、主体が客体を移動させるために使用した道具が動詞に包入されていることを指す。

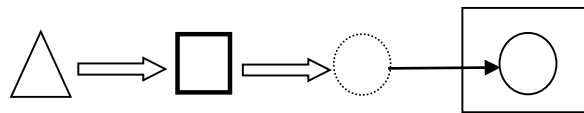


図.14 道具

(34) a. 第一天, 男孩往栅栏上钉进了 37 个钉子, 第二天 34 个, 第三天 30 个, 第四天 25 个。(《拔掉钉子, 洞还在》)

(一日目に、男の子はフェンスに釘を 37 本、二日目には 34 本、三日目には 30 本、四日目には 25 本打ち込んだ。)

b. 此外, 等花生苗长出来后, 可以将麦茬锄进土里, 这样麦茬就成了很好的肥料

(《新闻报道》)

(この他にも、落花生の苗が出てきたあと、麦の刈り株を鋤で土の中に入れる。こうすることにより、麦の刈り株はよき肥料となる。)

以上の内容を次にまとめる。

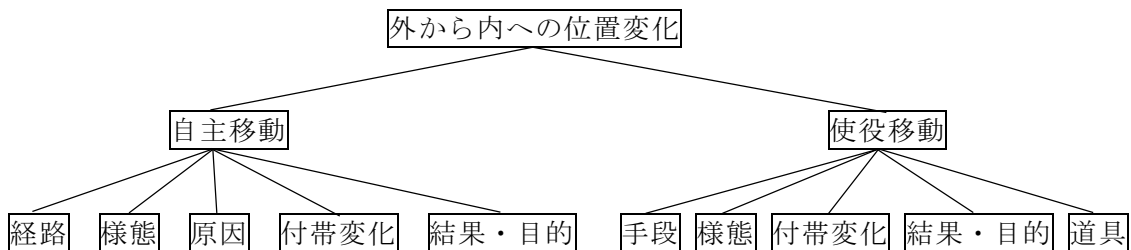


図.15 “进” フレーズの付随要素に包入される意味役割

以上、“進”フレーズに包入される動詞の意味役割を分析した。

5.4 “進”の拡張義再検討—身体性と容器から—

続いて本節では、“進”の意味拡張の動機づけを分析する。

5.4.1 “進”の拡張義

次の5.4.1.1節でメタファー義を、5.4.1.2節でイメージ・スキーマ変換による拡張義を述べる。

5.4.1.1 メタファー義

“進”のメタファー義を捉える上で、重要な点は次の2つである。

- (35) a. 容器に包含されるという事象を、我々がどのように解釈しているか。
- b. 具体的な容器は、どのような抽象的な容器に写像されているか。

まず、(35a)を述べる。包含の身体性について、ジョンソンは次のように述べている。

- (36) a. 包含の経験には概して外の力の防護、ないしそれに対する抵抗が伴う。
- b. 包含はまた容器の内部に力を制限し限定する。
- c. 力がこのように制限されるために、包含された対象がその位置を相対的に固定される。
- d. 容器内で位置を相対的に固定されるということは、包含された対象が観察者に見えるようになったり、見えなくなったりすることを意味する。
- e. 最後に包含の推移性が経験される。もしBがAの中にあれば、Bの中にあるものはやはりAの中にある。(菅野・中村(1991:89))

(36)の指摘から、“進”の意味拡張に関する身体性は、次のように考察可能である。

- (37) 包含された対象はその位置を相対的に固定され、対象は、その固定された領域内で力を発揮する。

(37)を、金魚と金魚鉢を例に検証してみる。次の図を参照されたい。

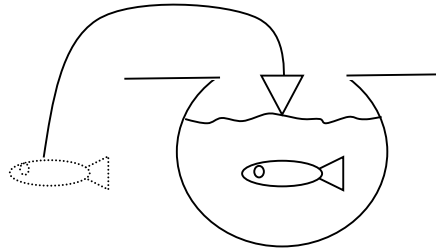


図.16 金魚鉢

金魚は、金魚鉢の中に入れられ、その位置は、金魚鉢、すなわち容器内へと固定される。また、金魚は、水が含まれた金魚鉢の中で、初めて「泳ぐ」という行動が発揮される。Johnson (1987 : 22) では、「(部屋の中にいる場合や、上着をつけている場合など) 包含は力を制限させる」とあるが、この場合はその逆である。包含のスキーマを考察する際、容器の中身だけではなく、容器の外がどのようなになっているのかも想定する必要がある。このように、容器の中だけでなく、外の様相も考慮に入れる考え方は、山梨正明 (2012 : 28) では、「イメージへの複合的視点の投影」と言われている⁴。例えば、図.16 の容器の外が、川のように広く、水がある空間を想定する場合、金魚鉢の中の金魚は、力が制限されるといえるが、容器の外が、水のない空間を想定する場合、むしろ金魚鉢の中の金魚は力が発揮されるといえる。

次に、(35b) を述べる。2.2.1 節で見た包含のスキーマは、写像によって、具体的な空間から、心理的、社会的といった抽象的な空間へと比喩的に拡張される。例えば、山梨正明 (2000) は、日本語の動詞「入る」を例に、主体の入る容器が、物理的な空間から社会的、心理的空間へと拡張される例を挙げている。次の図と例を参照されたい。

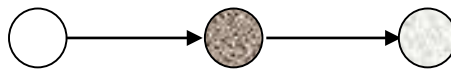


図.17 容器のイメージ・スキーマの変容プロセス (山梨正明 (2000 : 142) を改変)

- (38) a. 彼は寝室に入った。(物理的空間)
 b. 彼は新しいクラブに入った。(社会的空間)
 c. 彼は躁状態に入った。(心理的空間) (山梨正明 (2009 : 94) を改変)

⁴ 山梨正明 (2012 : 27) では、容器のイメージへの複合的視点への投影として、他にも「容器の境界領域が閉じているのか開いているのか」「容器の境界領域が閉じているのか開いているのか」「容器の境界領域を内から見ているのか外から見ているのか」が挙げられている。

以上、「包含事象への解釈」と「写像」という2つの観点から、“進”の拡張義と動機づけは、次のようにまとめることができる。次の表を参照されたい。

	意味	動機づけ
i	心理的空間への受け入れ	固定・写像
ii	社会的空間への受け入れ	固定・写像
iii	動作の効果の発揮	領域内における効果の発揮

表.1 “進”のメタファー義とその動機づけ

表.1の内容を次にまとめる。

i.心理的空間への受け入れ

心理的空間への受け入れは、(37)で示した固定と、(38)で示した写像に動機づけられる。つまり、心理的な空間に固定されることから、「受け入れ」という意味が獲得されるのである。次例を参照されたい。

(39) a.我的话他还能听进去。(吕叔湘主编(1999:310))

(私の話は、彼はまあ聞いてくれるだろう)

(牛島・菱沼監訳(2003:208))

b.相信随着中国的不断发展,中国声音在国际上能够被越来越多的人不仅听到耳朵里,更能听进心里。(《为中国发展注入强劲正能量》)

(中国のたゆまぬ発展に伴い、中国の声は世界の場でますますいろいろな人の耳に届くだけでなく、受け入れられると信じている。)

ii.社会的空間への受け入れ

社会的な空間は、「店舗」や「組織」、「刑務所」などに分けられる。それに応じて、「仕入れ」「雇用」「収監」「加入」という意味が獲得される。次例を参照されたい。

(40) a.仕入れ:昨天商店里刚进了一批货。(吕叔湘主编(1999:309))

(昨日店に品物が入ったばかりだ。)

(牛島・菱沼監訳(2003:206))

b.雇用:我们单位去年没有进过人。(吕叔湘主编(1999:309))

(我々の職場は去年は1人も人が入らなかった。)

(牛島・菱沼監訳(2003:206))

c.収監:他进过监狱。(邵敬敏(2004:38))

(彼は監獄に入ったことがある。)

- d. (組織への) 加入：我们不能叫一个来历不清的人混进我们的军队里去。
(《暴风骤雨》)

(我々は素性のはっきりしない人間を我々の部隊へと
入れることはできない。)

iii. 動作の効果の発揮

(37) で述べたように、ある一定の領域内では、効果を発揮しない動作やモノがある。例えば、既述のように金魚鉢のように水のある場所では、金魚の「泳ぐ」という動作は効果を発揮しない。また、サッカーでも同様に、「ボールを蹴る」という動作は、フィールドの中でしか効果を発揮しない。他にも、私たちが普段から使う電池は、バッテリーケースに入れられて初めて効果を発揮する。このように、ある一定の領域内では、効果を発揮しない動作やモノがあることを、我々は身体経験から知っているのである。それが、「効果の発揮」という意味に動機づけられる。「効果の発揮」を表す実例として、次例を参照されたい。

- (41) a. 这几天他吃不下饭，看不进书，总是发呆。(刘月华主编 (1998 : 205))
(ここ数日彼はご飯ものどを通らず、本を読んでも頭に入ってこず、いつもぼーっとしている。)
- b. “看那么多的书，不觉得累吗？一天看到晚，能看得进去吗？”
(《曾志与毛泽东交往实录(下)》
(そんなに多くの本を読んで、疲れなの？一日中本を読んでて、内容が頭に入るの。))

“书”はメトニミー (metonymy) で、ここでは、本の内容を指す。

5.4.1.2 イメージ・スキーマ変換

前節では、メタファーによる拡張義を述べてきたが、本節ではイメージに操作を換えて意味を拡張する、イメージ・スキーマ変換による拡張義を述べる。次例と概略図を共に参照されたい。

- (42) a. 他额头瘪进一块，很显眼。(刘月华主编 (1998 : 215))
(彼のおでこは一塊のように凹んでおり、とても目立つ。)
- b. 一脸愁眉苦脸的样子，眼睛深深地凹进去。(刘月华主编 (1998 : 215))
(浮かない顔をして、目は深くくぼんでいた。)



図.18 “進”のイメージ・スキーマ変換

上記図.18 (a) のように、物理的移動では、tr と lm が非同一体として存在しているが、図.18 (b) を見てもわかるように、両者を同一体として捉え、lm が変化前の状態、tr が可変部となる。よって、図.18 (b) は凹みを表す拡張義として獲得している。

5.5 おわりに

5.3 節と 5.4 節の内容を次にまとめ、本章のおわりにかえる。

まず、“進”フレーズにおける動詞の意味役割は、次のように分類される。

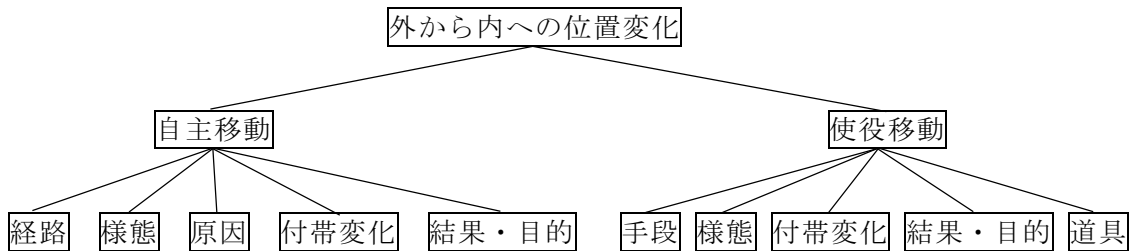


図.19 “進”フレーズの付随要素に包入される意味役割（再掲）

次に、“進”の意味拡張と拡張義は次のようにまとめられる。

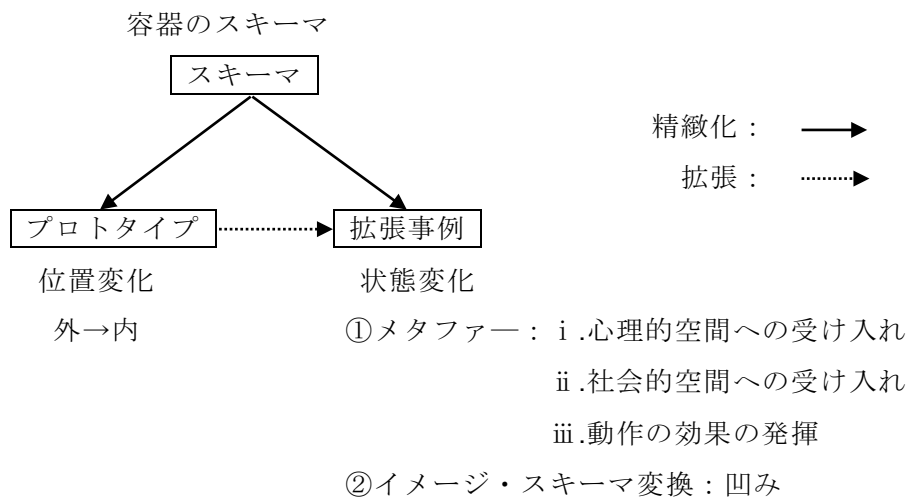


図.20 “進”の意味拡張

論の進め方として、まず 6.1 節で“出”フレーズの統語的特徴を述べ、6.2 節で刘月华主编 (1998) を検討し、6.3 節で“出”フレーズにおける動詞分類について述べ、6.4 節で“出”の意味拡張の動機づけを分析し、6.5 節で全体のまとめを述べる。

6.1 “出”の統語的特徴について

まず本節では、“出”の統語的特徴について 3 点述べる。1 点目は、“出”に組み合わせる目的語、2 点目は“出”の有標性について、3 点目は“出”のパラフレーズについてである。

6.1.1 “出”と組み合わせる目的語について

“出”の基本的な用法として、内から外への位置変化が挙げられる。位置の変化は、自主移動と使役移動にわけ、“出”と組み合わせる目的語には次のように制約が見られる。

- (5) a. **主体**：屋里走出**一个人**。(吕叔湘主编 (1999 : 122))
(部屋の中から誰か出てきた。)(牛島・菱沼監訳 (2003 : 60))
- b. **場所**：他把客人**送出了大门**。(吕叔湘主编 (1999 : 123))
(彼はお客さんを表門の外まで送った。)
(牛島・菱沼監訳 (2003 : 60))
- (6) a. **受事**：过去他们用铁镐**出煤**，现在用风镐了。(吕叔湘主编 (1999 : 122))
(昔はつるはしで石炭を掘ったが、今は空気さく岩機を使うようになった。)(牛島・菱沼監訳 (2003 : 59))
- b. ***受事**：***他出了那本书**。(彼はその本を取り出した。)
→**拿出了**
- c. ***場所**：***他把剑出剑鞘**。(彼は剣を鞘から抜いた。)
→**拔出**

“出”が使役移動義を表す場合、“出”と組み合わせる目的語は、“出煤”や“出粪・出猪圈”といったイディオム (cf. 吕叔湘主编 (1999 : 121-122)) に限られ、単独では使役移動義を表すことが不可能である。よって、(6b) (6c) のように、“出”に動詞を前置させ、“出”フレーズ②で表す必要がある。

6.1.2 “出”の有標性について

また、「動詞+“出”+場所」の形式では“出”は省略不可であり、この点において、“出”と“进”は、非対称的である。5.1.1 節で挙げた例を次に再掲し、“出”と比

較する。

- (7) a. 凤凰篝火晚会回来路上吊桥断了，好多人掉进水里……幸好我刚过桥十几秒，我在现场。（《湖南新闻》）
（掉水里）
（凤凰キャンプファイアの帰りに、吊り橋が切れ、多くの人が水に落ちた。幸運にも、私は十数秒前に橋を過ぎていて、現場にいた。）
- b. 左手握着一把水稻苗，半弓着腰，照着旁边老乡的样子，尝试着把一株稻秧插进田里，旁边却有不少村民在围观。（《非洲小伙浙江当村官》）
（插田里）
（左手には苗が握られており、腰を曲げ、隣にいる地元の人によって、苗を一本田んぼにいれようと図りますが、周りには多くの人間が見に来ている。）
- (8) a. 车子终于拉出了泥洼。（《暴风骤雨》）
（*拉了泥洼）
（車は、やっと泥のたまったくぼみから引きずりだされた。）
- b. 数学老师拿起数学书对着马蜂猛挥一阵，打开窗户，把这个“不速之客”赶出了教室。（《课堂的不速之客》）
（*赶了教室）
（数学教師は、教科書をクマバチに向かって力強く振り、窓をあけ、この「招かれざる客」を教室から追い出した。）

(7) では、“进” が省略可能であるが、(8) “出” では不可能である。その理由については、次章で分析する。

6.1.3 パラフレーズ

続いて、移動物（モノ）と基準物（場所）の語順の関係から、“出” フレーズのパラフレーズについて述べる。次例を参照されたい。

【自主移動】

i. NP+从 LP+ (V) 出

- (9) a. 一群牛马，从屯子里出来。（《暴风骤雨》）
（牛馬の大群が村落の中から出てきた。）
- b. 下午 6 点 23 分，穿淡青色西服的男子从房间里出来，打着电话消失在画面中。（《女公务员遭县残联理事长强奸？》）
（午後 6 時 23 分、淡いブルーの服を着た男が部屋の中から出てきて、電

話をかけながら画面の中に消えていった。)

ii. **NP+ (V) 出+LP**

- (10) a. 下课了, **孩子们一窝蜂跑出教室**, 在院子里踢毽、跳绳、打球, 只有许静孤零零地坐在教室里。(《中国小姑娘参加国际少年英雄节》)
(授業が終わった。子供たちはいっせいに教室を出て、庭でジェンズをけったり、縄跳びをしたり、ボールをついたりしている。その中で許静だけが、独りぼっち教室に座っていた。)
- b. **赵玉林** 挎着枪, 低着头, 大踏步地**走出学校门**, 在道沿走着。
(《暴风骤雨》)
(趙玉林は、モーゼルをぶらさげて、大股で学校の門を出て、道路の端を歩いていた。)

【使役移動】

i. **从 LP+V 出+NP**

- (11) a. 说完一伸手直接**从一个守卫腰中拔出一把刀**来, 那守卫一时还没反应过来……(《一叶一世界\重生鹿鼎做王爷》)
(言い終わると、手をすっと伸ばし警備員の腰から刀を抜き出した。警備員は反応できず……)
- b. 说着, 祖母**从房间里拿出我的枕头**, 让我摸了摸。(《风中有棵布惊草》)
(話しているうちに、祖母は部屋の中から私の枕をとりだし私に触らせた。)

ii. **把 NP+从 LP+V 出**

- (12) a. 他**把匣枪从皮套里取出**, 咔嚓一声上好一梭子子弹, (《暴风骤雨》)
(彼は拳銃を革のケースから取り出し、ガチャンとクリップに入れた弾丸を込めた。)
- b. 这女人**把右手从头发里抽出来**, 待要与客人握手, (《红玫瑰与白玫瑰》)
(この女は右手を髪の毛の中から抜き出し、客人と握手しようとした。)

iii. **把 LP+的+NP+V 出**

- (13) a. 所以要**把嘴巴里面的泥土掏出来**, 也想要看看周围情况如何
(《鲁豫有约》)
(なので、口の中にある泥をとりだしたいし、周囲の状況がどうなっているのかも見たい。)
- b. 徽因小心翼翼地**把小箱子中的东西取出**摊在宽大的书桌上。(《张清平》)
(徽因は、注意深く小さい箱の中にあるものを取り出し、大きな机の上に広げた。)

iv. **从 LP+把 NP+V 出**

(14) a. 他的爱人在家等急了，打着手电来接时。才**从路边沟里把他拉出来**。

(《报刊精选》)

(彼の奥さんは家で待ちきれず、懐中電灯を手に迎えにきたときに、ようやく彼を、道の溝からひきずりだした。)

b. 他怕淋湿了税票，**从包里把税票拿出来**，塞进背心，贴在胸前，又艰难地往前走。(《人民日报》)

(彼は納税証明書が濡れるのを心配し、バッグの中から取り出し、ランニングシャツの中に押し込み、胸の前につけ、また辛そうに前に進んだ。)

v. **V 出+LP+的+NP**

(15) a. 连刚上小学的娃娃也**掏出口袋里的零花钱**。(《人民日报》)

(小学校に上がったばかりの子供さえも、ポケットの中からお小遣いを取り出した。)

b. 他**掏出口袋里的几元钱**，说“去买包烟吧！”(《报刊精选》)

(彼はポケットの中の金を取り出し、「たばこでも買ってきなさい」といった。)

“出”フレーズのパラフレーズは、自主移動が2種、使役移動が5種である。

以上、“出”の統語的特徴について述べた。

6.2 刘月华主编 (1998) における分析と問題点

続いて本節では、刘月华主编 (1998) における“出”についての分析を検討する。

6.2.1 刘月华主编 (1998) における分析

刘月华主编 (1998) は、“出” (“出来” “出去”) を、“趋向意义” (趋向義) と “结果意义” (結果義) にわけ、それらに組み合わさる動詞を、次のように分類している。

① 趋向義：表示通过动作使人或物体由某处所的里面向外面移动。立足点可在处所外面，也可在处所里面。(cf. 刘月华主编 (1998 : 230))

(動作を通して、人、或いはモノを内部から外部へと移動する、または移動させる。立脚点は、場所の外にあってもいいし、中にあってもいい。)

a. 体やモノの動きを表す動詞

(16) a. 朱老忠**走**出房门，在院子里歇了一下。(刘月华主编 (1998 : 217))

(朱老忠は、部屋の扉を出ると、庭で一息ついた。)

b. 丁四从屋里**跑**出来。(刘月华主编 (1998 : 233))

(丁四は部屋の中からかけ出てきた。)

組み合わせる動詞：“走”（歩く）“跑”（走る）“爬”（這う）“飞”（飛ぶ）など

b.体の動作を表す動詞

(17) a. 贺家彬伸出手来，挽着她的手臂。(刘月华主编 (1998 : 234))

(賀家彬は、手を伸ばして、彼女の腕をひいた。)

b. 她不说话，躲着我的目光，却又伸出细长的脖子。

(刘月华主编 (1998 : 218))

(彼女は話しをせず、私の目をさけたが、細長い首をまた伸ばした。)

組み合わせる動詞：“伸”（伸ばす）“抽”（出す）“探”（乗り出す）など

c.モノの位置を変化させる動作行為動詞

(18) a. 他走到方桌前打开抽屉，取出手枪，走进右边房门。

(刘月华主编 (1998 : 218))

(彼は机の前まで歩くと、引き出しをあげ、拳銃をとりだし、右の扉に入ってしまった。)

b. 李三随后端出两碗面去。(刘月华主编 (1998 : 252))

(李三は、それから碗に入った面を持って出て行った。)

組み合わせる動詞：“推”（押す）“搬”（運ぶ）“踢”（蹴る）“扔”（投げる）など

d. 比喻用法：所有関係や占有関係が、外から内に変わることを表す。

(cf. 刘月华主编 (1998 : 219))

a. 为了今天的胜利，多少好同志献出了自己生命。

(刘月华主编 (1998 : 219))

(今日の勝利のために、どれだけの同士が自分の命を捧げだしたというのか。)

b. 他把车押出去，押了六十块钱。(刘月华主编 (1998 : 254))

(彼は車を質に出し、それは 60 元になった。)

組み合わせる動詞：① “发”（送る）“交”（提出する）“献”（捧げる）など

② “留”（残す）“省”（節約する）“数”（数える）など

③ “使”（(力を)使う）“拼”（必死にやる）“豁”（犠牲にする）

など

②結果義：表示通过动作使事物由无到有，由隐蔽到显露¹。

(cf. 刘月华主编 (1998 : 231))

(動作を通して、事物を「無」から「有」、或いは「隠れた状態」から「明らかになった」状態へと変化させることを表す)。

¹ “出去”にこの用法はない (cf. 刘月华主编 (1998 : 256))。

a. 事物を「無」から「有」、或いは「隠れた状態」から「明らかになった」状態へと変化させることを表す動作行為の動詞

(19) a. 这期间，制药厂又生产出一批新药。(刘月华主编 (1998 : 222))

(この期間、製造工場はまた多くの新薬を生産した。)

b. 人在哪儿？赶快交出来。(刘月华主编 (1998 : 236))

(あの人はどこだ、早く出せ。)

組み合わせる動詞：①制作：“做”（発展する）“生产”（生産する）など

②生長：“发展”（発展する）“产生”（生み出る）など

③搜索：“调查”（調査する）“检查”（検査する）など

④思考：“考虑”（考慮する）“摸索”（模索する）など

⑤引き起こす：“惹”（引き起こす）“闹”（騒ぐ）など

b. 言語に関わる声がある動作動詞

(20) a. 既然你提出来应该检查，那我也同意。(刘月华主编 (1998 : 241))

(検査すべきだと言い出した以上、私も同意します。)

b. 婚姻法公布出来了。(刘月华主编 (1998 : 241))

(婚姻法が交付された)

組み合わせる動詞：“说”（言う）“谈”（話す）“念”（読む）“唱”（歌う）

c. 明らかになることを意味する動詞

(21) a. 她那皱得像核桃壳的脸上也露出了笑容。(刘月华主编 (1998 : 226))

(彼女のクルミの殻のようなシワのある顔にも笑顔が現れた。)

b. 衣服非常合体，显出了她身材优美的曲线。(刘月华主编 (1998 : 226))

(衣服は非常に体に合っていて、彼女の優美な曲線を描いたスタイルをあらわにした。)

組み合わせる動詞：“露”（露わになる）“表现”（表現する）“表演”（演技する）

など

d. 感覚器官を用いた動作を表す動詞

(22) a. 她清楚地看出，那是余永泽！(刘月华主编 (1998 : 227))

(あれは余永沢であることが彼女にははっきりとわかった。)

b. 王海和马先生他们也听见了，可惜没有听出是谁说的，也无法追究。

(刘月华主编 (1998 : 227))

(王海と馬さんにも聞こえたが、誰が言ったのかわからなかったし、追求することもできなかった。)

組み合わせる動詞：“看”（見る）“听”（聴く）“分”（分ける）など

e. ヒトやモノに新たな性質を賦与する動詞

(23) a. 他常常想，在北大，或者清华、复旦、交大、或是别的一些重点大学里，会

有他**教**出的一些学生。(刘月华主编 (1998 : 228))

(北京大学、清华大学、复旦大学、上海交通大学、あるいは他の重点大学に彼の育てた学生がいたらと彼は常々考えている。)

b. 在我们**培**养出一批一批优秀生的同时，却孵化出更多更多不像人的人。

(刘月华主编 (1998 : 228))

(我々が優秀な学生を一群一群と輩出するのと同時に、さらなるヒトではないヒトをう化していたのだ。)

組み合わせる動詞：“教育”（教育する）“锻炼”（鍛錬する）“学”（学ぶ）など

f. “凸、高” など

(24) a. 他一面说着，**突**出鼓溜溜的眼珠子。(刘月华主编 (1998 : 228))

(彼は話をしながら、まるまるとなった目玉を突き出した。)

b. 背上**鼓**出一个大包。(刘月华主编 (1998 : 228))。

(背中から大きなコブが膨れ出た。)

組み合わせる動詞：① “突”（突き出る）“凸”（突き出る、突き出す）“鼓”（膨れ上がる）など

② “高”（高い）“大”（大きい）

6.2.2 刘月华主编 (1998) 検討

本研究は、“出”と関連して、刘月华主编 (1998) における分析には、次の2点において不足が見られると判断する。

(25) a. 動詞の意味役割の説明と言語事実の不一致。

b. 拡張義への動機づけ。

まず、(25a) について述べる。動補構造の特徴について、刘月华主编 (1998) では次のように述べられている。

(26) “出来”表示由无到有，由隐蔽到显露，可以搭配的动词意义必须与此相关。如：表示“显露、创作、出生、查找、思考、引惹、说、写”

(刘月华主编 (1998 : 16))

(“出来”はない状態からある状態へ、隠れた状態から現れる状態になることを表し、組み合わせる動詞の意味はこれと関連するものでなくてはならない。例えば、“显露（現れる）、创作（創作する）、出生（生まれる）、查找（探す）、思考（考える）、引惹（引き起こす）、说（言う）、写（書く）”などである。)

(26) の主張が、言語事実とは必ずしも一致しないことは、次例からも明らかである。

(27) a. 那少女手真巧，**剪**出不少花样。(《汉语动词词典》p.189)

(その少女は本当に器用で、切り出した模様は少なくない。)

b. 他用纸片**叠**出一匹小马，真好玩。(《汉语动词词典》p.102)

(彼は紙切れを使って子馬を折った。とても面白い。)

c. 身上**叮**出好几个包。(《汉语动词词典》p.102)

(虫に刺されて、体にぼつぼつがいくつか現れた。)

上例(27)の動詞は、“動詞+出”という構造の中では「出現」と関連しているといえるが、“剪”“叠”“叮”が単独で「出現」を表すとは考え難いため、“出”フレーズに組み合わさる動詞は、「出現」と関連する意味に限定されないと考えたほうが自然である。(27)の引用で、“显露”“创作”“出生”といった動詞が挙げられたのは、恐らく“出”が出現を表す場合、関連した意味の動詞が組み合わせやすいという意味上の相性に起因する。意味上の相性については、6.4.2節で述べる。

さて、「出現」を表す“出”に付随する動詞が、出現と関連するものに限定されないのは、2.1.3節で述べた事象構造における観察視点による中国語のアスペクトと関与していると思われる。繰り返しになるが、Tai (1984)；影山太郎 (1996) は、中国語が「結果重視」型の言語であることを主張している。これは、言語によって語彙的アスペクトに差異が生じるのは、事象構造に置かれる視点が言語によって異なることに起因する、という仮説である。Tai (1984) と影山太郎 (1996) の主張に基づけば、中国語は、概念化者が結果に視点を据えて事象全体を眺めるため、原因事象と結果事象が異なる記号で表示され、動詞自体に結果は含れないことになる。次の例を参照されたい。

(28) a. 张三**杀**了李四两次，但李四都没死。(Tai (1984 : 291))

(張三は李四を二回殺したが、李四はいずれも死んでいない。)

b. *张三**杀 - 死**了李四两次，但李四都没死。(Tai (1984 : 291))

(張三は李四を二回殺したが、李四はいずれも死んでいない。)

上例のように、中国語は結果を含意しないため、(28a)のように動作の結果が生起しなかった表現が可能である。結果を含むためには、“杀”（殺す）＋“死”（死ぬ）のように、複合動詞で表示することが必須となる。上記の、Tai (1984) や影山太郎

(1996)の主張を、「出現」を表す“出”フレーズに当てはめ、次のように概略的に図示する。

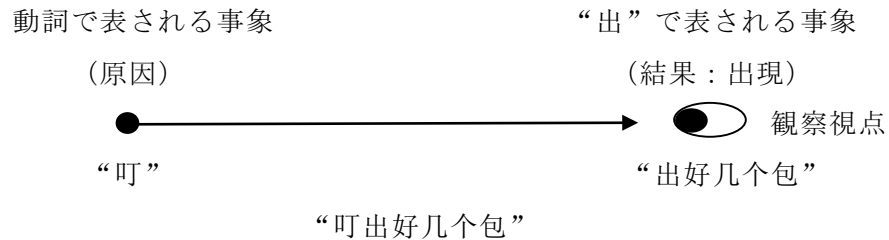


図.1 事象構造の視点

概念化者は、まず“出好几个包”という結果に視点を据え、それからその結果がどのような原因(5.2.2節で述べた原因①)を辿ってきたのか、という原因事象に視点が向けられる。

以上の考察から、「出現」を表す“出”と組み合わせる動詞は、「出現」に限定されないことになる。

6.3 動詞分類再検討—包入から—

本節では、位置の変化、すなわち移動を表す“出”フレーズに包入される動詞の意味役割を検討する。

6.3.1 自主移動

①経路

内から外への経路は、中国語では“出”で記号化され、これは動詞としても、補語としても用いられる。次例を参照されたい。

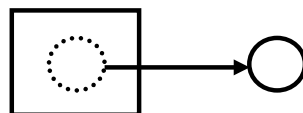


図.2 内から外への経路

(29) a.一会儿出，一会儿进，你干什么？

(出たり入ったり，君は何をしているのか?) (『白水社 中国語辞典』)

b.从来没出过北京。

(今まで北京から出たことがない。) (『白水社 中国語辞典』)

②原因

原因とは、主体の移動が生起する非意図的な外的要因が動詞に包入されていることを指す。次例を参照されたい。

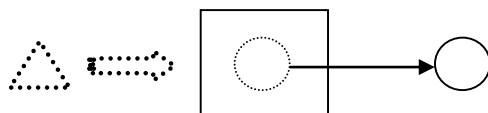


図 3.原因

- (30) a.脸上被树枝刮出了几道血口子（《报刊精选》）
（枝にひっかかって、顔に何筋ものかすり傷ができた。）
b.他滑跌下来，头额给山石擦出了血（《红日》）
（彼は転んで、額を山石にすって、血がでた。）

③様態

様態とは、主体の移動が生起する内的要因が、移動が終わるまで持続することが動詞に包入されていることを指す。様態は、意志的な様態と非意志的な様態に分かれる。

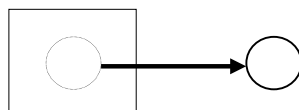


図.4 様態

【意志的】

- (31) a.巷子里跑出了一个人。
（横丁から人が1人走り出た。）（『白水社 中国語辞典』）
b.走出办公室
（事務所を出る。）（『白水社 中国語辞典』）

【非意志的】

- (32) a.10天后，绿芽冒出了地面。（《人民日报》）
（10日後、緑の芽が出てきた。）
b.两只前爪，都搭在了他的肩上，狼牙一毗，从嘴角流出了一丝口水。
（《鬼吹灯》）
（二つの爪が彼らの方に載せられていた。オオカミの牙がむき出しになる

と口角からよだれが流れ出た。)

④結果・目的

結果・目的とは、主体の移動後の結果状態・目的が動詞に包入されていることを指す。

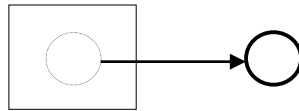


図.5 結果・目的

- (33) a. 只见大厅门口不知何时站出一个青衫人，头上蒙著一块青布，中露出两只眼睛，背著月光而立，身姿傲然如一棵古松。《《花溪沉铃录》》
(大広間の入り口に、いつ現れたかわからない青い服を見にまとった男が立っていた。間から目が出るように青い布を顔に巻き、月明かりを背に立っていた。傲然としたその姿はまるで松の老木のようにであった。)
- b. 人群之中站出了十多个孩童，大多是听父母提过萨喀尔德长老名字的人。
(《赤雪情殇》)
(人々の中から、子供が数十人出てきた。そのうちの多くは、両親が長老サガードの名を聞いてきた者だった。)

6.3.2 使役移動

次に使役移動について述べる。

①手段

手段とは、主体が移動を引き起こすために客体に働きかけた動作が動詞に包入されていることを指す。次例を参照されたい。

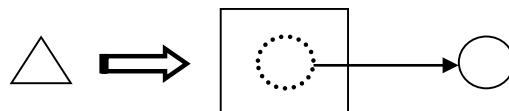


図.6 手段

- (34) a. 谁知这不讲理的衙门，很简单地“没收了”，把柿子倒进屋里，将筐子给我扔出了门。
(理不尽なこの守衛が、いとも簡単に「没収」といって、柿を部屋の中に入れ、かごを門から放り出すとは誰が知ろうか。)
- b. 我那时想当众人面儿把她骂出去，可又一想，人家是来告诉我离婚的，我

凭什么还骂人家，没这权利了。（《比如女人》）

（私は、その時公衆の面前で彼女を怒鳴り、出ていかそうとした。しかし、相手が私に離婚を告げにきたので、何様のつもりで相手を叱るのだと、この権利はなくなってしまった。）

② 様態

様態とは、主体が移動を引き起こすために客体に働きかけ、尚且つその動作が着点まで継続されることが包入されることを指す。

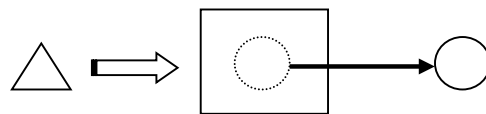


図.7 様態

(35) a.那穿新衣的少年正从水桶里拧出一块抹布，开始抹桌子。（《小李飞刀》）

（あの新しい服を着た少年は、バケツの中から雑巾を絞り出し、机を拭きだした。）

b.修完车该出车了，我刚开出车库，就发觉变速箱里有毛病，一换档嘎嘎地响。（《佳作1》）

（車の修理が終わり、車を出すときがきた。車が車庫から出たとたん、ギア装置の異常に気が付き、ガタガタと音がしたのだ。）

③ 付帯変化

付帯変化とは、主体が移動を引き起こすために客体に働きかけ結果、客体が場所にくっついたり、はなれたりする動作が動詞に包入されていることを指す。

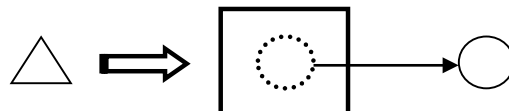


図.8 付帯変化

(36) a.听见锅里滚水咕嘟响，老太太揭开锅，舀出一壶开水。

（《野火春风斗古城》）

（鍋の中のお湯がゴトゴトと鳴っているのが聞こえ、老婆は蓋を開けて、壺に入るだけのお湯をだした。）

b.村里的老人们从地里挖出被油纸一层层包裹起来的地戏面具，恢复了绝迹

二十多年的民族传统娱乐“地戏”。(《报刊精选》)

(村の老人たちは、地の中から、何層もの油紙で包まれた「地劇」のお面を掘り出し、二十年以上とだえた民族の伝統劇である「地劇」を復活させたのだった。)

④結果・目的

結果・目的とは、客体の移動後の結果状態や目的が動詞に包入されていることを指す。

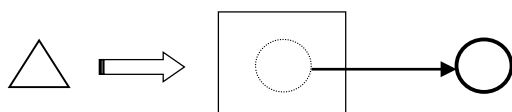


図.9 結果・目的

(37) a 第二家是杂货店，这两家杂货店同时把蔬菜摆出来了，我看了一下他们摆出的蔬菜品种很全……。(《央广新闻》)

(二軒目は雑貨店だった。この店には野菜も並べられており、品揃えがよかった……。)

b 她照例出工前早早地把我的被子晒出去……(《二次青春期》)

(彼女はいつもどおり働きに出るまえに、早々に私の布団を干し……)

⑤道具

道具とは、主体が客体の移動させるために使用した道具が動詞に包入されていることを指す。

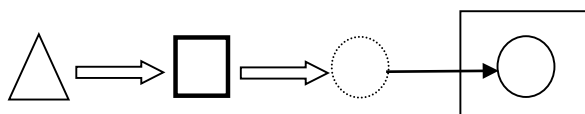


図.10 道具

(38) a.把剩下的水泥铲出来。(《现代汉语动词词典》p.41)

(残ったセメントをスコップで掘り出した。)

b.锄出一些古钱来。(《现代汉语动词词典》p.58)

(くわで古いお金を取りだした。)

以上、“出”フレーズに包入される動詞の意味役割を次にまとめる。

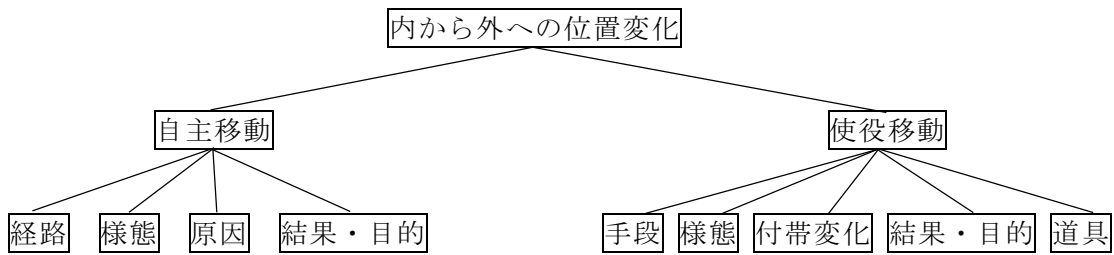


図.11 “出”と組み合わせる動詞の意味役割

6.4 “出”の拡張義再検討—身体性と容器から—

続いて本節では、“出”の意味拡張の動機づけを分析する。

6.4.1 “出”の拡張義

次の 6.4.1.1 節でメタファー義を、6.4.1.2 節でイメージ・スキーマ変換による拡張義を述べる。

6.4.1.1 メタファー義

“出”のメタファー義を分析する上で、重要な点は次の2つである。

- (39) a. 容器に包含されるという事象を、我々がどのように解釈しているか。
- b. 具体的な容器は、どのような抽象的な容器に写像されているか。

まず、(39a) について述べる。前章 5.4.1.1 で述べた包含の身体性から、“出”のメタファー義に関わる身体性は、次のように考察可能である。

- (40) 包含された対象はその位置を相対的に固定され、その固定された領域内で、対象は見えなくなり、更には力が制限される。

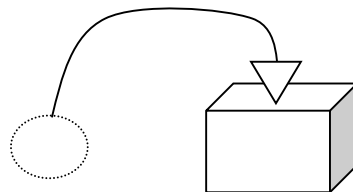


図.12 包含は対象を見えなくする

例えば、目の前にバッグを抱えた女性がいたとする。我々は、その女性のバッグの中に何が入っているのかを知らず、知るためには、バッグの中に入っているモノを

出す必要があることを経験から知っている。こういった身体経験が、次のような意味を獲得する。

i. (隠れた状態からの) 出現

(41) a.你把秘密说出来，是否突然使原本一团糟的状况变得更混乱？

(《不要把秘密告诉我》)

(秘密を吐き出して、滅茶苦茶な状況を更にめちゃくちゃにするおそれはないか。)

b.事故还在调查之中，具体情况要等调查出来以后才能说清楚。

(《中国的主人》)

(事故はまだ調査中であり、具体的な状況は調査後にはっきりということができる。)

さらに、上記「(隠れた状態からの) 出現」は、希薄化によってその意味を拡張する。次の図と例を参照されたい。

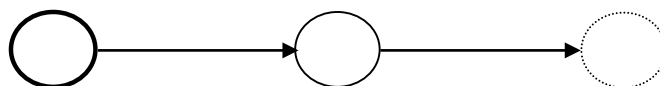


図.13 希薄化 (cf.山梨正明 (2000 : 143))

(42) a.穴から蛇が出てきた。

b. (X から) いい色が出てきた。

c. {月が / 霧が} 出てきた。(山梨正明 (2000 : 143))

(42a) は、「穴から」という表現が明らかなように、問題の蛇がどこから出てきたのかの出所が前景化されている。これに対し、a から c の例にいくにしたがって、容器のイメージ・スキーマは相対的に背景化されている。c の場合には、月や霧がどこから出てきたかに関わっても、具体的にその出所を意識することは不可能である。(山梨正明 (2000 : 143))。このように、認知的際立ちが低くなることにより意味が拡張することを希薄化 (bleaching) という (山梨正明 (2000 : 143))。次例を参照されたい。

ii - i. (非存在→存在) 出現・発生

(43) a.问题又出来了。

(問題がまた発生した。)(『白水社 中国語辞典』)

b.天空出了一道彩虹。

(空ににじが出た。)(『白水社 中国語辞典』)

ii - ii .生産

(44) a.去年你们厂出了多少辆车。(《现代汉语动词词典 p.57》)

(去年あなたの工場は車を何台生産しましたか?)

b.这种产品他们正出着呢。(《现代汉语动词词典 p.57》)

(この種類の製品は彼らが出荷しています。)

さらに、出現する場所は、写像によって、次のように抽象的な領域もまた含まれる。

知覚への出現

(45) a.我看得出来你的心事很重。

(私には君の悩みがとても大きいことがわかる。)(『白水社 中国語辞典』)

b.你怎么认不出了?

(君はどうして見分けられなくなったの?)(『白水社 中国語辞典』)

能力への出現

(46) a.由于生性羞怯,并没有把嘴巴练出来。(刘月华主编(1998:244))

(彼は生まれつきはにかみ屋で、口が上手になっていない。)

b.她的厉害是由困苦中折磨中锻炼出来的。(刘月华主编(1998:244))

(彼女のすごさは苦しみや困難の中から鍛錬することによって生み出されたのだ。)

次に、(40)の身体経験から、動機づけられる状態変化義について述べる。次の図を参照されたい。

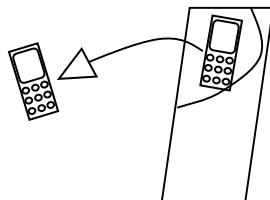


図.14 状態変化

あるモノが包含された状態にあることは、そのモノが本来の効果を発揮できないことを意味する。例えば、図.14では、携帯電話がズボンのポケットの中に収まっている状態から、外に出される状態に変化する事象が概略的に表されている。携帯電話は、

ズボンのポケットの中、すなわち包含状態では上手く使用することができない。そこで、我々は容器（ズボンの中）から取り出して使用することを、経験から理解しているのである。このような身体経験は、“出”の次の用法に動機づけられる。

iii. 非使用状態→使用状態

- (47) a. 一会儿就把几张桌子抹出来了。(《汉语动词用法词典》p.246)
 (しばらくすると、いくつかの机を拭き終えた。)(丸尾誠 (2014b : 64))
- b. 你把鸡蛋搅出来。(《汉语动词用法词典》p.198)
 (卵を混ぜてください。)(丸尾誠 (2014b : 64))

ここで、5.4.1.1節における“進”の分析と併せて、「容器に内容物が収まる」という事象を、我々がどのように解釈しているのかを、まとめておきたい。

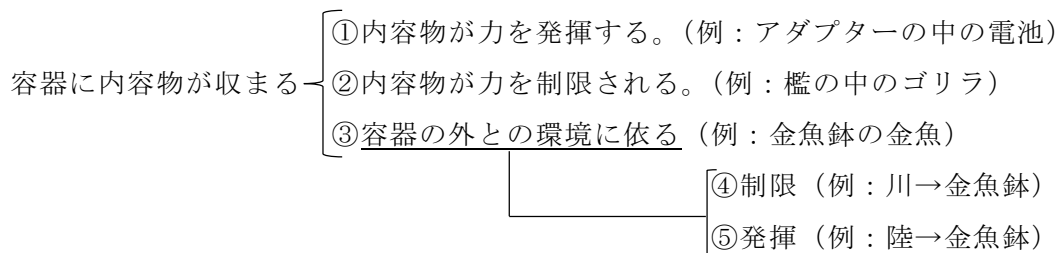


図.15 「容器に内容物が収まる」という事象の解釈

まず、「容器に内容物が収まる」という事象は、バッテリーケースの中の電池のように、「内容物が力を発揮する」場合と、檻の中のゴリラのように「内容物が力を制限される場合」、また容器の外との環境に依る場合の3通りに解釈される。例えば、「金魚鉢の金魚」は、外との環境によって「制限」か「発揮」にわかれる。金魚鉢の外が、川のように水がある広い環境の場合、「金魚は力が制限された」と解釈し、金魚鉢の外が、陸地のように水のない環境の場合、「金魚は力を発揮した」と解釈可能である。①は“進”の「効果の発揮」(5.4.1.1節)、②は、“出”の「使用状態への変化」へと動機づけられる。

以上、“出”のメタファー義を次にまとめる。

	意味	動機づけ
i	(隠れた状態から) 出現する	「包含は対象を見えなくする」
ii	(何もない状態から) 出現・発生・生産	希薄化
iii	(知覚や能力への) 出現	希薄化・写像
iv	(使える状態への) 変化	「包含は対象を不自由にする」

表.1 “出” のメタファー義とその動機づけ

6.4.1.2 イメージ・スキーマ変換

前節では、メタファーによる拡張義を述べてきたが、本節ではイメージに操作を換えて意味を拡張する、イメージスキーマ変換による拡張義を述べる。次例と概略図を共に参照されたい。

- (48) a. 他一面说着, **突**出鼓溜溜的眼珠子。(刘月华主编 (1998 : 228))
 (彼は話をしながら、まるまるとなった目玉を突き出した。)
- b. 背上**鼓**出一个大包。(刘月华主编 (1998 : 228)).
 (背中から大きなコブが膨れ出た。)

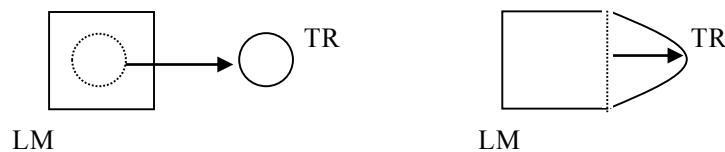


図.16 “出” のイメージ・スキーマ変換

上記図.16 (a) のように、物理的移動では、tr と lm が非同一个个体として存在しているが、図.16 (b) を見てもわかるように、変換後は、両者を同一个个体として捉え、lm が変化前の状態、tr が可変部となる。よって、図.16 (b) は膨張を表す拡張義として獲得している。

6.4.2 意味上の相性について

最後に残された問題は、6.2.2 節で述べた意味上の相性についてである。一体、どのような動詞が、“出” と組み合わせやすいのだろうか。意味上の相性について、次の二つにわけることができる。1 つは、“出” (出現) の意味近いもの、そしてもう一つは、広く「身体」と関わる動詞である。これは、「身体は最も身近な容器である²」という仮

² 山梨正明 (2012 : 15) では、容器のイメージ・スキーマが、円形で描かれるのが自然と感じるのは、われわれが母なる女性の体内から生まれてくるという事実が関係しているかもしれない、と述べられている。

説から導き出せる。これらの動詞を統合して、「身体関連動詞」という。

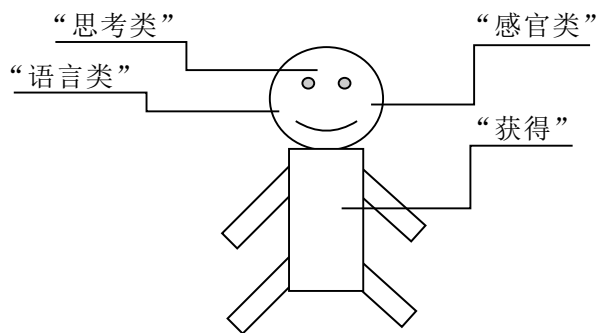


図.17 身体とは容器である

- (49) a. 【“思考”】 绞尽脑汁，终于悟出了一个道理。(刘月华主编 (1998 : 224))
 (知恵を絞って、とうとう道理を悟った。)
- b. 【“感官”】 她清楚地看出，那是余永泽！(刘月华主编 (1998 : 227))
 (あれは余永沢であると、彼女ははっきりとわかった。)
- c. 【“语言”】 你总该说出个理由啊，你！(刘月华主编 (1998 : 225))
 (どうであれ、理由を言わなくてはならないだろう。)
- d. 【“获得”】 我心直口快，学不出一点文绉绉的秀气样子。
 (刘月华主编 (1998 : 228))
 (私は素直な性格なので、文人のまねはとてもできない。)

以上の考察から、“出”に組み合わせる動詞は、次のようにヒエラルキーを構成していることがわかる。

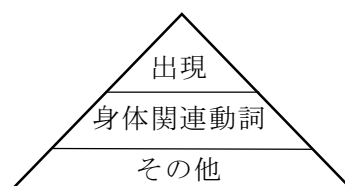


図.18 出現・発生を表す“出”に組み合わせり易い動詞

6.5 おわりに

6.3 節と 6.4 節の内容を次にまとめ、本章の終わりにかえる。

まず、“出”フレーズに前接する動詞の意味役割は、次のように分類される。

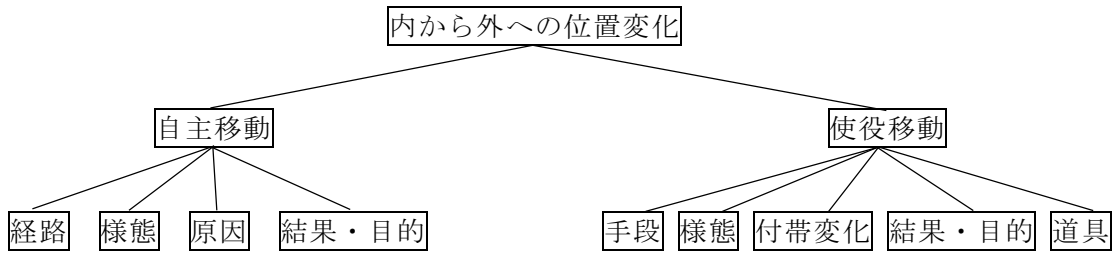


図.19 “出”と組み合わせる動詞の意味役割 (再掲)

次に、“出”の意味拡張と拡張義は次のようにまとめられる。

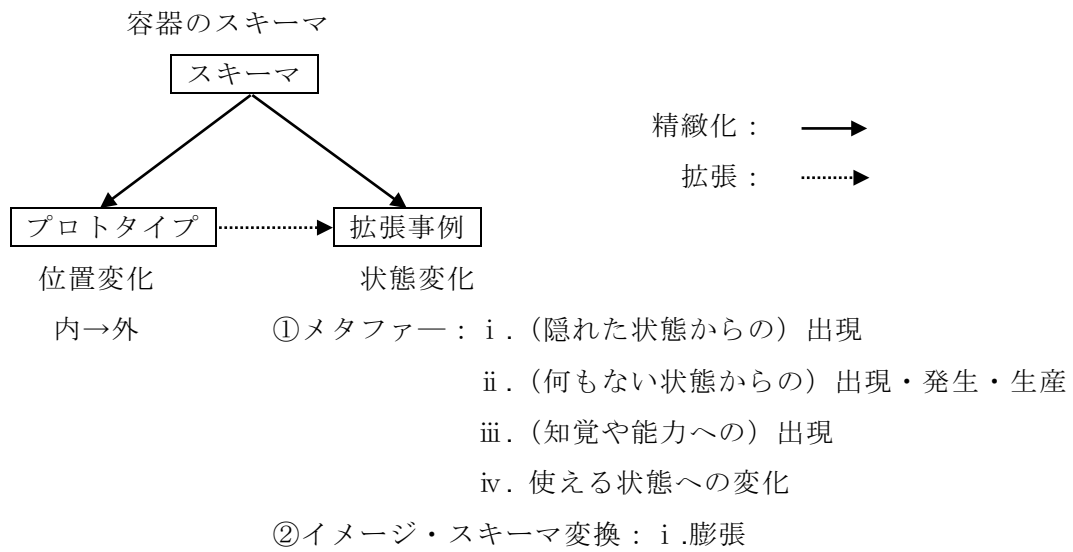


図.20 “出”の意味拡張

第7章 “进”と“出”の非対称性について

第Ⅲ部の最終章である本章では、“进”／“出”フレーズの非対称性をまとめ、分析する。

7. はじめに

論の進め方として、7.1節で“进”／“出”フレーズに見られる非対称性を挙げ、7.2節で「連続性」という経験のスキーマを提案、それに基づき分析をし、7.3節で全体のまとめを述べる。

7.1 言語事実－“进”と“出”の非対称性－

本節では“进”／“出”フレーズに見られる非対称性を挙げる。

7.1.1 非対称①：“进”は起点と共起不可である

第1章ですでに挙げたが、まず1つ目に、“进”と組み合わせる場所は、起点読みができないことがあげられる。次例(1)(2)を続けて参照されたい。

- (1) a. 中間経路：正经过大门口。一位警察跑进门来，招呼大家。（《龙须沟》）
（正門を通りすぎたところ、ある警官が駆け込んでいって、みんなを呼びかけた。）
- b. 着点：一八八九号的车子开到了，藤椅子也上了岸，吴老太爷也被扶进汽车里坐定了。（《子夜》）
（1889号の車が到着し、座椅子も陸揚げされ、呉お爺さんも支えられながら車の中に入っていき、腰をおろした。）
- c. 起点：她走进教室来了。→“教室”を起点と解釈することは不可能。
（彼女は教室に入ってきた。）
- (2) a. 中間経路：我什么话也不说，微笑着，出了木匠的大门，空手回家了。
（《我读一本小书同时又读一本大书》）
（私は何もいわずに、微笑みながら大工さんの門を出て、手ぶらで家に帰った。）
- b. 着点：休息一会，三个人就跑出门外，商量怎样度过这午后的剩余的辰光。（《三人行》）
（少し休んで、三人はすぐ門の外に出て、この午後の残りの時間をどのように過ごそうかと話しあった。）
- c. 起点：走出院子，他叹口气说：“哭三年了，眼睛都哭瞎了。”

（《暴风骤雨》）

（庭を出て、彼はため息をつき、「三年も泣き続けて、目がダメになった。」と言った）

(1c) からわかるように、“進”と共起する場所を起点と解釈することはできないので、“進”は起点と共起不可である。反対に“出”は、起点、着点、中間経路と共起可能である。

7.1.2 非対称②：“出”は“里”と共起不可である

続いて、次例を参照されたい。

(3) a.他跑进（教室／教室里）来。

（彼は（教室／教室の中に）に駆けこんできた。）

b.他跑出了（教室／*教室里）。

（彼は（教室／？教室の中）を駆け出した。）

c.他从（教室／教室里）跑出来。

（彼は（教室／教室の中）から駆け出てきた。）

上例のように、“跑进”は“处所+里”と共起可能であるが、“跑出”は不可能である。起点は、場所を介詞“从”によって前置させることによって、“里”と共起可能となる。

7.1.3 非対称③：“出”は“进”と比して有標である

“进”の動詞に、着点が含まれる場合、“进+場所”における“进”は省略可能である。次例を参照されたい。

(4) a.不会游泳的人最怕掉进水里。然而，在红海里人可以躺在水面上不会沉下去。掉进水里 → 掉水里（《百度作业帮》）

（泳げない人は最も水に落ちることを最も怖がる。しかし、紅海では水面に横になっても沈むことはない。）

b.过了一会儿，济南站到了，我起身将书放进包里。（《坐车艳遇》）

放进包里 → 放包里

（しばらくして、済南駅についた。私は体を起こして、本をバッグに

入れた。)

- (5) a. 她走进[大厅], 一眼望过满厅的男男女女, 所有的目光都转向她。

走进[大厅] → *走[大厅] (《日出》)

(彼女はホールに入ると、ホールを埋め尽くす男女を眺めた。すると全ての視線は彼女に向けられた。)

- b. 我使劲挣脱他的手, 将拖把扛进了[李秀英的房间]。(《在细雨中呼喊》)

扛进了[李秀英的房间] → *扛了[李秀英的房间]

(私は力をこめて彼の手振り離し、モップを李秀英の部屋へ担ぎ入れた。)

(4) の動詞“放”“掉”は着点を含むので“进”は省略可能であるが、“走”や“扛”は移動の様態を表すので、着点との共起が不可能である。次に、“出”フレーズの例を見てみる。次例を参照されたい。

- (6) a 他急得心里直冒火, 进城买化肥时, 见县城一公厕里粪便满得溢出了[槽],

溢出了[槽] → *溢了[槽]

(《人民日报》)

(彼は焦って心に火が付いたようだった。町に行って化学肥料を買う時に、町のトイレには糞がいっぱいカメから溢れていた。)

- b. 我有些犹豫, 但还是伸出手去, 这把剑没有我想象中的沉, 反倒挺轻巧的, 我缓缓的把剑拔出了[剑鞘]。(《古剑璇玑》)

拔出了[剑鞘] → *拔了[剑鞘]

(<http://m.sangwu123.com/Html/5/5149/2339650.html>)

(私は少し戸惑ったが、やはり手を伸ばした。この剣は思っているほど重くはなく、むしろ軽かった。私はゆっくりと剣を鞘から抜いた。)

- (7) a. 两个人说着话走出了[站台], 赵子曰向前抢了几步, (《赵子曰》)

走出了[站台] → *走了[站台]

(二人は、歩きながらホームを出た。趙子曰は前に数歩踏み出した。)

- b. 他短粗的手指松开, 温热的硬币滚出了[他的手掌]。(《龙枪短篇故事集》)

滚出了[他的手掌] → *滚了[他的手掌]

(彼の短く太い指が開いて、温まった硬貨が彼の手のひらから転がりだした。)

(6) の動詞“溢”“拔”には、起点が含意されるが、“出”を省略することはできない、(7) のように、様態を表す動詞“走”“滚”も同様である。

7.1.4 非対称④：“出”はパラフレーズに豊富である

第5章と第6章でのべたが、“出”フレーズは、“進”フレーズに比して、パラフレーズに豊富である。次のまとめを参照されたい。

“進”フレーズ	“出”フレーズ
【自主移動】	【自主移動】
i. NP+V 進+LP	i. NP+从 LP+ (V) 出
【使役移動】	ii. NP+ (V) 出+LP
i. 把 NP+VP 進+LP	【使役移動】
	i. 从 LP+NP+V 出
	ii. 把 NP+从 LP+V 出
	iii. 把 LP+的+NP+V 出
	iv. 从 LP+把 NP+V 出
	v. V 出+LP+的+NP

このように、“出”フレーズは、“進”フレーズと比してパラフレーズに豊富であることがわかる。

7.1.5 非対称⑤：“出”は派生義に豊富である

“進”と比して、“出”はメタファー義に豊富である。“出”が表す“从无到有”“有隐蔽到显露”といったメタファー義 (cf. 刘月华主编 (1998 : 231, 248-250)) は、次のように細分化可能である。次例を参照されたい。

(8) ①出ず：a. 这辆车出多少钱买的？ (吕叔湘主编 (1999 : 122))

(この車はいくら出して買ったんですか?)

(牛島・菱沼監訳 (2003 : 59))

b. 他要把这一肚子心事，告诉萧队长，告诉小王，他们会安慰他，

替他出主意，叫他搬出来，另外找个地方住。(《暴风骤雨》)

(彼がこの腹にたまった悩み事を蕭隊長と王さんに言ったら、彼らは彼をなぐさめ、アイデアを出し、彼はいまいる場所から違う場所に引っ越させた。)

②出現：a. 手上打出一个小血泡。(《中国语补语例解》p.122))

(叩いたせいで、手に血豆ができた。)

b. 不到晌午，前面显出一片黑糊糊的一片房屋和树木，那就是县城。

(《暴风骤雨》)

(午後になる前に、黒々とした家屋と樹木が前に現れた。あれが
県城だ。)

③生産：a. 这种产品出多了推销不出去。(《中国语补语例解》p.79)

(このような製品は、多く生産したら売り出せなくなる。)

b. “随便干啥，都不能一下就能干好的。不是一锹就挖出个井来，
得慢慢地挖，不能心急。”(《暴风骤雨》)

(気ままに何をやったとしても、すぐにちゃんとできるような
ものは何もない。土を掘ればすぐ井戸を作れるわけではない
のと同じだ。ゆっくりと掘る必要がある、焦ってはいけな
い。)

④獲得：a. 练出一身肌肉。(《中国语补语例解》p.302)

(鍛えて、体中に筋肉がついた。)

b. 这首诗他只能背出一句。(《中国语补语例解》p.25)

(彼はこの詩を一文しか覚えることができなかった。)

⑤状態変化：a. 洗出几件衬衫。(《中国语补语例解》p.493)

(シャツを何着か洗いおえた。)

b. 两个锅都擦出来了。(《中国语补语例解》p.45)

(2つの鍋は全て拭きおえた。)

以上のように、“出”の意味は5種に細分化される。

7.2 分析—連続性—

前節では、“進”／“出”フレーズに見られる非対称性を述べた。本節では、これら
非対称性は、連続性という経験的なスキーマに動機づけられることを述べる。

7.2.1 連続性とは—肯定・否定を例に—

本研究は、連続性を次のように定義づける。

- (9) 連続性とは、二つの事象 A、B が、単方向的な依存関係にある複合的な事象
タイプである。具体的には、事象 B の成立には、事象 A を前提とし、事象 B
は事象 A を喚起することを指す。

(9) を、肯定と否定を例に検証してみる。沈家煊 (1998) は、肯定と否定が伝達す
る情報の違いを次のように述べている。次の (10) を参照されたい。

(10) a.肯定句提供的信息：在听者不知道 P 的情况下告诉他 P。

(肯定文の伝達する情報：聞き手が P を知らない状況のもと、聞き手に P を伝える。)

b.否定句提供的信息：在听者可能相信 P 或熟悉 P 的情况下否认或反驳 P。

(否定文の伝達する情報：聞き手がおそらく P を信じている、若しくはよく知っている状況のもと、P を認めない、若しくは反駁をする。)

(沈家煊 (1998 : 44¹))

(10) から、肯定は前提を必要としないが、否定は聞き手が P を知っているという肯定事象を前提とし、否定の伝達には、肯定事象が喚起されることがわかる。よって、両者には連続性があるといえる。また、(10) で挙げた肯定と否定の連続性を、我々が生得的に理解しているとは考えづらい。野矢茂樹 (2006) は、否定について次のように述べている。次の引用と、図 1 を参照されたい。

(11) たとえば、私の机の上にはなぜか金塊がありません。(中略)「金塊がないぞ」とか「リカちゃん人形がないじゃないか」といった訴えは、そういう関心があるひとだけが発するものです。「机の上に金塊がある」という肯定形のことがらに関心があるひとだけが、「机の上に金塊がない」という否定形の主張を口にします。(cf.野矢茂樹 (2006 : 36-37))

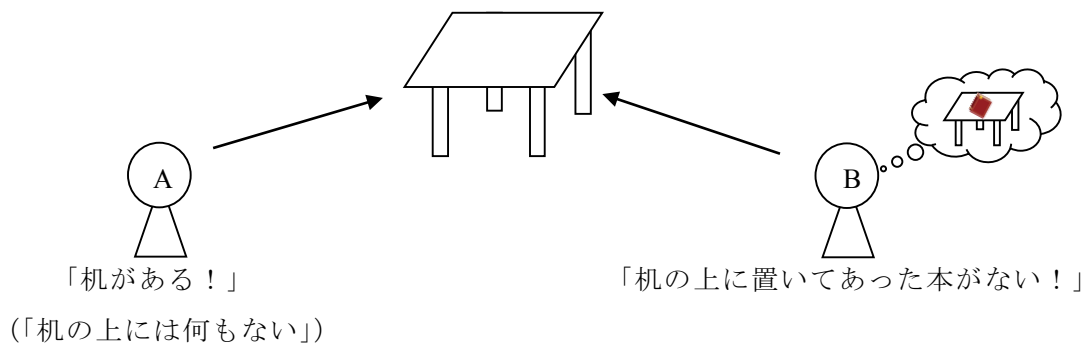


図.1 肯定と否定

図.1 の机に本が置いてあったことを A は知らないが、B は知っている。よって、A は「机がある（もしくは、机の上には何もない）」、B は「机の上の本がない！」と否定表現で発話するのである。つまり、肯定は前提を必要とせず、否定は、「机の上に本がある」という肯定事象を前提とし、喚起することを、我々は経験から知っていること

¹ 括弧内の日本語訳は拙訳。

になる。

7.2.2 内外への位置変化の連続性に

連続性は、内外への位置変化にも類推的に当てはめることができる。第1章では、次の図.2のように、内外への位置変化の対称的基盤を図示した。

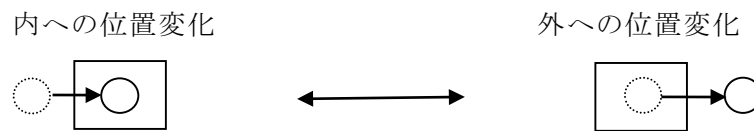


図.2 内外への位置変化（再掲）

図.2は、内外への位置変化を対称的に図示したが、経験的スキーマに照らし合わせると、内外への位置変化は、次の図.3のように図示可能である。

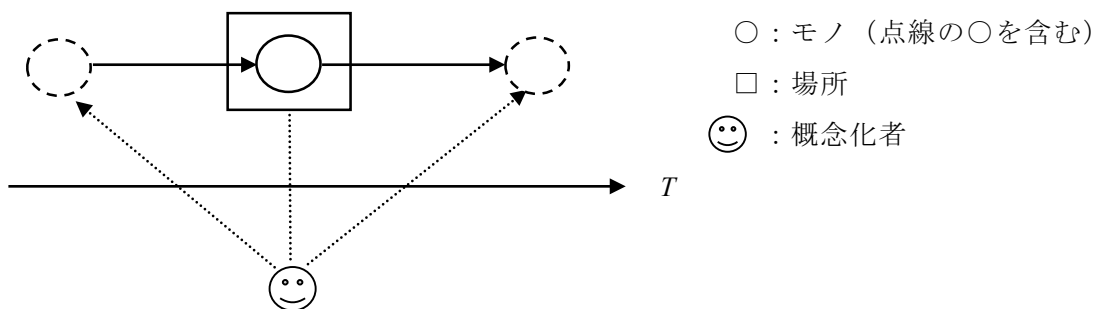


図.3 内外への位置変化の連続性

図.3は3.1.2節で挙げた地の類型のうちの一つと同じである。該当する図と例を次に再掲する。

- (12) 这一年已经是我第七次自己坐火车了，我每次都是11点50上车 7点多下车。《《微博》》
 (今年で、一人で列車に乗るのはもう七回目だ。毎回私は11時50分に乗って、7時すぎに降りる。)

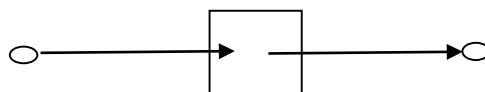


図.4 地の類型 e. (再掲)

「電車に乗り降りする」という行為は、まず「電車に乗る」という行為が先にあり、そのあと「降りる」という行為が起こる。その逆は起こりづらい。他にもいくつか事例を示したい。例えば、学生が授業で教室に出入りする場合、「教室に入る」という外から内への位置変化が先に生起する。授業が終わった後は、教室を出るという内から外への位置変化が生起する。他にも、財布をバッグから出し入れする場合、「財布を入れる」という外から内への位置変化が先に生起し、その後「財布を出す」という内から外への位置変化が生起する。このことを次のように例で示す。

- (13) a. 教室から出るためには、先に教室に入らなければならない。
b.?教室に入るためには、先に教室から出なくてはならない。
- (14) a. 財布をバッグから出すためには、先に財布をバッグに入れなければならない。
b.?財布をバッグに入れるために、先に財布をバッグから出さなければならない。

認知言語学では、事象（正確には、事象のタイプ（event-type））は、何度も経験することにより、定着（entrenched）されると考えられている（Langacker（1987a：100²））。（13b）（14b）を不自然に感じるのは、「先に出してから入れる（出てから入る）」という経験が少なく、定着されていないからである³。つまり、「内外への位置変化は、内への位置変化が、外への位置変化に先立って生起する」、すなわち「内外への位置変化の連続性」という経験の繰り返しが、結果的に“進”と“出”の非対称性として表象しているといえる。

7.2.3 外から内への位置変化は内から外への位置変化に先行する

本節では、前節で述べた連続性から、7.1 節で挙げた連続性を分析する。まず、前節で述べた内外の位置変化における連続性を次にまとめる。

- (15) a 内から外への位置変化は、外から内への位置変化に先行する。
b.内から外への位置変化は、外から内への位置変化を喚起する。

² このことについて、ラネカーは次のように述べている。I will use the term **event** to designate a cognitive occurrence of any degree of complexity. Be it the firing of a single neuron or a massive happening of intricate structure and large-scale architecture. We can assume that the occurrence of any such event leaves some kind of neurochemical trace that facilitates recurrence. If the event fails to recur, its trace decays; recurrence has a progressive reinforcing effect, however, so an event (or more properly, **eventtype**) becomes more and more deeply entrenched through continued repetition. (Langacker (1987a:100))

³ もし出すのが先で、入れるのが後ならば、それは入れるというよりも、「戻す」と言えるだろう。

(15a) から、「無標」と「有標」の関係が説明可能である。次の図を参照されたい。

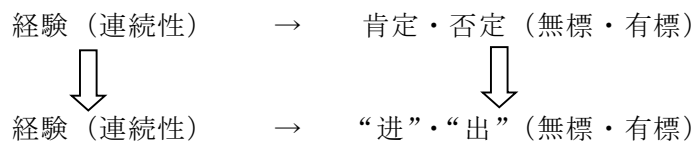


図.5 肯定・否定と“進”・“出”

7.2.1 節で述べたように、我々は、肯定・否定に連続性、すなわち肯定は否定に依存しないが、否定は肯定に依存することを経験から理解している。そして、連続性はコンピュータマーカの必要有無（無標・有標）に表象している。これは、類推的に“進”フレーズと“出”フレーズにも当てはまり、非対称性③は次のように説明が可能である。

(16) “進”フレーズで表される位置変化と“出”フレーズで表される位置変化には、肯定と否定と同様に連続性があることから、無標・有標が文法現象として表象する。よって、“出”フレーズは、“進”フレーズに比して有標である。

さらに、外から内への位置変化における場所と、内から外への位置変化における場所は、連続性があることから、情報構造にも違いが見られる。前者は新情報であり、後者は旧情報である。次の図を参照されたい。

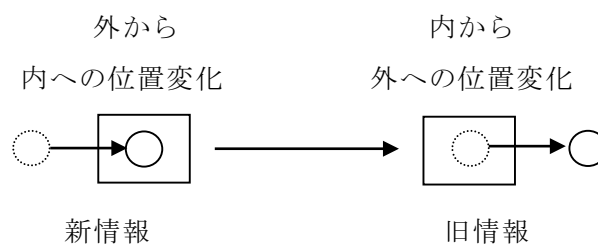


図.6 “進”・“出”と新情報・旧情報

つまり、“出”フレーズがパラフレーズに豊富であるのは、内から外への位置変化における場所が旧情報であることによる。1.2.2.2 節で触れた連語論の指摘、すなわち「とりはずしのむすびつき」の場所が省略されるのもまた、内から外への位置変化にとって、場所が旧情報であることによる。反対に、外から内への位置変化における場所は、新情報であるため、“進”フレーズにおける場所は、動詞に前置することが不可能であり、語順に制約がかかるのである。

また、旧情報である場所は、意味拡張にもつながる。6.4節では、背景化し、認知的際立ちが弱まることによって意味拡張が起こる「希薄化」について述べたが、希薄化が起こるのは、外への位置変化にとって場所は旧情報であるためである。反対に、内への位置変化にとって、場所は新情報であるため、認知的際立ちは弱まることはない。以上の分析から、非対称性④、⑤は、次のように説明が可能である。

- (17) “出”フレーズがパラフレーズと派生義に豊富であるのは、内から外への位置変化にとって、場所は旧情報であることに起因する。

7.2.4 内から外への位置変化は起点を喚起する

前節で述べたように、外から内への位置変化は、内から外への位置変化に先行する。これは、内から外への位置変化は、起点が喚起されることを意味する。一方で、外から内への位置変化は、前提を必要としないため、起点は喚起されない。これが、“進”が起点と共起することができない理由である。また、内から外への位置変化にとって、起点は喚起されるのみであり、起点内部への関心は薄い。1.2.2.2節における池上嘉彦（1981）の指摘や、ラクスタの指摘からもわかるように、ヒトの意識は元來着点に向けられている。経路・方向性を表す動詞（補語）の多くが着点と共起可能であるが、起点とは共起されないことがその傍証である。次例を参照されたい。

〔着点共起〕

- (18) a. “上”：我们慢慢走上楼。（我々はゆっくりと上に上がった。）
 b. “下”：枪声一响，她第一个跳下水。
 （銃声がなり、彼女は真っ先に水に飛び込んだ。）
 c. “进”：学生们排着队走进教室去。
 （学生たちは列を作りながら教室に入っていった。）
 d. “出”：他一脚把球踢出门外。
 （彼はヒト蹴りで、ボールを門の外の蹴りやった。）
 e. “回”：回家去。（家に帰る。）
 f. “到”：她暑假寒假回到家乡。（彼女は夏休みと冬休みは故郷に帰る。）
 （刘月华主编（1998：9-10⁴））
 g. “来”：老郑明天来北京。（吕叔湘主编（1998：45））
 （鄭さんは明日北京に来る。）（牛島・菱沼監訳（2003：235））
 h. “去”：我去车站接人。（吕叔湘主编（1998：455））

⁴ 括弧内の日本語訳は拙訳

(駅に出迎えに行く。)(牛島・菱沼監訳(2003:321))

[起点共起]

(19) a. “下”: 小猫敏捷地跳下树。(子猫は素早く木から降りた。)

b. “出”: 客人们陆续走出房间。(客は立て続けに部屋を出た。)

(刘月华主编(1998:9-10⁵))

以上の考察から、非対称性①・②は次のように説明が可能である。

(20) a. 外から内への位置変化、すなわち“进”フレーズで表す移動では、起点は喚起されない。よって、“进”フレーズは起点と共起不可である。

b. 内から外への位置変化、すなわち“出”フレーズで表す移動にとって、起点は喚起されるが、内部までは焦点化されない。よって、“出”は“里”と共起不可である。

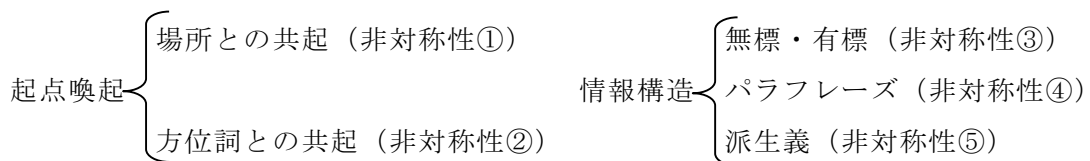
7.3 おわりに

本研究の要点を次にまとめて、おわりにかえる。

(21) a. 「連続性」は、“进”フレーズで表す位置変化と、“出”フレーズで表す位置変化では、前者が先立って生起するが、逆はその限りではないという、我々の経験のパターンに起因する。つまり、言語の非対称性は、経験の非対称性に動機づけられる。

b. 「連続性」は、「起点喚起」と「情報構造」に関与する。

(21b) については次にまとめる。



このように、連続性は起点喚起と情報構造に関与し、それが内外への変化事象の非対称性へと表象していることがわかる。

⁵ 括弧内の日本語訳は拙訳

第IV部：終論

第IV部は、終章のみの構成となる。ここでは、本研究全体から要点をピックアップし、簡潔に述べる。こうすることで、本研究が一体何を目標にし、何を分析対象とし、何を解決し、何を結論としたのか、本研究の全体像及び一連の流れを今一度確認することが可能になる。最後に、残された課題及び今後の展望を述べる。

終章：全体のまとめと今後の展望

本研究は、次のように段階を踏んだ構成を立てた。1.5節で挙げた本研究の構成を次に再掲する。

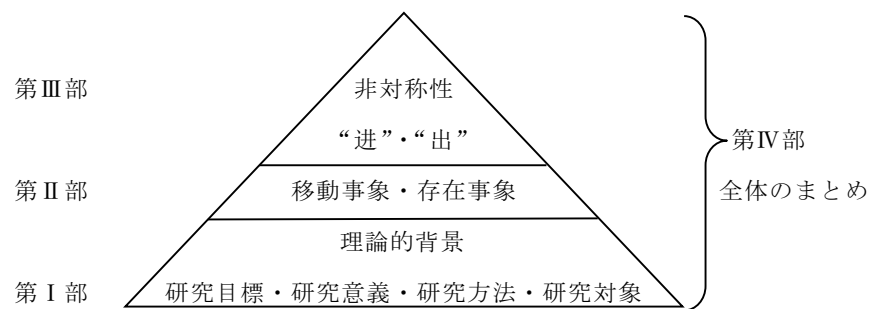


図.1 本研究の構成

各部各章の内容を、次に簡潔にまとめる。

8.1 第I部のまとめ

第I部では、分析の足掛かりとして、本研究の大枠と認知言語学の理論的背景を述べた。第1章は、研究目標、研究意義、研究方法、研究対象について述べ、第2章では認知言語学の理論仮構物について述べた。主な内容を次にまとめる。

8.1.1 第1章のまとめ

第1章の要点は、次のようにまとめられる。

①研究目標：

“进”／“出”フレーズの非対称性を記述し、それらを認知言語学の観点から説明することが、本研究の最終的な目標であり、その過程で移動事象と存在事象についても、原理的な説明を与える。

②研究意義：

空間移動の非対称性は、汎言語的に見られる現象である。よって、“进”／“出”フ

フレーズの非対称性を記述し、それらをモデル化することに研究意義があるといえる。

③研究方法：

本研究の研究方法は認知言語学である。認知言語学を用いる理由は、非対称性と認知言語学の親和性の高さにある。非対称性は、言語をミクロ的にみる視点である。認知言語学もまた、文法を「用法の体系」という観点から、データを渉猟する。また、発達心理学からの証左から、空間移動の非対称性は、非言語レベル（幼児の注視時間）においても起こることが指摘されている。よって、認知言語学は本研究の研究手法として適切であるといえる。

④認知言語学の分析妥当性：

臆見であるが、認知言語学の最大の強みは理論仮構物に、心理的实在性が認められる点にある。心理的实在性とは、認知能力と同義であり、認知心理学や心理学といった隣接分野からの下支えによって証左を得た認知能力に限らず、環境・社会との相互作用、五感、空間認知、運動感覚をはじめとする、幅広い身体的な経験を指す（cf.山梨正明（2000：8））。これは、「なぜそのような理論が存在するのか」という理論の存在理由を、経験的に還元されない生成文法とは好対照を成す。

⑤研究対象：

“進”／“出”フレーズとその非対称性、移動事象、存在事象を研究対象とした。

8.1.2 第2章のまとめ

第2章では、認知言語学における理論仮構物を詳述した。認知言語学における理論仮構物は、心理的实在性が認められるという点で、理論として自然である。本研究は、ヒトの解釈の仕方として「ベース・プロファイル」「心的走査」「パースペクティブ」を、他にも、スキーマ化を分析手段として用いた。それぞれを次のようにまとめる。

①ベース・プロファイル：プロファイルとは、焦点化であり、ベースとは、プロファイルの背景的要素である。ベース・プロファイルは、概念を獲得するだけでなく、文法範疇を概念的に名付ける上でも有効であるとされている。

②心的走査：心的走査とは、概念化者が静的な対象を心的に辿る認知能力である。また、認知的際立ちの高い参照点を通して、対象に辿り着く心的走査を、参照点能力という。

③パースペクティブ：パースペクティブとは、事象を異なる位置から観察することによって、概念を獲得する認知プロセスである。

④スキーマ化（抽象化）：スキーマ化とは、経験を体制化し、知識として得る認知プロセスである。イメージ・スキーマとは、スキーマを、アナログ的、非命題的に図式化したものである。スキーマは、言語獲得、意味拡張を論じる上で非常に重要である。

8.2 第Ⅱ部のまとめ

第Ⅱ部では、移動事象と存在事象を分析した。

8.2.1 第3章のまとめ

第3章は、主に言語類型論における研究成果と認知言語学に基づき、現代中国語における移動事象を分析した。第3章の要点は、次のようにまとめられる。

- ①中国語は、同等枠づけ言語、乃至は衛星枠づけ言語に分類される。
- ②移動表現の動詞（付随要素）に包入される意味役割の多様性は、ベース・プロファイルによって説明可能である。

8.2.2 第4章のまとめ

第4章は、現代中国語の静態存在文、動態存在文、出現文、消失文（「存現文」と総称）を認知言語学の観点から分析した。第4章の要点は、次のようにまとめられる。

- ①参照点能力によって、存現文は「領域を介し、領域と関連する不特定のモノを提示するために言語に表象した、文法範疇の一つである」と定義づけられる。
- ②ベース・プロファイルによって、存現文は「領域とモノの関係を、時間と共にプロファイルし、概念化した文法範疇である」と定義づけられる。
- ③また、プロセスの類型、プロファイル、パースペクティブによって、存現文が体系を持つ動機づけを説明可能である。

8.3 第Ⅲ部のまとめ

第Ⅲ部では、“進”／“出”フレーズを対象に、いくつか統語的特徴を挙げ、それから刘月华主编（1998）を検討し、不足点を明らかにしたうえで、理論的観点から“進”／“出”フレーズを再検討した。刘月华主编（1998）と本研究の差異は、次のようにまとめられる。

	刘月华主编（1998）	本研究
動詞分類	意味からの分類	意味役割からの分類
“進／出”拡張義	内省による分類	認知意味論から拡張義を分析

表 1.刘月华主编（1998）と本研究の比較

刘月华主编（1998）における不足点は次の2点である。

- ①方向補語に前置する動詞（付随要素）の意味役割
- ②“進／出”の拡張義の動機づけについて。

8.3.1 第5章のまとめ

第5章の要点は、次のようにまとめられる。

- ① “進” を使役移動義として用いる場合、“進” はモノ目的語と場所目的語と組み合わせることができない。
- ② “V 進+場所” 構造において、V が着点を包入する場合、“進” は省略可能である。
- ③ 位置変化を表す“進” フレーズのパラフレーズは、自主移動が1種、使役移動構文もまた1種である。
- ④ “進” フレーズの動詞に包入される意味役割は、自主移動が5つ、使役移動が5つである。
- ⑤ “進” の拡張義は、「メタファー」と「イメージ・スキーマ変換」に大別され、メタファーは「心理的空間への受け入れ」「社会的空間への受け入れ」「動作の効果の発揮」に、イメージ・スキーマ変換は「凹み」にわけられる。

8.3.2 第6章のまとめ

第6章の要点は、次のようにまとめられる。

- ① “出” を使役移動義として用いる場合、“出” はモノ目的語と場所目的語と組み合わせることができない。
- ② “V 出+場所” 構造において、“出” は省略不可能である。
- ③ 位置変化を表す“出” フレーズのパラフレーズは、自主移動が2種、使役移動構文は5種である。
- ④ “出” フレーズの動詞に包入される意味役割は、自主移動が4つ、使役移動が5つである。
- ⑤ “出” の拡張義もまた、「メタファー」と「イメージ・スキーマ変換」に大別され、メタファーは「(隠れた状態からの)出現」「(何も状態からの)出現」「(感覚への)出現」「(能力への)出現」「使える状態への変化」に、イメージ・スキーマ変換は「膨張」にわけられる。

8.3.2 第7章のまとめ

第7章の要点は、次のようにまとめられる。

まず、本研究で挙げた“進” / “出” フレーズの非対称性は次の5つである。

- ① 非対称①：“進” は起点と共起不可である。
- ② 非対称②：“出” は“里” と共起不可である。
- ③ 非対称③：“出” は“進” と比して有標である。
- ④ “出” はパラフレーズに豊富である。
- ⑤ “出” は派生義に豊富である。

これら非対称性を、「連続性」という経験のスキーマから説明した。詳細を簡潔に次に記す。

- ⑥ジョンソンは、包含に関わる多くの身体経験への例を提示した。本研究は、包含に関わる位置変化には、時間的な前後関係が存在することに着目した。つまり、内への位置変化は、外への位置変化に先立って生起し、その逆は成り立ちにくい。言語の非対称とは、経験の非対称性である。
- ⑦連続性によって読み取れる一つ目の特徴は、時間的な前後関係である。内への位置変化は外への位置変化に先立って生起し、それが、パラフレーズや派生義に表象する。
- ⑧連続性によって読み取れるもう一つの特徴は、起点喚起である。それが、“里”や起点との共起可能へと表象している。

8.4 全体のまとめと今後の展望

8.4.1 全体のまとめ

本研究は、次の4点において独創性があるといえる。

- ①“進”／“出”フレーズの非対称性を記述し、その原因を「連続性」という経験のスキーマに動機づけて説明した点（第1章）。
- ②“進”と“出”の拡張義の動機づけを、認知意味論の観点から説明した点（第5章、第6章）。
- ③移動表現の動詞（付随要素）に包入される意味役割を、言語類型論の研究成果に基づいて記述し、認知言語学の観点から包入される動機づけについて説明した点（第3章、第5章、第6章）。
- ④存現文を、認知言語学の観点から概念的に定義づけ、体系の存在を説明した点（第4章）。

8.4.2 今後の課題と展望

最後に、今後の課題と展望を述べる。本文中の過誤を除き、現時点で、筆者にわかっている本研究の不足点は、「数量化と計算の意識」である。黒田航は、認知言語学全体の不足点について、次のように述べている。

- (1) 認知言語学に欠けているのは、数量化と計算の意識である。使用基盤を前面に押し出すアプローチが、規模の大きなコーパス (corpus) を定量的に分析しないのは、明らかに自己矛盾である」と述べている。

(黒田航 (2003 : 85))

本研究を例にとっていうと、次の内容に数量的な研究を試みる事が可能である。

- (2) a. 中国語の移動表現の動詞に包入される意味役割の計量的な差異 (3.2.4 節)
- b. “进” / “出” フレーズに包入される意味役割の計量的な差異 (5.3, 6.3 節)
- c. “进” / “出” フレーズの計量的な差異から見る非対称性 (7.1 節)
- d. “进” / “出” の各拡張義に見られる計量的な差異 (5.4.1, 6.4.1 節)
- e. 存現文の体系に見られる計量的な差異 (4.3 節)

以上の5点を明らかにした上で、なぜこのような差異が生じるのか、という点を再び認知言語学の観点から分析することもまた今後の課題とし、本研究の締めくくりとしたい。

参考文献（アルファベット順）

日本語

- 相原茂・石田知子・戸沼市子（1996）『why? にこたえるはじめての中国語文法書』
同学社
- 荒川清秀（2000）「“V在~”と“在~V”の違いは？」『中国語教室 Q&A100』
———（2003）『一步進んだ中国語文法』大修館書店
———（2006）「“坐进来”と“送回去” — “坐”“站”“躺” + 方向補語にみら
れる三つのタイプ」『中国語の補語』白帝社
———（2015）『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社
- 箱田祐司（2010）「長期記憶」『認知心理学』有斐閣
- 浜村良久（監）（2007）『面白いほどよくわかる心理学のすべて』日本文芸社
- 久能徹・松本桂樹（2000）『心理学入門』ナツメ社
- 堀江薫・プラシャント・パルデシ（2009）『言語のタイポロジー—認知類型論の
アプローチ』研究社
- 深田智・仲本康一郎（2008）『〈講座 認知言語学のフロンティア③〉概念化と意味
の世界 - 認知意味論のアプローチ - 』研究社
- 深田智（2013）「絵本に見られる移動表現—言語習得との関連で」『言語の獲得と
身体性—山梨正明教授退官記念論文集』ひつじ書房
- 福井直樹（2012）『新・自然科学としての言語学—生成文法とは何か』筑摩書房
- 言語学研究会 編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学—言語とタイポロジーへの 試論』大修
館書店
- 井上京子（2003）「意味の普遍性と相対性」『シリーズ認知言語学入門<第3巻>認
知意味論』大修館書店
- 改田明子（2014）「知識と思考」『新・知性と感性の心理—認知心理学最前線—』
福村出版
- 影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版
———（2008）「語彙概念構造（LCS）入門」『レキシコンフォーラム No.4』ひ
つじ書房
- 河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社
- 川畑秀明（2010a）「認知発達」『認知心理学』有斐閣
———（2010b）「感性認知」『認知心理学』有斐閣
- 黒田航（2003）「認知形態論」『シリーズ認知言語学入門<第2巻>認知音
韻・形態論』大修館書店
———（2009）「<構文は意味と形式の対である>と言うとき、その“形式”とはな

んのことか？」

<http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/against-constructive-polysemy.pdf>

—— (2010) 「改心の理由—私が (突然) 意味タグづけの研究なんかを始めたわけ—」 <http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/change-of-mind.pdf>

—— (2011) 「一般化の述べ方について—いかに“過小”般化と“過大”般化を避けて最適な一般化を達成するか—」

<http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/how-to-state-generalizations.pdf>

—— (2015) 「多義 (性) ネットワーク分析を実験研究と整合させるには、どうしたら良いか？」

<http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/ontology-of-polysemnet-ja.pdf>

黒田航、中本敬子 (2008) 「階層化された意味フレームのネットワーク分析 (HFNA) は単なるネットワーク分析ではない—FOCAL 流の言語分析／概念分析の理論と実践の背景説明」

<http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/beyond-network-model.pdf>

児玉一宏・野澤元 (2009) 『<講座 認知言語学のフロンティア⑥> 言語習得と用法基盤モデル—認知言語習得論のアプローチ—』 研究社

李臨定 (宮田一郎訳) (1993) 『中国語文法概論』 光生館

丸尾誠 (2005) 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 白帝社

—— (2014a) 「方向補語の用法に見られる中国人の発想」 日本大学大学院特別講義

—— (2014b) 『現代中国語方向補語の研究』 白帝社

松岡和夫 (2014) 「心的イメージ」 『新・知性と感性の心理—認知心理学最前線—』 福村出版

松本曜 (2003a) 「認知意味論とはなにか」 『シリーズ認知言語学入門<第3巻> 認知意味論』 大修館書店

—— (2003b) 「語の意味」 『シリーズ認知言語学入門<第3巻> 認知意味論』 大修館書店

—— (2010) 「多義性とカテゴリー構造」 『ひつじ意味論講座 第1巻 語・文と文法カテゴリーの意味』 ひつじ書房

三浦佳世 (2007) 『心理学入門コース 1 知覚と感性の心理学』 岩波書店

榎山洋介 (2009) 『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』 研究社

—— (2010) 『認知言語学入門』 研究社

榎山洋介・深田智 (2003) 「多義性」 『シリーズ認知言語学入門<第3巻> 認知意味論』 大修館書店

森宏子 (1998) 「“从”の空間認識」 『中国語學』 vol.245

- 森敏昭（1995）「日常世界と認知心理学」『グラフィック認知心理学』サイエンス社
- 中本敬子、李在鎬、黒田航（2011）「実証的な認知言語学研究とは何か」『認知言語学研究の方法 内省・コーパス・実験』ひつじ書房
- 日本語文法学会（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 西村義樹・野矢茂樹（2013）『言語学の教室』中公新書
- 野矢茂樹（2006）『入門！論理学』中公新書
- 尾上圭介・木村英樹・西村義樹（1998）「二重主語とその周辺」『言語』大修館書店
- 大島吉郎（2013）「存在文における発話の意図に関する若干の考察—動詞“有”の例を中心に—」『大東文化大学外国語学研究（第14号）』
- 大谷直輝（2012）「“John walked over/under the bridge”に関する一考察—文法の身体的な基盤と百科事典的意味—」『言語研究』
- 尾谷昌則（2011）「認知言語学と構文文法」『構文ネットワークと文法—認知文法論のアプローチ—』研究社
- 都築誉史（2010）「知識の表象と構造」『認知心理学』有斐閣
- 大村政男（2006）『図解雑学 心理学』ナツメ社
- 申亜敏（2005）「中国語の自他と結果表現類型—日本語・英語との対照から—」『レキシコンフォーラム No.1』ひつじ書房
- 杉村博文（2012）「中国語における姿勢形成と空間移動—終端プロファイリングによる系列動作統合の視点より—」『日中理論言語学の新展望2 意味と構文』くろしお出版
- 鈴木康之（2011）『現代日本語の連語論』日本語文法研究会（彭广陆、毕晓燕 译.2013《现代日语词组学》北京大学出版社）
- 高橋弥守彦（2001）「動補連語“走出来”について」『外国語学研究』第2号 大東文化大学大学院外国語学研究科
- （2002）「移動を表す動補連語“走进来”について」『外国語学研究』第3号 大東文化大学大学院外国語学研究科
- （2008）「日中両言語の語順について」『日中言語対照研究論叢』第10号 日中対照言語学会 白帝社
- （2012）「日中対照関係から見る“進+空間詞”について」《汉日语言对比研究论丛》（第3辑）北京大学出版社
- （2013）「中日対照関係から見る“出+空間詞”について」『外国語学会誌』No.42 大東文化大学外国語学会
- 田中茂範・松本曜（1997）『日英語比較選書6 空間と移動の表現』研究社
- 谷口一美（2003）『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社

- (2005) 『事象概念の記号化に関する認知言語学的研究』 ひつじ書房
 テイラー・ジョン、瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』 大修館書店
 辻幸夫 (編) (2013) 『新編 認知言語学キーワード辞典』 研究社
 山梨正明 (1995) 『日本語研究叢書第2期第1巻 認知文法論』 ひつじ書房
 ——— (1999) 「言葉と認知のダイナミクス」 『認識と情報』 京都大学学術出版
 会
 ——— (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版
 ——— (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』 大修館書店
 ——— (2012) 『認知意味論研究』 研究社
 山岡俊比古 (1996) 「言語の有標性と言語習得」 『言語表現研究』 12
 米山三明・加賀信広 (2001) 『英語学モノグラフシリーズ 17 語の意味と意味役割』
 研究社

中国語

- 陈忠 (2013) <及物句式的“结构-功能”变量对应关系及物同步机制> 《汉语句式研
 究与教学专题论文集》 北京语言大学出版社
 戴浩一 (黄河译) (1988) <时间顺序和汉语的语序> 《国外语言学》
 范洁清 (2003) <试论“上”与“下”的对称与不对称现象> 《平顶上师专学报》第6
 期
 范金玲・李红 (2003) <汉语空间方位词“上”与“下”不对称的认知语义分析>
 《外国语言文学研究》第3期
 黄育红 (2004) <现代汉语“V进NP里”格式> 《湖南社会科学》
 古川裕 (2002) <“起点”指向和“终点”指向的不对称性及其认知解释> 《世界汉
 语教学》总第61期
 候精一・徐枢・张光正・蔡文兰编 (2001) 《中国语补语例释 (日文版)》 商务印书
 馆
 Lamarre, Christine (2003) <汉语空间位移时间的语言表达: 兼论述趋势的几个问题>
 雷涛 (1993) <存在句的范围、构成和分类> 《中国语文》第4期
 刘月华、潘文娱、故鞞 (2001) 《实用现代汉语语法 (增订本)》 商务印书馆
 刘月华主编 (1998) 《趋向补语通释》 北京语言文化大学出版社
 吕叔湘 (1979) 《汉语语法分析问题》 商务印书馆
 ——— (1982) 《中国文法要略》 商务印书馆
 吕叔湘主编 (1999) 《现代汉语八百词 (增订本)》 商务印书馆 (牛島徳次・菱沼透 監
 訳 (2003) 『中国語用例事典』 東方書店)
 钱旭菁 (1997) <日本留学生汉语趋向补语的习得研究> 《世界汉语教学》

- 全力波（2006）〈关于“动+出+宾+来”中的动词制约性〉《湖南科技大学学报》
- 商怡（2014）〈“上”和“下”在“V+上/V+下”中的不对称现象研究〉
《牡丹江大学学报》第23卷
- 邵敬敏（2004）〈动宾组合中的制约与反制约关系—以“进NP”结构分析为例〉《暨南大学华文学院学报》第一期
- 沈家煊（1995）〈“有界”与“无界”〉《中国语文》第5期
- （1999）《不对称和标记论》江西教育出版社
- （2004）〈再谈“有界”与“无界”〉《语言学论丛》第三十辑
- 宋玉柱（2010）《现代汉语存在句》语文出版社
- 史锡尧（2001）〈“出”“入”语素义分析—在《现代汉语词典》释义基础上的再探索〉
- 王素梅主编（2001）《外国留学生学习汉语疑难例解》春风文艺出版社
- 王灿龙（2010）〈存现句句法结构动因的多角度考察〉《语法研究探索（十三）》中国语文杂志社
- （2006）《认知语法概论》上海外语教育出版社
- 王寅（2011）《什么是认知语言学》上海外语教育出版社
- 张贤亮、范晓等（2010）《现代汉语存在句研究》中国社会科学出版社
- 周统权（2003）〈“上”与“下”不对称的认知研究〉《语言科学》第1期
- 宗守云（2004）〈“进+处所宾语”和“去+处所宾语”〉《汉语学习（6）》
- 朱德熙（1982）《语法讲义》商务印书馆（杉村博文·木村英樹訳（1985）『文法講義—朱德熙教授の中国文法要説』白帝社）
- 赵元任 吕叔湘译（1979）《汉语口语语法》商务印书馆

英語

- Andrea, Tyler and Vyvyan, Evans. 2003 : *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*. Cambridge (国広哲弥監訳 (2005) 『英語前置詞の意味論』研究社)
- Chao, Y. R. (赵元任) 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press. (吕叔湘译 (1972) 《汉语口语语法》商务印书馆)
- Cruse, A. & Croft. W. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge.
- Evans, Vyvyan and Melanie Green (2006) *Cognitive linguistic: An introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fillmore, C. 1972. How to know whether you're coming or going , In *Linguistik 1971: Referate des 6. Linguistischen Kolloquiums 11.-14. August 1971 in Kopenhagen* , K. Hyldgaard-Jensen (ed.), 369-379. Frankfurt: Athenäum Verlag.
- Goldberg, Adele. E. 1995. *Constructions. A Construction Grammar approach to*

- argument Structure*. University of Chicago Press. (河上誓作等訳 (2001) 『構文文法論－英語構文への認知的アプローチ』 研究社、吴海波 2007 译. 《构式:论元结构的构式语法研究》 北京大学出版社)
- Goswami, U. 1998 *Cognition in children*, Psychology Press. (岩男卓実・上淵寿・小池若葉・富山尚子・中島伸子 (2003) 『子どもの認知発達』 新曜社)
- Ihara, H., & Fujita, I. 2000. A cognitive approach to errors in case marking in Japanese agrammatism: The priority of the goal –ni over the source –kara. In F. V. d. L. A. Foolen(Ed/), *Constructions in Cognitive Linguistics: Selected papers from the fifth international cognitive linguistics conference*. Amsterdam. Benjamins.
- Ishibashi, M. 2012. The expression of ‘putting’ and ‘taking’ events in Japanese. The asymmetry of Source and Goal revisited. *Events of Putting and Taking A crosslinguistic perspective*. Amsterdam. Benjamins.
- Jackendoff, R. 1983. *Semantics and cognition*. Cambridge: MIT PRESS.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press. Cambridge, MA.
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Univ. of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅之訳.1991. 『心のなかの身体－想像力へのパラダイム転換』 紀伊國屋書店)
- Kosslyn, S. M., Ball, T. M., & Reiser, B. J. 1978. Visual images preserve metric spatial information: evidence from studies of image scanning. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 4, 47-60
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Univ. of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之訳.1993. 『認知意味論－言語から見た人間の心』 紀伊國屋書店)
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980 *Metaphors We Live By*. Univ. of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店)
- Lakoff, G. and M. Turner. 1989. *More than Cool Reason*. Uni. Of Chicago Press. (大堀俊夫訳 (1994) 『詩と認知』 紀伊國屋書店)
- Lakusta, L. & Landau, B. 2005. Starting at the end: *The importance of goals in spatial language*. *Cognition* 96.
- Lakusta, L. 2005. *Source and Goal Asymmetry in Non-Linguistic Motion Eventrepresentations*. Ph.D. thesis, Johns Hopkins University.
- Lakusta, L., Wanger, L., O’ Hearn Donny, K., & Landau, B.2003. Conceptual foundations of spatial language: The importance of goals in motion events. *Poster presented at the biennialmeeting of the international society on infants studies*, Chicago, IL.

- Lakusta, L. & Susan Carey. 2015 Twelve-Month-Old Infants Encoding on Goal and Source Paths in Agentive and Non-Agentive Motion Events *Language Learning and Development*. Department of Psychology.
- Langacker, R. W. 1987a. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. I, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press. (牛保义、王义娜、席留生、高航译《认知语法基础(第一卷)理论前提》.2014 北京大学出版社)
- Langacker, R. W. 1987b. Nouns and Verbs. *Language* 63 (1) : 53-94
- Langacker, R. W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. Cognitive Linguistics Research 1
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol II, Descriptive application*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter
- Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford Univ. Press. (山梨正明監訳 (2011) 『認知文法論序説』研究社)
- Langacker, R. W. 2009. Possession, location, and existence. *Investigations in Cognitive Grammar*. Mouton de Gruyter / John Benjamins.
- Lee, D. A. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (宮浦国江訳 (2006) 『実例で学ぶ認知言語学』三水社)
- Leslie, Alan M. 1988. "The Necessity of Illusion : Perception and Thought in Infancy." In: L. Weiskrantz (ed.) *Thought without Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Lindner, Susan. 1981. *Lexico-semantic analysis of English verb-particle constructions with up and out*. Ph.D. dissertation, University of California, San Diego.
- Mandler, J. M. 1992. "How to build a baby II: Conceptual Primitives." *Psychological Review* 99
- Nam, S.2004. Goal and source: asymmetry in their syntax and semantics. Paper presented at the Workshop on Event Structure, March, 2004, Leipzig, Germany.
- Noam Chomsky 2004. *The Generative Enterprise Revisited: Discussions with Riny Huybregts, Henk van Riemsdijk, Naoki Fukui and Mihoko Zushi*. Mouton De Gruyter (福井直樹・辻子美保子訳 (2011) 『生成文法の企て』岩波書店)
- Noam Chomsky 2015. *What Kind of Creatures Are We?*. Columbia Univ Pr (福井直樹・辻子美保子訳 (2015) 『我々はどのような生き物なのか——ソフィア・レクチャーズ』岩波書店)
- Shepard, R. N. & Metzler, J. 1971 Mental rotation of three-dimensional objects. *Science*, 191. 701-703

- Slobin, Dan L. 2004 The Many Ways to Search for a Frog: Linguistic Typology and the Expression of Motion Event. In Sven Strömquist and Ludo Verhoeven (eds.) *Relating Events in Narrative: Vol.2 Typological and Contextual Perspectives*, PP. 219-257. Mahwah, Nj: Lawrence Erlbaum Associates.
- Tai, James. 1984. Verbs and times in Chinese: Vendler's Four Categories. *Papers from the Parasession on Lexical Semantics*. Chicago Linguistic Society.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns: *Semantic structure in lexical forms. Language typology and syntactic description, Vol.3, Grammatical categories and the lexicon*, ed. Tim Shopen. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Towards a Cognitive Semantics*. 2 vols. Cambridge, MA: MIT Press.
- Taylor, J. R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford Univ. Press
- Taylor, J. R. 2012. *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford Univ. Press.

用例出典

- 媒体语言语料库 (<http://ling.cuc.edu.cn/RawPub/>)
- BCC 语料库 (<http://bcc.blcu.edu.cn/>)
- 人民网检索 (http://search.people.com.cn/rmw/GB/bkzzsearch/dj_index.jsp)
- 北京大学中国语言学研究中心语料库 (http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)
- 语料库在线 (<http://www.cncorpus.org/index.aspx>)
- 『白水社 中国語辞典』白水社
- 孟琮、郑环德、孟庆海、蔡文兰编 (1999) 《汉语动词用法词典》商务印书馆

索引

【あ行】

位置変化 2, 3, 8, 9, 19, 20, 21, 22, 24, 40,
42, 76, 83, 84, 91, 92, 97, 102, 103, 104,
117, 123, 130, 131, 132, 133, 134, 138,
139

移動事象 1, 17, 21, 22, 23, 24, 43, 45, 49,
52, 83, 135, 136, 137

意味拡張 39, 40, 41, 42, 80, 84, 91, 98,
102, 103, 104, 117, 123, 133, 136

意味役割 3, 23, 24, 43, 52, 57, 59, 65, 67,
68, 88, 92, 97, 98, 102, 110, 112, 116,
117, 122, 123, 137, 138, 139, 140

イメージ・スキーマ 21, 38, 39, 40, 136

イメージ論争 38

衛星枠づけ 45, 68, 137

【か行】

解釈 7, 16, 25, 26, 35, 37, 45, 79, 89, 91,
98, 100, 117, 120, 124, 125, 136

概念化者 25, 29, 30, 34, 40, 42, 73, 80,
82, 90, 111, 112, 130, 136

概念構造 76, 77

カテゴリー化 91

記述的一般化 71, 81

規則の体系 16

客観主義的言語観 13

客観的移動 33

旧情報 132, 133

区域 28, 32, 65

ゲシュタルト 14, 29

結果重視 90, 111

語彙意味論 4

語彙概念構造 4, 5

コピュラ 2, 132

【さ行】

参照点構造 34, 69, 72, 73, 74, 75, 76, 77,
81

使役移動 4, 10, 53, 54, 55, 56, 57, 60, 67,
84, 86, 95, 97, 102, 104, 106, 107, 114,
117, 123, 127, 138

自主移動 54, 55, 56, 57, 59, 63, 67, 85,
86, 92, 97, 102, 104, 105, 107, 112, 117,
123, 127, 138

主観的移動 33

馴化（脱馴化） 18

状態変化 19, 20, 22, 24, 40, 77, 83, 91,
102, 103, 119, 123, 128

情報構造 132, 134

自律的 16

新情報 132

身体性 14, 16, 98, 117

心的走査 26, 32, 33, 34, 37, 42, 73, 77,
136

心理的实在性 136

垂直移動 45, 57, 58

水平移動 36, 46, 57, 58

スキーマ 15, 21, 24, 32, 37, 38, 39, 40,
41, 42, 91, 98, 99, 101, 102, 117, 118,
121, 123, 124, 128, 130, 136, 138, 139

生成文法 12, 13, 16, 136

前景（前景化） 29, 82, 118

前言語段階 17

存現文 6, 23, 43, 69, 70, 71, 72, 73, 74,
75, 76, 77, 79, 81, 137, 139, 140

存在事象 1, 22, 23, 24, 43, 69, 83, 135,
136, 137

存在文 69, 70, 71, 74, 75, 76, 78, 79, 81,
137

【た行】

多義性 39, 91, 142

直示 19, 44, 47, 49, 83, 103

通過 11, 32, 46, 56, 57, 58, 62, 63, 67

動機づけ 11, 12, 41, 42, 52, 84, 88, 90,
91, 98, 100, 101, 103, 104, 110, 117, 119,
120, 121, 128, 134, 137, 139

動詞枠づけ言語 45

同等枠づけ言語 46, 137

トラジェクター 28

【な行】

認知意味論, 24, 40, 41, 84, 103, 137, 139,

認知言語学, 1, 12, 13, 14, 16, 17, 19, 20,
23, 24, 25, 38, 39, 42, 43, 69, 72, 81,
131, 135, 136, 137, 139, 140

認知主義的言語観, 13

認知心理学, 14, 21, 39, 41, 73, 136

認知的際立ち, 26, 28, 29, 34, 42, 73, 74,
118, 133, 136

ネットワーク・モデル 91

【は行】

パースペクティブ 26, 34, 37, 42, 58, 69,
75, 80, 136, 137

背景（背景化） 1, 12, 22, 23, 25, 26, 29,
42, 52, 57, 118, 133, 135, 136

パラフレーズ 84, 85, 86, 104, 105, 107,
127, 132, 133, 134, 138, 139

非対称性 1, 2, 3, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 17,
19, 20, 22, 23, 24, 28, 83, 124, 128, 131,
132, 133, 134, 135, 136, 138, 139, 140

複合動詞 20, 37, 47, 90, 111

複雑系 16

付随要素 19, 20, 23, 43, 44, 46, 47, 52,
53, 54, 56, 57, 67, 69, 83, 97, 102, 103,
137, 139

プロセス 15, 25, 30, 32, 37, 42, 52, 66,
76, 77, 78, 79, 81, 99, 136, 137

プロフィール 26, 27, 28, 30, 31, 32, 37,
42, 52, 53, 57, 58, 59, 60, 62, 63, 64, 66,
67, 68, 69, 75, 76, 78, 79, 81, 90, 136,
137

ベース 26, 27, 28, 31, 32, 37, 42, 52, 56,
66, 68, 69, 75, 81, 136, 137

変化事象 1, 134

包含 21, 22, 37, 38, 39, 40, 98, 99, 100,
117, 119, 121, 139

方向補語 20, 44, 45, 47, 68, 83, 88, 137

【ま行】

マクロ 3, 6

ミクロ 3, 6, 24, 136

無標 9, 84, 132, 134

モジュール 4

【や行】

有標 9, 104, 125, 132, 134, 138

容器 21, 25, 26, 38, 39, 91, 98, 99, 102,
117, 118, 120, 121, 122, 123

用法の体系 16, 17, 136

【ら行】

ランドマーク 28, 32

離散無限性 16

立脚点 34, 35, 36, 47, 48, 86, 107

領域 11, 12, 27, 28, 30, 34, 36, 41, 52, 73,
74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 98, 99,
100, 101, 117, 119, 137

ルビンの壺 29

連続性 24, 124, 128, 129, 130, 131, 132,
134, 139

謝辞

言うまでもなく、本博士論文は多くの方の協力が無ければ成し得なかったであらう。まず、浅学非才の私に対し、常に寛容な態度で接して下さった高橋弥守彦先生(大東文化大学教授)に感謝したい。

鈴木康之先生(大東文化大学名誉教授)は、言葉少なくとも、常に私の意図をくみ取り、適切な助言を頻繁にしていた。

大島吉郎先生にも感謝したい。大島先生の授業を初めて受けたのは、09年の時だった。授業では《阿Q正伝》を精読し、文法研究のノウハウを叩き込んでいただいた。

李所成氏(北京外国語大学)、張曉東氏(浙江工商大学東方語言文化學院)、洪安瀾さん(閩南師範大學)などネイティブからの意見も大変参考になった。李所成氏からは認知言語学の見地から、張曉東氏には日本語学の見地から、洪安瀾さんからはネイティブとして、本研究への率直な感想を聞かせてもらった。

石毛達也君(アジア国際語学センター)にも感謝したい。ある日、私は彼を無理やり誘い、Langacker(2008)(実際には訳本(山梨正明監訳(2011))だが)を輪読し始め、読了を目指し、今も週に一回勉強会を開いている。

本論中では全面的に押し出されていないが、本研究の足がかりは連語論である。修士課程は、“了”と使用される言語環境を整理した。修士課程修了後は、連語論の「とりつけのむすびつき」と「とりはずしのむすびつき」を研究したらどうかと、高橋先生から進言をいただき、連語論を突き詰めていった結果、本研究のテーマである「内外への変化の非対称性」というテーマにいきついた。

研究も人との出会いと同じで、「一期一会」を大切にすると、自ずと道が開けてくるものである。本研究は、高橋先生と連語論を信じて突き進んできた一つの結果だと信じて疑わない。

